For Lost You　奪われたあなたへ

悠風詩仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｏｒ　Ｌｏｓｔ　Ｙｏｕ　奪われたあなたへ

【Ｎコード】
Ｎ２４６４Ｍ

【作者名】
悠風詩仁

【あらすじ】
愛さえあれば、全て許されると思っていた。
愛する強さがあれば、全てを乗り越えられると思っていた。
愛を信じていれば、全て忘れられると思っていた。

愛さえあれば、人を愛し信じ抜く強ささえあれば――

だから壊した。
この偽善と欺瞞にまみれた世界が、大切なあなたの魂を汚してしまったから。

ある事件の記録（前書き）

初連載です。
ファンタジーの体裁を取っていますが、従来の幻想世界を描いたものとは毛色が違いすぎるきらいがあるかも分かりません。
王道的なモチーフには期待しないで下さい。
残酷描写が濃い作品ですので、苦手な方ご注意下さい。

ある事件の記録

王国歴五〇二年（大陸歴四六三四年）
『アムール村封印解放事件』に関する詳細報告書
※本事件は別名、『アムール村少年惨殺事件』と呼称されることがあるが、事件当時被疑者が未成年であり社会復帰の妨げになることから、この呼称は適切でないものとして以後広く伝わっている前者の事件名を使用することを断わっておく。

王国歴五〇〇年（大陸歴四六三六年）、西ナサニエル地方の穏やかな田舎村アムールにて、同村出身の少年フィリップ・クレメンタイン（一三才）が村外れの森深くに古くから存在する、『闇獣の祠』前にて遺体で発見された。

発見時、フィリップの全身は激しく棒状の凶器で殴打されたような跡があり、頭部からつま先まで激しい損傷を受けたのか無数の打撲と骨折により手足がねじ曲がり、さらに大量出血で遺体が血の海に横たわっているという見るも無惨な状態であった。

特に頭部は頭蓋骨の陥没骨折に眼球破裂などで激しく腫れ上がり、身元確認に難航した。さらに数百年前、アムール村の術士によって厳重に封印を施されていたはずの祠が何者かの手で意図的に解放されており、被害者の遺体には同祠に封印されていた『闇獣』の痕跡が色濃く残っていた。しかし取り憑き宿主としていた被害者が激しい損傷を受けたせいで共に致命傷を与えられたのか、衰弱した状態の闇獣が祠の奥深くで発見された。

すぐにこれ以上の被害が及ばないよう、駆けつけた教会関係者の手によって祠は厳重に封印され、闇獣が野に放たれる危険性は消滅した。なお、闇獣に関する被害は同獣が封印される直前に起きた老夫婦殺害事件以来、実に数百年ぶりのことであった。

事件の調査に当たった騎士団及び教会関係者は、フィリップ少年

が祠の解放を巡る事件に何らかの形で巻き込まれたものとして調査。折しも国は建国記念五〇〇年の祝祭に活気づいており、近隣住民に衝撃が走った。その幼い死に村は深い悲しみに包まれ、被害者の両親であるクレメンタイン夫妻、特にソフィー夫人の悲観は相当なものであった。

早急な事件解決が叫ばれる中、事件発生より二日後――被害少年の友人であり事件直後から不審な様子を見せていた、アムール村在住一二才の少年がフィリップ少年殺害の罪で騎士団に拘束された。

何の罪もない少年を惨たらしく撲殺した犯人が被害者とほとんど変わらない年端もいかない少年であったことと、同じアムール村出身であったことに周辺住民に激しい衝撃が走った。あまりに常軌を逸した事件であるとして、王国上層部から徹底した情報隔離を命じられ、現場周辺一帯に厳しいかん口令が敷かれた。騎士団の厳しい監視の中事件を表立って口にする者はおらず、住民は暗い影の中事件の全容が解明されるのを待った。

騎士団側は被疑者の身分よりも周囲にもたらした影響及び事件の残虐性を重視し、拘束した被疑者の少年を厳しく追及し事件の早期解決を図った。しかし教会側は被疑者の人権と更正を重視すべきという意見を主張し、両者の間に摩擦を起きた。結局騎士団側は教会の姿勢に苦言を呈しながらも、事件を起こしたことに精神的な衝撃を受けほとんど証言が出来ない状態の被疑者少年の精神的介護を優先すべきと判断、少年は教会関係者によって大陸内でも有数の感化院へ護送された。

数週間に渡る教会関係者の尽力により、少年は落ち着きを取り戻し自身の起こした事件の重要性を自覚。激しい罪悪感に苛まれながらも少しずつ事件の全容を証言するようになった。

事件当日、被疑者の少年は友人であった被害者の少年をいつものように遊びに誘い、村外れの森に探索へ出かけた。事件現場となった森では既出の通り、『闇獣』という周辺住民を襲い殺傷する凶暴な魔物が厳重に封印されている祠が存在し、周辺住民、特にアムー

ル村では子供達に決して近づいてはならないと長年に渡り釘を刺されていた。
しかし子供の好奇心と冒険心が災いしてか、被疑者少年は被害少年に祠へ乗り込もうと誘い――いわば『肝試し』感覚で闇獣を確かめに行こうと提案してきた。当然のことながら被害少年は二の足を踏んだものの、年齢では一つ下である被疑者少年が臆病者とからかったことで激昂、誘いに乗る形で二人の少年は近づくことを禁止されている祠前へ向かう。
以前より子供達が興味本位で祠へ近づくことが度々問題視されてきたか、どの子供達も足を運んでも厳重に封印され決して開けることの出来ない祠入り口に肩すかしをくらい、または祠に漂う不浄で不穏なる雰囲気に恐怖し何も出来ず村へ引き返すといった事例ばかり起きていたため、それ以上大きな問題として取り上げられることはなかった。
しかし数百年の年月により封印の力が弱まっていた事実に気づいていた者はおらず、人々は十年ほど前に村の術士の末裔によって一度封印をかけ直されていたことですっかり安心していたようだ。その後の調査で、その封印が術士の力量不足によって不完全なものであったことが判明している。
こうした不手際により封印が弱まったままの祠に二人の少年が近づき、被疑者少年にあおられる形で被害少年は祠の扉に手を伸ばし、封印の弱体化によって開かれてしまった祠内部へ侵入し、内部に潜んでいた闇獣の襲撃に遭った。そして闇獣に肉体を乗っ取られた被害少年は暴走を始め、被疑者少年に襲いかかった。闇獣が人を襲い肉を食らうだけでなく、時折人の肉体に寄生し人を襲わせるといった事例は少数だが報告されており、今回の事件はさらに不運が重なったものであると言える。
友人である被害少年の想像を絶する豹変ぶりと、闇獣の恐ろしさに激しい生命の危機を感じ冷静な判断力を失った少年は、ただ己の身を守るため祠にかけられていた閂を手に襲いかかってきた被害少

年を殴打した。
　その時の記憶はなく、ただ腕を振り下ろして肉や骨が折れる嫌な感触だけは残っていると被疑者少年は証言している。教会関係者から被害少年の遺体の惨状を聞かされた少年は泣き崩れ、三日三晩泣き通しだったという。
　その後被疑者少年は鬥を持ったまま無我夢中で逃走、村へ戻る途中我に返り自身が血まみれであることと、被害少年の髪や血、肉片がこびりついた鬥を手にしていることに恐怖を抱き、近くの川に鬥を廃棄、全身についた血を洗い流した。汚れた衣服も捨てようと思ったがいきなり裸で村へ帰っても怪しまれると思い、人目を避けるよう生家へ帰宅。幸いにも家族は外出しており、被疑者少年は衣服を自宅の物置部屋奥へと隠し着替えを済ませ、その後母親と何事もなかった様子で接している。数時間経ち被害少年の母親が息子の不在を騒ぎ、やがて周辺住民や教会関係者、騎士団の知る所となった。
　騎士団側は無事事件の全容が解明されたことで、被疑者少年を改めて事件性の大きさから厳罰に処すよう提言したが、事件は本来ならば防げたはずであったこと、周囲の大人達の不手際による所が大きいこと、何より被疑者である少年が深く反省しておりアムール村及び周辺住民が減刑を求める嘆願声明を出していることを主張し、少年を正規の刑務施設ではなくそのまま拘留中の感化院で社会復帰の教育を受けさせることを強く願い出た。騎士団や事件を知る極少数の外部から反発の声があったものの、教会の熱心な説得により被疑者少年の更生を最優先させる結果となった。
　被疑者少年は感化院で教会関係者、院内の教育者や外部の支援者に支えられ二年後、無事社会復帰を認められ生まれ故郷であるアムール村へ帰還することとなった。彼の帰還を両親や村の人々は温かく迎え入れ、元来心優しく真面目で村中の人々から信頼されていた被疑者少年は、事件後も自分を受け入れてくれた村の人々に深く感謝し、以後家族を支える働き者となり一層慕われる好人物となった。
　被害少年の両親も悲しみを乗り越え、被疑者少年が亡くなった息

子の分まで精一杯生きることを望むと声明を発表している。十年前の封印に失敗した術士も罪に問われ厳罰を求める声が上がったが、この人物も村人の嘆願により無罪放免となり、以後立派な術士としてアムール村で生活している。

事件後、祠に足を踏み入れる子供達はいなくなり、被害少年の墓標が代わりに建てられた。被害少年の犠牲が結果的に教訓となり、周辺住民に安全な生活を送らせる大きなきっかけともなった。なお、この事件はその後被疑者少年の更生を重視する教会側より情報漏洩を徹底的に回避されたことが功を奏したのか、社会復帰後の少年は順調に更正の道を歩んでいるという。

＊

王国歴五一八年（大陸歴四六五四年）
『アムール村壊滅事件』に関する詳細報告書
（別名『黒き殺人鬼ブレイク事件』）

王国歴五一六年、西ナサニエル地方の小さな田舎村アムールにて、村在住の若い男が村人を大量殺戮する事件が発生。

穏やかな宵闇に包まれた村内未明、同村出身のウイリアムス・ブレイク（二八才）が自宅にて就寝中だった妻ポーリーン（二九才）と長男ステファン（五才）、長女シャーリー（二才）を殺害。続いて近所に住む実の両親ハワード・ブレイク（五四）とメアリーベル・ブレイク（五〇）を惨殺。被害者は皆メアリーベルを除いて抵抗の痕跡がなかったことから、就寝中を襲われたものと見られている。

さらにブレイクは二件の家に起きた異変を察知し駆けつけた数名の村人、及び異変に気づき逃げ出そうとした村人に恐怖で家に閉じこもっていた村人など、多数の村人を無差別に襲い明け方前には村を壊滅状態に至らしめた。事件の発生を知り駆けつけた騎士団が現場に到着した頃には犯人は逃走し、惨劇が過ぎ去った後の村の惨状

は見るもおぞましいものであった。
共に駆けつけた隣村の住民の一人が、「悪魔の仕業でないかと思えるほど残虐な現場であった。戦争が起きたのかと思った」と青ざめた表情で証言している。
さらに犯人の放火によるものか事件時火の手も上がっていたようで、既に鎮火していたものの村の半分が焼け落ち、被害者遺体の損傷などで一部証拠が消失し調査を難航させる要因にもなった。
死亡した被害者は全て、固く丈夫な角材のようなもので何十、ひどいものは百回以上もの殴打を受け全身骨折、内臓破裂、頭部への致命的な損傷を受け大量出血の後死亡したものと推測された。そのほとんどが苦痛の顔を色濃く浮かべたまま息絶えた様子であったため、激しい苦痛を存分にもたらされながら死に至ったものと推測され、犯人のあまりに非人道的な行為に戦で死線をくぐり抜けてきた騎士団の面々も顔面蒼白になるほどであった。
なお、この膨大にして尋常ならざる被害者の人数に考慮し、被疑者の殺害された親族を含む犠牲となった村人や、アムール村そのものに関する詳細な情報は、別途作成された報告書を参照するよう断りを入れておく。
調査に当たった教会関係者は、ブレイクが何らかの形で精神に激しい混乱を引き起こし、衝動的に他者を傷つけたいという歪んだ欲望に支配され（曰く、悪魔など闇に従属する邪悪な存在に取り憑かれた）今回の凶行を引き起こしたと推測した。しかし共に調査に当たった騎士団側はこの推測を真っ向から否定。あまりに凄惨の度を超えた事件を起こした人物を肩入れするような教会側と激しい摩擦を起こし、さらに被疑者であるウイリアムス・ブレイクが一六年前に起きた『アムール村封印解放事件』（別名『アムール村少年惨殺事件』）の被疑者少年であったという事実も引き合いに出され、世間に衝撃と波紋が広がる結果となった。
一六年前、当時アムール村在住の一二才の少年であったブレイクは、被害者である同村在住のフィリップ・クレメンタイン（一三）

と村外れの『闇獣の祠』に出向き、封印の不手際により解放された闇獣に取り憑かれ暴走したフィリップ少年を殺害。全身を激しく殴打し、苦痛を与える形で死に至らしめたという手口が今回の事件と非常に酷似していたため、ブレイク少年の処遇を中心となって決定した教会に激しい批判が集中した。

当時被疑者が、まだ成人に達していなかったため更正の余地と将来への可能性を考慮したこと、本人が深く反省していたこと、何より被害者家族を含むアムール村住民の懸命な減刑を求める嘆願表明に応じての正しい処置だったと、教会上層部が世間に弁明したものの批判の声の沈静化には至らなかった。それどころかその釈明を聞かされたことによって、民衆はブレイクに厳罰を与えるよう意見を出しながらも教会の権威に屈した騎士団、当時建国記念祭に活気づいていたため世間に衝撃的な事件が起きたことを伝えず、国の権威と保身に走った国家、さらにブレイクに減刑を求めたアムール村住民への激しい批判運動へと発展する事態となった。

とりわけ生き残ったアムール村住民への風当たりは非常に苛烈なものであり、生き残ったわずかな被害者遺族のほとんどが世間から逃れるよう、保護に当たった教会関係者の元から行方をくらまし多数の証拠を逃す結果となった。何とか彼らから事件当時の証言を取ろうとしてもあまりにむごたらしい記憶を自ら進んで口にする者はおらず、事件解決とつながる証言を得ることは出来なかった。なお、逃亡した被害者遺族の中には成人に達していない青少年もいるため、その早急な保護を求められているが現在も消息は不明である。

事件直後から、騎士団と教会関係者が有力な手がかりを求め懸命にアムール村の捜索に当たったものの、物証は乏しく早々に調査は打ち切りとなり、調査は目下逃走中とされるブレイクへの捜索へと絞られた。

事件の影響でアムール村の人口は激減し、またあまりに衝撃的な惨劇が起こった土地を世間は忌み嫌い、迫害は被害者遺族だけでなく近隣の村にまで及び、周辺住民の人口が著しく激減する事態とな

った。国家は地域の過疎化を恐れ世間に不毛なる誹謗中傷を禁じたものの、人口減に歯止めが利かず、数ヶ月の後にアムール村は廃村となり現在も足を踏み入れる者はいない荒れ地となっている。

現在村中央であった場所には、想像を絶する悲劇を憐れみ犠牲者への鎮魂のためと、教会関係者と一部の有志によって慰霊碑が建てられていたが、何者かの手によって破壊されるという被害が何度も起こったため、現在破壊されたままの慰霊碑跡が残されているのみである。

なお、事件後も教会側は一六年前の事件で決定したブレイクへの処遇に誤りはなかったと反論しており、ブレイク少年は当時とても真面目で心優しい人物として村人から信頼されていた事実を強調していたが、今なお世間への厳しい批判を避けるためか、現在その事件に関しての意見を外部から求められても応じず、一切の沈黙を貫いている。

一晩のうちにたった一人で大量の村人を惨殺し、村を壊滅させるという悪魔のような所業を為しえたウイリアムス・ブレイクは歴史上名を残す殺人鬼として人々の名に深く刻まれることとなり、現在もその犯行には様々な憶測が流れている。本当に彼単独で行われた犯行なのかという意見も多いが、いずれにせよ未だに犯人とされるブレイクが逃走中であるため、それ以上の真実を知る手がかりはないのが現状である。

ちなみに、事件当時生き残った村人から得られた数少ない証言の中に、『全身が黒い煙に覆われ、血にまみれながらも不気味な笑みを浮かべて人々を手にかけていた』とブレイクの姿を証言していた者がおり、それが印象的なものとして人々に流布されたことで、ウイリアムス・ブレイクは『黒き殺人鬼』として人々から恐れられる存在となった。

なお、本事件以後発生した同一犯によるものと思われる数件の事件に関する詳細は、別途『黒き殺人鬼連続殺人事件』としてまとめられた詳細報告書を参照されたい。

再会

私はこれから、とある人物が己の全てをかけて刻んできたある記録を残そうと思う。私の名もその人物の名も、あえて語る必要はないだろう。

願わくば、今私が遺したこの文面を君が読んでいることを祈るばかりだ。未来や運命など、全ては神のみぞ知るとはよく言ったものだ。

私達は、ずっとそんなものと愚かな戦いを続けてきたのかもしれない。しかし後悔などしていない。いや、今さら何を吐き出したところで終わったのだ――君なら、必ず私達だと気づくだろう。そう期待させてもらおう。

時間はもうない。これ以上多くを語れないのが残念だ。奴らがもうすぐ現れる。どうか、必ずこれを見つけてくれ。

私達は、必ず待っている。

この暗闇の下――いつか君がまたここで帰ってくることを、いつまでも待っているから。

＊

おひさしぶりです。大切なあなた。

早いものですね、あなたがいなくなってからもう一年も経ってしまいました。時間は残酷なものです。あなたの存在などあってもなくても、変わらず動き続けていく。

そして、わたしたちの時間は二度と共に進むことは出来ない。

何度も手紙を出そうとしたけど、出来ませんでした。今こうしてあなたに気持ちを伝えるようになるまで、ずいぶん長い時間がかかってしまいました。寂しい思いをさせてごめんなさい。でもこれからは、こうしてずっとあなたにわたしの気持ちを伝えていきたいと

思います。
あなたに届いているか分かりませんが、わたしは書き続けていこうと思います。
あなたのことを忘れないために、何よりわたし自身がわたしの気持ちと向き合うために。
だからどうか、もしどこかでこのわたしの書いた日記を今こうして読んでいるのだとしても、どうかずっと見守っていてください。
忘れないで。
わたしだけはきっと、あなたを忘れたりしないから。

＊

準備はいいかと聞かれ、意識が戻ったような気がした。
隣にリックがいる。組織に流れ着いて以来、やたらとなれなれしく絡んできて、今もこうして唯一無二の親友面をするお調子者。あまりうっとおしい顔をすると周りがうるさいので、一応親友だと思っているふりをしている。
それでも、親友のくせしてヴァンはリックに冷たいと年下連中がうるさくてうっとおしい。正直、嫌いだと言ってしまえたらどんなに気が楽か。そんなこと言えば孤立する。
そんなのはごめんだ。金輪際うんざりだ。
その人のよさと人当たりのよさに免じて、今日もこいつが何を言っても何も不満に思わないでおいてやろう。リックはいい奴――周りの絶対的な評価を覆してまでこいつとの距離を置くつもりもない。いつものことだとあきらめるんだよ、ヴァン・スカイブルー。
ヴァン・スカイブルー。それがお前の名前なんだ。
さあ、また意識を集中させよう。
意識を集中し過ぎたようで、気づいたら全く知らない場所に立っている。
二年前からこんな調子だ。過酷な日々で培った処世術。苦悩から

合理的に逃れるために、こうして今日も生きている。
「行こうぜ――！！」
小声だが、力強いリックの声に押される形で身をかがめ、闇に包まれた廊下を音も立てずに進んでいく。今日も屋敷の扉は、リックお得意の錠前崩しで何の不都合もなく開かれた。
さあ、このまま誰にも気づかれず金目のものをごっそり盗んでとんずらしよう。
それが生きる糧。今日を生き、明日を生き、未来を生きる不遇なる子供達の生きる術。
貧しい下層の存在を嘲笑する歌だ――一度この歌を街ですれ違った裕福な家の子供に聞こえよがしに歌われ、激昂してその子供を突き飛ばし、危うく殴り殺しそうになった。
後からそんな自分の様子をリックから聞かされ、なぜか異様に涙が止まらなかった。
その日一日泣きじゃくって、数日間殴った子供の姿が目に焼きついて離れなかった。
自分より数才下で、背丈も体重も少なかった少年。突然もたらされた苦痛に顔を覆って泣き叫び、懸命に我が身を守るよう両腕で体を隠していた。
まるでこちらを、殺人鬼を見るような目で――。
「ヴァン、どうした？」
しっかりしろよと言った表情のリックがこちらの顔をのぞき込んでいた――慌てて普段の冷徹な顔を繕って返事をする。
お前、今日なんか調子悪いぞと背後にいる残りの仲間が不安げに話しかけてくる。一方的に大丈夫だと言い捨て、意識を『仕事』へ集中させる。
頭の中で一生懸命、自分の名前をつぶやいて叱責し、雑念から解放させる。
そして戻ってくる、冷静で子供らしくない狡猾さを持つ、謎の少年ヴァン・スカイブルー。

「行くぞ――」
何とか仲間の信頼を取り戻したところで、目的の部屋へ足を踏み入れようとした。屋敷は広大で発見の心配は少なく、万が一に備えられるような隠れ場所も多いが、やはり一部屋一部屋にあまり時間はかけられない。二手に別れ、捜索を始めようと指示を出した時――激しい悲鳴が起きた。
「！？」
瞬時に全員で凍りついた。
どれほどじめついた血なまぐさい裏道を歩いていても、やはり慣れない。まだ自分達が子供だと嫌でも実感させられるより前に、ただ恐怖だけが先走る。
ヴァン・スカイブルーだけは違う。
だからこそ、彼は年かさ連中に一目置かれ、同年代や年下の少年達をまとめる役回りを新参者の分際でたやすく獲得出来たのだ。
怯えながらも、そこには軽薄な好奇心しか見受けられないリックの間の抜けた表情を一瞥し、ヴァンは冷静な口調で様子を見に行く旨を告げ、リック以外の仲間を残し悲鳴の聞こえた方角へ向かった。
リックを同行させたのは、こんな状況でもやはり彼を信頼しているのだと、周囲にすり込むためだった。こんな状況だからこそ、単独行動は厳禁なのだ――個人主義は集団生活の秩序を軽んじる罪深き行為。生きることはとにかく面倒くさい。
場所は二階か――ヴァンは無理して平静で冷徹であろうとする背後の相棒を気にかけず、ゆっくりと音を立てずに階段を登る。
まったく、これが世間を騒がす盗賊団の次代を継がんとする若き後継者かね――確かに立ち回りも度胸も、逆境に負けぬ底意地も並の子供以上のものを持ち合わせているが、正直時折疑問に思う。
まあいい。致命的な失敗は大人でもやるのだと言い聞かせる――周囲の未熟ぶりを年長者に告げたところで、早熟な坊主の戯言だと聞き流されるばかりか、他者を見下す優越感の塊だと周囲から糾弾され孤立させられるのが落ちだ。

大事なのは、誰かの理想通りの自分であれ。
そうすれば、何があっても皆は味方だ。
二階に一歩足をつけた途端、よからぬ気配を感じた。
確かに先ほどの悲鳴は常軌を逸していたし、あの悲鳴の人物が最悪殺されたとしても不思議ではない。
それでも、どんな状況でも冷静であることを捨てるつもりもなければ余裕もない。
事実、何度か人の死に直面した時も、常でそうであるよう言い聞かせられてきたし、そうすることが最も正しいことだと散々教えられてきたし充分思い知ってもいる。
今起きていることも、同じことだ。
そうだろう？　ヴァン・スカイブルー。
「……どうした？」
リックの声ではっとさせられる。すぐに確かな足取りで先を進む。
収まったはずの悲鳴が、今度はか弱く痛々しいものへと変化していた。
続く殴打する音。
必死にやめてくれ、苦しいとか細く叫んではどんどん小さくなっていく、老婆の声。
嫌でもまた足を止めさせられるが、ヴァンは違った。
「なあ、やばいんじゃねえの……？」
背後のリックがそろそろ我慢出来ない恐怖をにじませ、相棒の背中に語りかける。
「俺だけで様子を見てくる。お前は仲間の所へ戻れ」
そして、少しでも何か危険を感じたら俺に構わずすぐ逃げろと言い添えて、ヴァンは現場へと確実に進んで行った。
「――待ってるからな」
大して気の利いた台詞を思いつかないまま、リックは足早に仲間の元へ戻った。それを見ることもないまま、ヴァンはまだしつこくか弱い老婆の声が聞こえる廊下の奥――一番奥の最も大きくて立派

な扉前まで、辿り着いた。
ふと、やはりこのまま引き返してリック達の元へ戻ろうかと思ったが、出来なかった。
なぜだか分からなかった。ただの好奇心にしては出来過ぎているような、誰かに操られているような、不可解な感覚。
罠だと察知し、きびすを返すことだって出来たはずだ。
それでも、扉に手をかけた。
異様な義務感に急き立てられるように、ヴァンは扉をゆっくりと開いた。
鮮血に染まった部屋の光景が目に飛び込んできても、その手を止めることは出来なかった。
老婆が、手足をだらりと垂らした状態で立派な椅子に座っていた。
体中を血に染めて――頭からつま先まで、容赦なく全身をつぶされた状態で事切れていた。
あまりに大きな力で殴打を繰り返されていたのか、そのしわだらけで弱々しい首や手足は折れ曲がり、切断寸前にまでなっていた。
そんな老婆の血を吸い上げ、見事な深紅へと様変わりした椅子と絨毯の側――じっと、大きく長い棒状のものを手にした人影が立ち尽くしていた。
気づけばヴァンは、その人影のすぐ近くにまで迫っている自分の体に気づいた。
体が勝手に進んでしまった。本来ならば、すぐ隠れるか見つかれば全力で逃げるはずなのに――ここでやっと、自分が常軌を逸した行動を散々やらかしていた事実に気づいた。
生命の危機を感じた。
すぐに老婆が恐ろしい殺され方をしたと戦慄し、今度こそきびすを返そうとした。
出来なかった。
人影の姿形がはっきりと目に飛び込み、閉じ込めていた記憶の奥底を激しく揺さぶったから。

それこそ激しく、殺意を持ったように。
「……嘘だ」
やっと口からこぼれた一言が、それだった。
姿形はおろか、顔もあの頃と何も変わっちゃいない。どれだけ記憶からしめ出そうとしても出来なかった。
それは生まれてからずっと、側にいたかけがえのない存在なのだから無理はなかった。
忘れたくても、出来なかった。
忌まわしい記憶が、今目の前に戻ってきていた。
あの頃と変わらない、憎悪と狂気、全てを超越したような衝動に突き動かされていた、おぞましい笑み。
悪夢が戻って来た。
目の前が真っ黒になっていく感覚に支配された。すぐに自分は意識を失いそうになっているのだと頭で感じたが、体をどうにかするまでには至らなかった。
そしてヴァンは、どす黒い暗闇に包まれたようなその人影が、自分の方へゆっくり近づいて来るのをわずかに感じた。
生命の危機を感じようにも、意識はすでに無の世界に飛ばされていた。

＊

『ジョシュア・ブレイクに関する詳細報告書』

王国歴五〇三（大陸歴四六三九）年西ナサニエル地方アムール村にて、父ハワード・ブレイク、母メアリーベル・ブレイク夫妻の次男として出生。両親は共に二年前に起きた『アムール村壊滅事件』により死亡。兄であるブレイク家の長男、ウイリアムス・ブレイクは事件の主犯として現在も逃亡中、各地で連続殺人を繰り返している事実が確認されている。現在ブレイク家で生き残っているのは彼

と次男のジョシュアのみである。
二年前の事件直後、奇跡的に無傷のまま自宅の物置で発見されたジョシュア少年は、一部教会関係者の手厚い懇意によって孤児院に保護された。しかし周囲の気遣いも虚しく同院に保護されていた他の子供達や周囲の大人達によって手ひどい差別を受け、自身の環境に耐えきれずある晩孤児院を脱走。以後行方知れずとなっている。
現在、一三年前兄ウイリアムスが起こした『アムール村封印解放事件』においても兄の更正と社会復帰に尽力した教会関係者パトリシア・クロフォードを中心として捜索が行われている。

＊

みんなが燃えている。
泣き叫んでいる。
想像を絶する恐怖と絶望。命を最も残酷な形で奪い取られ、魂を消滅させられる不条理に怒り狂い、最期まで叫び暴れ回ることをやめることが出来ないように、みんなはいつまでも目の前で踊り続けていた。
何も出来ない。ただ動けないまま絶望するだけ。
なぜ、こんなことが起きてしまったのだろうか。
それを知る術は永遠に見つからないのではないかと思えた――事実、月日が流れても一向にそれを知る術は得られていない。
真実は、決して拭えぬ闇の中か。
残された者は逃げるだけ。理不尽な嫌疑に迫害、残された者に残されたのは過去への激しい悲しみと後悔だけ。
そこに未来の希望などどこにあるのだろうか？
そして気づけば、同じ悪夢を繰り返す夜。目覚めた時、額どころか全身に流れ落ちる汗。平穏な日々を過ごした記憶は、もう遠い。
必ず、終わらせてみせる。手がかりがあるのだ――それはもうすぐ近くにある。

必ず、終わらせてみせる。
そして、愛する者達の無念を晴らすのだ。

＊

目が覚めた時、今までの出来事が全て悪夢だったらとよかったのにとまた考えた。
全て幻、自分は平和な村に住むただの村の子供に過ぎない。だから、何も怖がることはないんだ。
それを静かにあざ笑うような、灰色の天井が見えた。
すぐに気づいた。ここは牢屋なんだと。何度か世話になったことがあるから、嫌でもすぐ分かった。
なんて、なんて腐った人生なんだろう。
こんなはずではなかったなどと、思わない。なぜなら、自分の人生は生まれて来た瞬間に呪われていたのだから。
生まれてきてはいけない命など、ありはしない。生まれて来たことを否定してはいけない。
頭の中で嫌というほど響き渡る、慈愛に満ちた聖母ぶった声――振り払いたい。振り払って、バラバラにして、二度と元に戻れない位引き裂いて粉々にしてやりたい。
これが答えなのかよ？　これがそういう意味だったのかよ？
ちくしょう。恨んでも恨み足りない。
沸き上がる憎しみから目を背け、ヴァンは体を起こした。固くて、当たり前だが寝心地がお世辞にもいいとは言えないベッドに寝かされていたらしい。大人の男がきちんと横になれる大きさだということは、ここは大人用の牢獄のようだ。
そうだ。罪を犯すのに大人も子供も関係ない。
出来ればもっと早く、そういうことに気づいてほしかった。だったら、きっと今頃――自分は生まれてきていなかっただろう。
だったらそれでいい。

こんな腐った人生を送らされる位なら、生まれてこない方がよっぽどよかった。
今なら胸を張ってそう答えられる。もうそんな主張に文句を言う愚か者はいないのだから。
そう、もうどこにも。
「気がついたかしら？」
意識をさらに覚醒させられる形で、ヴァンは顔を上げ、声の聞こえた牢獄の外へ向けた。
檻越しにこちらを見下すように見つめる、二つの目。
すぐに、投げかけられた声がやたらと冷淡ながらも、妙に背伸びしたような少女の声であったと気づかされた。
見た目にはこちらと年が変わらないように見える――少女の方が少年より大人びているのは通例だが、それを鑑みてヴァンはそう判断した。
「やっと会えたわね――ジョシュア・ブレイク」
あっさりと口に出された。
決して誰にも知られないよう、決して誰にもその名を口にさせないよう生きてきたこの二年が、その一言で完全否定されたような気になった。
「あなたは、ジョシュア・ブレイクね？」
呼びかけられても何も言わないヴァンに、少女は苛立ち念を押すよう再度語りかけた。
「……ああ、そうだけど」
自棄になったように、ヴァンは返答する。今さら違うとわざわざ言ったところで、こんな牢屋にぶち込まれた時点で全ては無駄だ。
ぞんざいな彼の態度に呆れたため息を当てつけのようにつき、少女はさらに冷たい眼差しと声色で続けた。
「そう。だったら話は早いわ――」
言って、近くに立つ看守に彼を出すよう命令する。子供のくせにえらくぞんざいな言動だ――ヴァンが冷めた目で自分を見ているこ

とに気づいたか、彼女が改めてこちらに視線を向けた。
その目は、不愉快なほど冷たかった。
「逃げようなんて考えないことね。こっちはあんたの正体はお見通しだし、逃げたところでもうあんたは逃げられないわ」
冷笑さえ浮かべかねない勢いで、少女は言い放った。
こいつ、オレになんか恨みでもあるのか？
愚かな考えを抱き、すぐに愚かだと気づいてやめる。
そんなもの、嫌と言うほどあるだろうが。
「それで、オレに何の用だい？」
負けじとヴァンも強気に言い返す。
「自分の名前を言われた時点で気づいてるんじゃないの？　まあいいわ――別のお部屋でゆっくりと話しましょう」
牢獄の扉が、ゆっくりと開かれた。
自由への道だと、誰が手放しで喜べるだろうか？

＊

同じ壁の色に、同じ日当たりの悪さ――ただ違うのは、ここには牢獄特有の息苦しさとは違う、別の息苦しさが存在するのだろう。
ヴァンは椅子に座らされていた――周囲には何人もの看守。足枷などつけられていないが、やはり別の意味で信用がないことを教えてくれる。
逃げるつもりなどない。もうこちらの素性が知られている時点で、気力が萎えているのだから。
そんな彼を未だ信用することなく、向かい合って座る少女はヴァンに厳しい眼差しを向けてくれている。
まったく、ずいぶんな恨みを抱かれているようだな。
「覚えてないと思うから、自己紹介をさせてもらうわ。私はマーサ・クロフォード――あなたのお兄さんと懇意にさせてもらってた、パトリシア・クロフォードの娘よ」

棘のある台詞――あいつをわざわざお兄さんなどと呼びやがって。
ヴァンが苦々しく考えた時、別の重要事実が頭に浮かんだ。
「マーサ……？」
訝しげに自分を見るヴァンに、少女は冷笑を浮かべ、
「あら、やっと思い出した？　こっちはあなたの顔を一目見て気づいたのに」
まるでヴァンをバカを見るように言い放った。
「……なんで、こんなとこにいるんだよ？」
久しぶりなどと言わない。むしろその疑問で頭は支配された。
マーサは冷笑をやめ、極めて冷徹な瞳でその答えを教えてくれた。
「あなたのこと、いろいろ調べさせてもらったけど――もっとも、あなたは私たちのこと知らないみたいだから教えてあげるわ。私は元気だけど、母のパトリシアは殺されたわ。一年前に『黒き殺人鬼』の手でね」
そう、全部あんたのお兄さんのせいよ。
彼女がそう言っているような――本当にそう言っているのだとしても、文句を言う資格はないが――目が思わずいたたまれなく視線をそらした。
パトリシア・クロフォード――かつて兄が起こした『事件』の際、懸命に兄の将来を守るため奔走してくれた女性。そして兄の未来とブレイク家の幸福を取り戻してくれた女神にも等しい存在。
次男のジョシュアが生まれた時も、自分のことのように喜び祝福してくれた。そしてあの『事件』が起きる直前まで手紙のやりとりを交わしては、時折村へ遊びに来てくれた。
そんな時、いつも彼女は自分と同い年の一人娘を連れて相手をさせてくれた。周囲の期待通り、とても仲の良い関係になった。そのまま何事も起きなければ、思春期の障害がありつつもずっと気心の知れた幼馴染み同士、仲良くしていられたのかもしれない。
その娘は今、幼い頃の思い出など一切顧みることなく、かつての友を憎しみの目で見つめている。

「嘘だ――まさか……！」
反射的に吐き捨てたヴァンの台詞を遮ってマーサを続けた。
「信じられないとしても本当の話。それに、今さら驚くことないじゃない」
あなたのお兄さんは、自分の両親に奥さん、幼い自分の子供どころか村人まで皆殺しにしたんだから。
「――！」
続いた彼女の問答無用な台詞に、ヴァンは体をこわばらせた。
嫌だ、聞きたくない。
この場から逃げ出したい。
そして誰も自分を知らない場所に行きたい。
「……ごめんなさい。ちょっと言い過ぎたみたいね」
ほんのわずかだが、申し訳なさそうにマーサはつぶやいた。
「そんな話聞かせるために、オレに会いに来たのかよ？」
かろうじて虚勢を張って、ヴァンはそっけなく問う。自分の立場を知ってるくせに、よくもそんなことが言えるもんだ。
「あなたには知る義務があるわ。それに――私があなたに会いに来たのはそれだけじゃないわ」
義務？　家族の罪は家族みんなのものだって言うのか？　だから支え合って、互いを思いやって懸命に生き続けなければいけないんですか？
そんなことをのたまっていた女はある日、その罪を背負う大事な家族に殺された。
全身をズタズタに潰されて。
「今まで、この二年間素性を隠して生活していたみたいね？　盗賊団の仲間は誰一人、あなたの過去を知らなかったみたいだし――立派ね、よくそこまで隠し通せたものだわ」
「大したことしてねえよ」
そうだ。ある日ぶらりと仲間にしてくれと現れて以来、誰もヴァンの素性を問いただす者はいなかった。元々訳有り連中の集まり、

どうあがいても日向で真っ当に生きられない汚れた魂の集まりと呼ぶにふさわしい組織だったのだ。ちょうどいい隠れ場所だった――ボスはこっちの取ってつけたような偽名を笑い飛ばしただけで受け入れた。

ヴァン・スカイブルー。

その名は、青空をうらやんでつけた呪われた子の悪あがきか。

「そうね……あんな連中にとっては、『仕事』が出来れば過去なんていらないものね。いい駒だったのよ、あなたは――あいつらに利用されていた憐れな子供」

まるであいつらは社会のゴミだと吐き捨てるように、マーサは言い放った。

ヴァンは反射的に立ち上がり、その体に掴みかかろうとしたが、周囲の看守達に羽交い締めにされた。

許せない。あいつのことはともかく、自分を何の疑いもなく受け入れてくれた仲間達のことまで侮辱されるのは、絶対に許さない。

そう強い瞳で訴えてくるヴァンとじっと見つめ合い、マーサは冷静に続ける。

「あの組織の中には、連続強盗殺人犯として指名手配されている者もいるわ。他にも数件、殺人や傷害罪で逃亡中の人間も――あなたがどれだけ彼らのことを思っていても、それ以上に彼らに傷つけられ、憎んでさえいる人たちがいるの。それを忘れないで」

ヴァンがそれ以上手出しをしないことを信用したか、マーサは冷静に看守達に身振りで彼を解放するよう指示する。すぐにヴァンはしがらみから解放され素直に椅子に座る。

「だったら、影で悪口言われても文句言うなってわけかよ？」

嫌味ったらしくヴァンはマーサを見据えた。

「それについては謝るわ。こっちもつい、私情を挟んで大人げないことを言ってしまったみたいね」

どこまでも背伸びしたような口ぶりだ――しかし、その言動に一切の揺らぎがない辺り、感心すべきことなのかもしれない。

そう考えれば、目の前の少女がますます大人っぽく見えてしまう。
「とにかく、彼らのところにはもう戻れないと考えてもらうわ。どのみちこの一件であなたの素性は知られることになったから、ちょうどよかったけど」
そう言えば、気づけば牢獄だった――マーサは今さら疑問符が浮かんだヴァンに気づいたのか、冷静の事の顛末を語って聞かせてくれた。
ちょうど、密かに調査追跡を続けていた『黒き殺人鬼』の足取りを掴み、駆けつけた騎士団が捕らえようとしたが逃げられたどころか、新たな犠牲者を出してしまった――殺されたあの屋敷の女主人である老婆は、かつて財産狙いで夫を病死に見せかけて殺害した嫌疑がかけられ、現在もあくどい高利貸しとして私腹を肥やしていたらしい。だからヴァン達はそこを狙ったのだ――まさか、そこにあいつが来ることなど夢にも思わずに。
まさかそんな展開など、誰が予想したのか。
「まるで、神の思し召しだな」
思わず、ヴァンは自嘲気味につぶやいた。それにマーサもつられたように笑って言った。
「こっちはそんなの信じちゃいないわ、悪いけど」
そうだな、そんな悪趣味な神様いてたまるか。ましてや、人殺しに弟や我が子など使わしてくれる神様なんぞ。
「あーあ、しくじったなこりゃ」
自棄になってヴァンは顔を上げ天井を見る。そんなお膳立てをされちゃ、もう逃げられないと急速に諦めの気持ちが強くなる。わずかに残っていた希望をへし折られた感覚だ。
「悲観的になることはないわ。あなたは汚れたしがらみから逃れられるのよ、母ならきっと大喜びしたでしょうね――道を踏み外した子供を救えるって」
やけに棘があるな――ヴァンは怪訝に彼女を見やった。母を殺された恨みはどうした？

「でもその代わり、あなたにはきっちり『ジョシュア・ブレイク』として生きてもらうから」
ヴァンの疑問に気づかないよう様子で、マーサは冷たく続けた。
「なんで、お前にわざわざこっちの生き方指図されなきゃならねえんだよ？」
「それがあなたの為すべきことだから」
反発するヴァンを顧みずマーサは続けた。
「あなたにはこれから、私と一緒にウイリアムス・ブレイクを追ってもらうわ――あの、『黒き殺人鬼』をね」

贖罪の旅路

それにしても、一年はあっという間でもあり、とても長いものでした。あなたを失った現実と戦うふりをしながら、わたしは一生懸命あなたを失った悲しみから逃げていました。

そうしなければ、わたしは生きていけなかったでしょう。今こうしてあなたに手紙めいたものを書いている自分が、何だか自分でないような気がします。ついこの間まで、何もしたくないと考えてばかりいたのに。

きっと、あなたに逢いたい気持ちだけが強いから、こうして今のわたしはわたしを突き動かしているのでしょうね。

決して叶わない願いだと分かっているのに。

例え、周りの人たちがいつか必ず逢えると言われても、分かりませんよね？

だって、今こんなに悲しいのに、どうして実感の持てない幻想を信じていられるのでしょうか？

それでも、それはそれで一応信じてみようと思っています。

だって、こうしてあなたにわたしの思いを伝えているなんて、ばかな真似をしているんですもの。

そして、それがあなたに届いているのだと信じてみせる――何だか、ばかみたいですね。

それでも書かなければ、あなたのことを忘れてしまいそうで怖い。とても怖いです。

あなたを失ったばかりの頃、わたしたち家族はとても苦しみました。とても後悔して、悲しんで、たくさん悔やみました。

わたしもどれだけ後悔したか知れません。あの時あなたを引き止めていれば、あの時何か気づいて、あるいはほんの気まぐれを起こしてあなたを捜して、あの場所へ行くことを食い止めていれば……どれほど考えたところで起きたことは変えられません。そんなこと

分かっていますが、お父さんや周りの大人たちがうるさくて、そんなこと少しも考えていませんっていう顔をしなければやっていけません。

あなたがいなくなって以来、お母さんはわたしをぶつようになりました。わたしも怒りや憎しみをぶつけなければやっていけなかったので、ついお母さんに「わたしなんかいない方がいい」、「わたしが代わりに死ねばよかった」なんてひどいことを言ってしまいました。それでお母さんにぶたれて、自分が間違っていること、なんて残酷なことをしてしまったのだろうと思い知らされました。それでもわたしは耐えられなくて、何度もひどいことを口にして、行き場のない憎しみや苦しみを吐き出しました。そうせずにはいられないから、例えそうしたとしても、あなたを失った現実をなかったことに出来るはずなんてなかったのに。

でもお母さんは、わたしがお母さんと同じことを言ってもぶつようになりました。あんなに憎しみを込めてあなたを奪った存在に死んでしまえばいいと言っていたくせに、わたしが少しでもそういうことを口にすれば、わたしを怒ってぶつの繰り返しです。そして泣きながら二度とそんなことを言うなと説教してきて、お母さんだって同じことを言ったくせにとか、反論したらまたぶちます。他にも、あなたを奪った存在に、あいつなんか生まれてこなければよかったと言ってもぶつんです。もっと、一番強い力で。

お父さんは、落ち込んで一人部屋にこもる私に何度もお母さんは間違っていないと言い聞かせてきました。苦しんでいるのはお母さんも同じなんだとか、お母さんの味方をします。そんな風にわたしが怒ると、お父さんはもっと怒ってわたしのためを思っているんだとばかりに説教をします。お母さんと違ってぶってこないので、そんなに怖くありません。

わたしとお母さんとお父さん、どんなことがあってもあなたの分まで生きなければいけないようです。わたしが少しでも後ろ向きなことや残酷なことを言えば、お母さんはまたわたしをぶって、お父

さんはお母さんを責めてはいけないと言い聞かせ、わたしが間違っていることを嫌というほど伝えます。わたしの気持ち、この苦しみが痛いほどわかっているんだという顔をして。あなたがいなくなったばかりの頃、あれだけお母さんのことをいじめてたくせに。大人ってやっぱり勝手ですね。

こんな風に、周りのみんながうるさくて大変です。でもこうして、あなたに話しかけている感覚でこの日記をつけるようになったおかげで、少しずつ気持ちが楽になっているような気がします。いつもごめんなさい。こんな悲しいことを書いたりして、あなたも傷つけてしまうようなことをしてしまって。わがままな女の子の愚痴なんだなって、笑ってすませてください。あなたがいつも笑っていたあの頃のように。

おやすみなさい。明日はもう少し楽しいことを伝えますね。もうすぐ植木鉢のお花がきれいな花をつけそうなんです。真っ白と黄色、咲いたらどれだけきれいなのかな？　少しでも楽しいことがあると気が楽です。お父さんやお母さんに、村の人たちがわたしが立ち直ったと安心して何も言ってこないから。

しばらくの間は安心出来そうです。後はこの日記の存在がばれないように、こっそりわたしだけの秘密の場所に隠し通せるかどうかです。

だって、もしばれたらお母さんにぶたれて、お父さんに説教されて、捨てられそうな気がするから。村の人たちも、まだ悲しみを忘れていないのかとか、何だかうんざりしたような顔をされるのも辛いです。

これは、わたしとあなただけの秘密です。

決して、誰にも邪魔させない、わたしだけの大切な秘密だから。

だから、あなたも内緒にしててね。

もしこれを、どこかで見ていたらの話だけど。

＊

「困りますマーサ！　勝手に話を進められちゃ……」
二人の重要な会話に水をさすように、突然扉を丁寧だが力強く叩く音が響いた。
看守が冷静に扉を開いてやると、ずかずかとしながらも他人に気を遣うような足取りで、一人の男が部屋に入ってきた。
年は三〇に手が届いていそうな、大人の落ち着きを持ったような男。明らかに教会関係者だと分かる身なりに、穏和な顔立ち――今まで、誰かを憎んだり憎まれたりしたことのなさそうな表情を持っている。
「フォスターさん、今大事な話をしてたんだけど……」
会話を邪魔され、不機嫌そうにマーサは男を睨んだ。
「ですが、それとこれとは話が――」
唐突に現れた自分を怪訝に見やる視線に気づいたか、すぐに男はヴァンの方を振り向いた。
見れば見るほど、人のよさそうな人物だ。
不愉快になるほどに。
「ああ……まずは自己紹介をしなければ」
改まったように、男はいきなり部屋に入り込んできた無礼を詫び、ヴァンへ一方的に丁寧なやりとりを始めた。
「申し遅れました。私の名前はリチャード・フォスター――現在、教会より命ぜられマーサさんとの旅に同行させてもらっています」
「旅？」
「ええ。マーサさんと『黒き殺人鬼』を追う」
「私が説明するから下がってて！」
男はマーサに叱責され、やや居心地が悪そうにしながらも慌てて素直に二人から離れ、彼女の背後に立った。
少女相手に、何とも情けない姿だ。
マーサは自身の後方へ下がった彼を見ることなく続けた。
「この人は私の監視役。さすがに子供だけで殺人鬼の追跡なんてさ

せられないからね」
彼は信用出来る人よ。一応ね――そうマーサは男を評した。
どうやら、あまり仲良くしてはいないようだ。仲良くする気もない口調だ。
「それにこれからはあなたもいるし……こういう人間がもう一人増えるかも」
「だから、どういうことなんだよ？　オレがお前と旅するって」
「さっき説明した通りよ――あなたは、これから私と、このリチャード・フォスターっていう教会の人間と一緒に、あなたのお兄さんを捜す旅をするのよ」
「『お兄さん』って呼ぶのやめてくれ」
苛立たしげに、ヴァンは吐き捨てた。
いちいち責められ、覆しようのない現実を突きつけられているようで虫酸が走る。
二年間、何のために素性を隠し過去から逃げてきたのか。
「そうね……あんな人殺し、血のつながったお兄さんだなんて思いたくないわよね」
「マーサ。いくら何でもそれは――」
さすがにいたたまれないのか、背後のフォスターが割って入った。
それを彼女は、振り向きざま睨みつける。
「だったら何？　仲良くしろっていうの？」
こっちは母親を殺されたのよ？　こいつの兄貴のせいで散々ひどい目に遭ってきたのよ？
そうマーサはまくし立て、人のよさそうなフォスターを追い詰めていく。
「ですが……それとこれとは話が――」
ふんと、無視してマーサはヴァンに向き直る。
「さっきから黙って聞いてりゃ、なかなかキツイことどんどん言ってくるんだな」
不条理な憎しみをぶつけられ、ヴァンは怒りをこらえながら言っ

た。
「ごめんなさいね。あなたに当たったって何の解決にならない位分かってるけど、そうせずにいられないの」
実に冷静沈着な口調で、マーサは返答した。
こいつ、絶対反省してねえな。
「冗談じゃねえよ、なんでお前みたいな八つ当たりと旅しなきゃなんねえんだよ！！」
思わず声を荒げると、一斉に周囲の看守達がヴァンを取り囲む。すぐ睨みつけて、彼女に直接危害を加える意志がないことを教えてやる。
「私だって嫌でしょうがないわよ――でもね、こうした方がお互いのため、義務だと思うんだけど？」
「義務？」
「そう――私の母は結果的に彼を野放しにさせてしまった。そのせいで私も父も辛い目に遭ってきたわ。でもそれを恨む資格はない、結果的に母は人を救うふりをして大量殺人の片棒をかついで死んだ。どう理由や言い訳を並べたところで、私と父は母の行為を結果的に認めた。むしろ誇りにさえ思っていたわ――何も、不幸な事故に遭ったなんて都合のいいことは考えない。起きたことは変えられない。引き起こしたのは、間違いなく私たち『家族』なんだから」
マーサは氷の瞳でヴァンをじっと見つめ、言った。まだ年端もいかない少女のはずなのに、その目はひどく、よくも悪くも深いものだった。
あの惨劇と悲劇が、彼女をここまで変えてしまったのだろうか？
あの事件の余波は、そこまでひどいものだったのか？
被害者は村人だけではすまされなかったようだ。
「じゃあ……家族なら家族の犯した過ちは家族全体の責任ってことかい？」
「そういうこと――そこに子供も大人も関係ないわ。あなたは生まれてからずっと、兄を愛した両親を愛して、同じように兄を愛し愛

されてきた。本来ならあなたの両親に精一杯罪滅ぼしをしてもらいたいけど」
「むちゃくちゃな話だな」
「そう？　人を殺しておきながら子供だからという理由でろくに罪に問われないで、その後の人生結婚して子供まで作ってぬくぬくと幸せに暮らす方が、よっぽどむちゃくちゃな話だと思うけど」
「――！！」
「マーサ！」
しつこく毒を吐くマーサを、また諌めるフォスターの声――そんなものどうでもよかった。
こいつ、どこまで人を好き勝手に責めれば気がすむんだ？
「私のこと、憎いでしょ？」
マーサは悪びれるどころか、挑発的とも取れる口調で語りかけてきた。
「……ああ、さっきから不愉快にさせられっぱなしだからな」
吐き捨てるヴァンに、マーサをなぜか笑みを浮かべた。とても自虐的とも取れる笑みで。
「よかった。これから一緒に旅するから、好きになってほしくないのよ」
「は？」
「だって……嫌でも好きになるでしょ？　一緒に旅なんかしてたら。だから――今のうちにしっかり嫌いになってもらいたいの」
もちろん、私もあなたを嫌いになるわ。ううん、元から嫌いだもの。
あなたのお兄さんのせいで、全部めちゃくちゃになったんだもの。
「贖罪の旅になれ合いなんて必要ない――そんなものに振り回されてたら、私たちは何も出来なくなっちゃう」
「贖罪？」
「そうよ、私たち『家族』が野放しにして引き起こした『罪』。あなたがどう思おうが、それは決して変わらないわ。私は諦めないか

ら――ウイリアムス・ブレイクを死刑台に送るまで、どんなことをしてもあなたと旅をして、一緒にあいつを捜し出してもらうわ」
それが、私たちがするべきことなの。
最後に冷たく告げたマーサの瞳を、かろうじてヴァンは睨みつけることしか出来なかった。
その瞳の奥に見えるものだけは、どうしても見えなかった。
「人の兄貴に、よくもそんなことを――」
「あら、そんなこと言われた途端情でも蘇ったの？　散々過去から逃げ出しておいて勝手なのね」
「今さらオレの前に姿見せて、今こうして好き勝手なこと言ってるお前が言える口か？」
「何と言われようとも、引き下がるつもりないから――あなたには一緒に罪滅ぼしをしてもらうわ。もうあなたと私しかいないからね、彼に落とし前をつけられる存在は」
私たちは、生き残ってしまったのだから。
その台詞をつぶやいたマーサの瞳に、一瞬深い哀しみを見た気がした。

＊

「ヴァン……？」
部屋を出され、しつこく数人の看守達に連れ出され――その先頭がマーサなのは言うまでもないか――殺風景な廊下を歩くヴァンの前に、不意にその影は姿を見せた。
こちらよりの幾分数の少ない看守に連れられ、前方より現れたリック。残りの仲間はいない。
こちらの名前を呼んだだけで、彼はこわばった表情で見つめるだけだった。
しばしの沈黙――それを無神経に破ったのはマーサだった。
「彼はちょうど感化院に入れられる予定よ――残りの仲間と一緒に

ね」
「何だと？」
咄嗟に強い瞳で自分を見てきたヴァンに、マーサはそっけなく見つめ返しただけで続ける。
「心配しなくていいわ。きちんと調べさせてもらったけど、彼らは今まで大した罪は犯してきてないし、全部正直に話してくれたから、今後の処遇は穏やかなものになると思う」
彼らは、人なんか殺してないから――まるで彼女がそんな暴言を吐いているような気がして、思わず彼女を睨みつけた。
無視してマーサはリックを見やる。
「一応、更正の余地があるってことで納得してもらえるみたいね。仲間に感謝するのね、彼のおかげであなたたちは穏やかな感化院に入れるんだから」
マーサはリックを実に責めているような口調で言い放つ。
リックは負い目を抱いているように目をそらした。
「どういう意味だよ？」
「話してなかったわね。あなたが私たちとこの旅に同行する条件として、彼らの処遇を寛大にするって」
「何だよ……それ」
話し合いは平行線だった――だから、一度場所を変えて話し合おうというマーサの言葉通り、あの場を離れたというのに。
「騙したのか――！？」
「人聞きの悪いこと言わないで。あなたには元々選択肢なんてないんだから……それに、また感化院に入ったらどんな目に遭うか自分でも分かってるでしょう？」
嫌な記憶をえぐられる。
お前はウイリアムス・ブレイクの弟。
殺人鬼の弟。
兄が殺人を犯しておきながら、無神経な両親が生み落とした新しい子供。自分の子供が人を殺しておきながら、のうのうと新しい命

を生み出した。
教会の人間達は初めのうちこそ表面上同情し、味方の振りをしてくれた。しかし気づいていた――彼らは兄の処遇を決定した自分達のやり方に激しい後悔を抱いていたことを。
事件の力が大き過ぎた。彼らもまた大きな傷を負った。
その傷はやがて悲しみや苦しみから大いなる憎悪へと昇華され、一人の『罪なき』少年へと向けられた。
そして訪れた、悪夢の日々。
「保護してくれた施設を抜け出して、盗賊団の仲間入り。そして何十件もの窃盗と強盗を繰り返し……まさか次も、穏やかな施設に入れてもらえるなんて考えてないでしょうね？」
あんたに待つのは、あの頃の悪夢よ。
そうマーサは冷酷な瞳でヴァンを射貫いた。
「マーサ、口を謹んでください――」
「卑怯者」
吐き捨てる彼に、彼女は冷笑するだけだった。止めに入ったフォスターの声は虚しく無視される。
「子供だからと甘えて、盗賊団で好き勝手やってた人間に言われたくないわね」
「マーサ！」
「むしろ感謝してほしいわね、こっちは母親のコネを使ってそっちの仲間を悪の道から救ってやるんだから」
気づけば、リックが居心地の悪そうな様子で視線をそらしている。
こっちがどんなに懇願の眼差しを向けても、彼は一切顔を上げようとしなかった。
「彼らには全部説明しておいてあるから安心して――悪の道を絶つには、まず人間関係から切るのが一番だものね」
「彼らには、今後別々の施設で社会復帰のための寮生活を送ってもらいます。残酷な話かもしれませんが、そういう決まりですので……」

なかなか二人の話に割って入れない様子のフォスターが、申し訳なさそうに話を引き継いだ。
その言動が感に障って、彼の罪なき顔を睨みつけてしまった。
「分かったでしょ？　あなたに拒否する権利なんてないの――これは正当な取引よ。あなたは仲間を守って、家族の罪を償う術を得られる。その上教会の保護下で大手を振って太陽の下を歩けるのよ？
こんないい待遇ないと思うけど」
「もし……拒否したら？」
今さらなんてバカげた質問をするんだとばかりに、マーサは彼を見る。
「二度目の過ちを、教会は決して許さないでしょうね」
ブレイク家の子には、厳罰を。
それは新たに作られた、真っ当にして大いに支持される法律のようだ。
そんな会話に耐えられなくなったように、リックがきびすを返して去ろうとした。
「リック――！」
追いかけようとしたら、看守達に掴まれ――厳しい表情をしたマーサに立ちふさがれた。
しかし彼の願いを聞き届けたように、リックは一旦立ち止まった。
「別に……お前が悪いわけじゃないから、頑張れよ」
大変かもしれないけどさ、おれたちも頑張るから。
「じゃあな……今までありがとな」
決してヴァンの顔を見ることがないまま、リックはそうして去って行った。
散々、自分に親友面して、こちらの気持ちも考えず振り回してきたくせに――せめて彼なりの優しさがあったと受け止めてやるべきか。
しかし理解出来る。
二度と、自分と彼は交わることがないと。

やがて彼は更正し、自分という存在は人生の汚点となり消したい過去そのものとなり、その記憶の片隅に追いやられると。
そして何よりも自分は、黒き殺人鬼の弟。
それだけで、全てが壊れるのは必然だった。
今さら仲間達と過ごした二年間の思い出が蘇る。やはり、それはかけがえのない日々だったのか、失いたくないほど大切な時間だったのか。
いずれにせよ、もう全ては遅いのだろう。
そしてそうなることが、定めだった。
「行くわよ」
これで全てが決まったとばかりに、マーサは看守を連れて歩き出した。
ヴァンは、素直に従うしかなかった。
それをすぐ側で、フォスターがいたたまれない表情で見ているのを感じる。
ヴァンは何も、見たくもないし見る気もなかった。
何も考える気になれなかった。

＊

これは、償いなのか？
それともただ、悲しみと憎しみに動かされているだけなのか。
いや、都合のいい解釈で自分をごまかすのはやめよう。ただこの足が動くのみ、ただ果たすべきことに取り憑かれているだけなのだと言い聞かせる。
黒き殺人鬼、ウイリアムス・ブレイク。
奴が、全てを奪ったのだ。
かつて犯した罪に苦悩しつつも、懸命に生きようとしていた自分から、全てを奪い去りどこかへと消え去った。
燃えさかり、断末魔の叫びを上げる愛する者達を見ることしか出

来なかった無力な自分に、奴は笑みを浮かべ逃げていった。
黒く染まったその姿、決して忘れることは出来はしない。
もし別の形で出会っていたなら、同じ十字架を背負った者同士などと、親近感すら抱いたかもしれない――それはあくまでも仮定の話だと、愚かな考えを捨てさせる。
許さない。許すものか。
必ず、捕まえてみせる。
奪われた恨み憎しみ、そして悲しみを奴に精一杯償わせてやる。
今なお続く奴の凶行――どんなことをしても止めなければならない。
もうたくさんだ。耐えられない。自分と同じ悲劇を味わう誰かが新たに生まれることなど。
断じて、させるものか。
だから、憎しみに負けてはいけない。奴への憎悪に取り憑かれ我を忘れてはいけない。
皆必ず見守ってくれている。だから、自分の心を壊すな。どんなことをしても、負けてはいけない。
だからどうか力を貸してくれ――奴に裁きを与える力を。
どうか。愛する者達よ。

＊

久しぶりです、そしてごめんなさい。
あれほど毎日、あなたに伝えたいことや話したいことを嫌というほど書き続けてきたくせに、突然何日も何も書かなくなってしまってごめんなさい。勝手なわたしを許してください。
それでも耐えられませんでした。だからしばらく、わたしはあなたと向き合うことをやめてしまいました。本当に勝手だよね、ごめんね。
あなたに、毎日起きた楽しいことや嬉しいこと、どんなに小さな

ことでも伝え続けていくことで、わたしはあなたを忘れないように――何より、悲しみや憎しみから救われようともがいできました。
わたしはあなたに助けられています。あなたがわたしたちの元からとても遠い場所へ行ってしまったにも関わらず、わたしはあなたをとても近くに感じることが出来る。
そして、わたしの記憶にあなたの優しい笑顔が今も鮮明に残っているのです。あなたが短い間にわたしに残してくれた大切なものです。
本当に、感謝してもし足りません。
時々、あなたはまだいるのではないかと思ってしまいます。しかしそんなことを口にすれば、まだ立ち直っていない、過去を乗り越えていない、現実を見ていないことを咎められ、またお母さんにぶたれてお父さんに怒られるので考えないようにしています。周りの大人たちの目をごまかすのも大変です。
でもそれも、こうしてあなたとの時間を失わないためだと思えば、どうってことありません。だからこそ、わたしはあなたからしばらく離れなければいけなかったのです。
もしその全てをさらけ出そうとすれば、あなたはきっとわたしを嫌いになってしまうのではないか――それが怖くてたまりません。
あなたがどれほど優しくても、わたしの全てを知ってしまったら、どれほど失望させてしまうか怖くてたまらない。
きっとわたしは、自分と向き合うことが出来ない臆病者なんでしょうね。だから今もこうしてあなたを求めてしまう。
本当に、ごめんなさい。
それでもわたしは、せめてあなただけは忘れたくない。
ねえ、小さい頃読んでもらった童話を覚えていますか？　たくさん読んでもらった中で、特にあなたがお気に入りだったお話がありましたよね？
題名は忘れてしまいましたが、たしか一人の騎士が国を救うため、とても長く過酷な旅をして冒険をするお話でしたよね？

勇者の剣にお姫様、悪い悪の竜や聖なる魔法、たくさんの美しいものや怖いものが登場して、騎士の旅はそれはそれは波乱に満ちた冒険でしたね。

あなたは毎日のように、そのお話をねだってはその世界に憧れを抱いていましたね。わたしも隣で、一緒にあなたや騎士と冒険をしているような気持ちで楽しんでいました。

あの物語は、たくさんの恐ろしい出来事があっても、わたしたちは大好きでしたね。だって、最後に必ず騎士は悪の魔王を倒してお姫様を救い、国を救った勇者になるんですもの。

全ての旅を終え、人々に平和をもたらした騎士の表情はとても晴れ晴れとしたものでしたね。愛する者を救ったことで、心から彼自身の魂さえも救われたように。

ちょうど、今日帰ってきたあいつもそんな顔をしてました。

そう。あいつです。

あいつです。

まるで、あいつの顔はあの物語に出てくる騎士のような図々しい顔をしていました。

まるで、世界を救ってきたみたいな涼しい顔をして。

いや、違うんでしょうね。

きっとあいつは、自分の罪が許されたと思い込んでいるからそういう顔をしていられるんでしょうね。

まるで、罪滅ぼしの旅を終え神様に許された罪人のように。

まるで、本当に許されたような顔をして。

今までのことを全て、洗い流されたかのように――その魂さえも、浄められたように。

あいつの罪なんか、消えるはずないのに。

新たな道

王国歴四九七年（大陸歴四六三三年）
『大都市エレイソン資産家一家強盗火災事件』に関する詳細報告書

同年大陸内でも有数の大都市エレイソンにて、深夜未明資産家として高名だったランベール・オーウェン宅にて火災が発生。主であるランベール（四四）と妻フランシス（三八）、長女フリージア（一三）が焼け跡より焼死体となって発見された。邸宅は全焼、発見された一家の遺体は判別も難しいほどの状態だった。幸いにも炎はオーウェン宅の敷地内に留まったまま延焼はせず、被害は最小限に抑えられた。

調査によって、初めは邸宅内部で起きた失火によるものと断定。しかし無事逃げ出した数名の使用人から、不審な人影が大慌てで出火直後の邸宅より逃走したという目撃証言が明かされたことから、放火による一家を狙った殺人事件として調査を切り替え、逃走した人物を重要参考人として捜索を開始した。

ほどなく一人の少年、チャールズ・バトラー（一四）が事件を起こした事実を告白するため姿を現わし、事件は急展開を迎えた。

被疑者少年はエレイソンの貧民街出身で、事件当時体が弱く満足に働くことの出来ない両親と幼い弟妹八人を支えるため、長男として若年齢ながらも大家族を支える大黒柱として過酷な労働生活を過ごしていた。しかし貧民街在住であるが故に貧困を脱することは容易ではなく、さらに生活は困窮を極め被疑者少年は周囲に頼れる者もいないまま、一人追い詰められていった。

そこで被疑者少年は中央地区に住む富裕層の家で強盗を働くことを決意。貧しい家族を救うための苦肉の策として、不慣れな大振りの短剣を携え、深夜未明適当に目をつけたオーウェン邸を単身襲撃した。

事件当時邸宅にいたのは偶然起きていたが異変に気づくことなく書斎にいた主ランベール・オーウェンと、それぞれ自室で床についていた夫人と長女、数名の使用人だけだった。被疑者少年はその好機を見計らい、慎重に邸宅を物色、やがて財産を保管してある地下室を発見し鍵を施錠しようとした。

しかしその際、異変に気づき書斎より駆けつけたオーウェン氏と鉢合わせる形となり、唐突な事態に混乱した被疑者少年は武器として所有していた短剣を振り回し氏に襲いかかった。咄嗟のことに氏も激しい抵抗で応戦し、両者は激しくもみ合う形となった。そして被疑者少年の手にしていた短剣が氏の胸部を貫き、不運にも致命傷を負った氏は大量出血でそのまま死亡したものと思われる。さらに不運が重なり、被疑者少年が襲いかかったことで氏が手にしていた灯り用の手持ち蝋燭が床に転がり絨毯に引火し、被疑者少年が気づいた時はすでに辺りは火の海だった。

その後被疑者少年は我が身を守るため全力で逃げ出すことしか出来ず、被疑者少年は無事現場より脱出しその後貧民街方角へ逃走。火災に気づいた夫人は逃げ遅れた長女を救出しようとしたが、共に逃げ遅れ焼死したものと推測される。逃げ出した使用人達も一家を救出しようとしたが、火の周りが早く逃げ出す他なかったと肩を落としていた。

被疑者少年は即座に事件性の大きさから騎士団の手より拘置され、厳罰に処す流れで今後の処遇を決定づけられようとした。しかし教会側からまだ被疑者が未成年であること、事件は社会の歪みがもたらした根深い貧困によってもたらされた悲劇にも等しい出来事であること、何より被疑者少年に元々殺意はなく、むしろ自身の短絡的犯行により失われた命を重く受けとめ、深く後悔と反省を述べ毎晩拘留中にひどい悪夢にうなされ悲鳴を上げるなど、それら事実を考慮し減刑を求められた。両者は数ヶ月に及ぶ協議の末、被疑者少年を感化院送致――教会側の主張を受け止め、少年の更正を最優先させる結論を出すこととなった。

そして教会側はこの事件を機に、被疑者少年の帰りを待つ貧困にあえぐ家族を含む全ての貧民街住民の救済を早急に行うことを発表。神学校に在学していたオーウェン家の長男も家族を失い深い悲しみにうちひしがれながらも、周囲に支えられ現実を受け止め、「亡くなった家族は人々の幸せを常に願い、貧困が根絶されることを願っていた。きっと父も母も、心優しく純粋だった妹も自分のすることを温かく受け止めてくれるだろう」と、教会の代表の一人として、遺産の大半を貧民街住民の救済に当てるという声明を出した。その長男の行いに世間はいたく感嘆し、事件発覚後よりオーウェン氏を巡る不名誉な噂を終息させるきっかけともなった。

その後、被疑者少年は教会側と何より自分の家族を救い出してくれた被害者遺族の長男に深く感謝し、自身の罪を悔い改めながら感化院で更正の道を順調に歩み五年後釈放。その帰りを待ちわびていた家族と再会し再び共に生活、現在一家を支える大黒柱として真面目に暮らしているという。

＊

こちらがろくにやる気を出さないことをいい加減責めればいいものを、フォスターはあからさまに気を遣ったように接してくる。

「これから……大変な旅になると思いますが、気を引き締めて、協力し合いましょうね」

それしか言えないのかとばかりに、マーサがちらりと一瞥した。何て冷たい瞳――それでもフォスターは、年長者にも関わらず気づかないふりをしている。

「ふん……！」

ジョシュアはふてくされた子供のようにそっぽを向いた。これから過酷な、それも殺人鬼を追う旅にしてはあまりにも自覚のない言動だ。

「あんまり子供面しないでもらいたいわね。これからはそういうの

は通用しないんだから」
対するこの少女は、少女でありながらあまりにも研ぎ澄まされた冷徹さを備えている。
とても、同い年には見えないな――ジョシュアはふとそう思った。彼が生まれてまもなく、彼女が生まれたのだと彼女と彼の母は喜々として話してきた。そしてそんな単純な運命に乗せられた形で、二人の仲が良好になるのは簡単だった。
そんな思い出は、ただの妄想なのか？
ジョシュアはマーサが自分を見つめる瞳を見る度、そう思わざるをえなかった。
「分かってるよ……」
うんざりしたように返答する彼に、またこちらをうんざりさせるように彼女は続ける。
「教会や騎士団の後ろ盾であぐらをかかれちゃ迷惑なのよ。少しは自覚を持って」
あんたは、人殺しの弟なんだから。
兄貴の時みたいに許されるなんて思わないことね。
彼女に、そんなことを言われているような気がした――しかし、実際そうだとしても気にせず、何も考えないようにするしかなかった。
悔しいが逃げられないのだから、しばらくは彼女の言いたいように言わせるしかない。旅を続けて収まってくれることを信じて。
この旅から逃げれば、盗賊団――それも、重罪を犯した悪質な子供として、感化院に送られる。そこは子供の更正など甘いことは考えない。教会側は子供の人権を謳い改善を求めているが、騎士団の圧力と、凶悪事件を起こした子供の措置――ジョシュアの兄が大きな転機となり――の多様化が必要という表向きの理由で黙認されているのが現状らしい。そして殺人や強姦などといった凶悪犯罪を起こした子供は被害者や世間の意見を汲むように地獄の牢獄へ放り込まれ、手ひどい報いを受けさせられる。その後の人生に待つのは、

罰を受けたことで二度と過ちを犯さないと誓いを立て真人間としてかろうじて生き延びるか、冷酷な大人達に痛めつけられまた同じ過ち――それも、かなり大きなものを繰り返す外道と成り下がるか、本人次第だ。

そうだ、罪を犯すのに大人も子供も関係ない。

だから、あの時あいつをそんな場所に放り込めばよかったんだ。そこで暴動に巻き込まれたり不衛生な環境に負けて病気になって死んでくれれば、大勢の人間の命が助かったろうに。

そして、目の前にいる少女の母も。

この少女なら、拒絶する自分にどんな手を使ってもそんな牢獄にぶち込もうと奔走してくれるだろう。理由などあえて語る必要もない。

だったら、外の世界を自由に出歩く道を選ぶのがまともな人間のすることだろう。例えその旅の目的が実の兄を死刑台に送るといったものでも。

そうだ。これはとても正しいことなのだ。

あいつは実の兄である前に、ただの人殺し。それも稀代の殺人鬼なのだ。

今さら両親を殺された身分だ。身内の情など持ち出せば同罪になる。そんなのはごめんだ。

「オレだって――あいつを憎んでるさ」

じろりと、ジョシュアはマーサを睨んだ。

「あらそう？　こっちは血のつながった家族だからって、後で余計なことしないかって不安なんだけど」

だったらどうして、オレを同行させるんだよ？　ジョシュアの至極当然な疑問に気づいたように、マーサは続けた。

「さっきも言ったけど、あなたには義務があるのよ」

「さあさあ！　長話はこれ位にして、早く向かいましょう」

これ以上側で聞くのは耐えられないとばかりに、フォスターは過剰な明るさで会話に割って入り、一行はなし崩し的に歩き出すこと

となった。
一時的にせよ、自分を閉じ込めていた牢獄が遠くなっていく――ジョシュアは妙な安堵感に支配された。
そして、これからの旅路に待つものは、果たしてそんな安堵感をまた味あわせる懐の広さを持ち合わせているだろうか？
「これから、どこ行くんだよ？」
マーサの顔色を伺うように、ジョシュアは聞いた。
「あなたを閉じ込めてる間に、あの豪邸に住む老婆の現場を調べさせてもらったけど、大した手がかりは得られなかったわ」
「被疑者はほとんど証拠を残していませんでした――騎士団は、連続殺人犯だから手口が周到になっているから警戒するよう言われましたが」
だったらどうして、オレに姿を見られるなんて間抜けな真似したんだよ――ジョシュアは喉にまで出かかった台詞をのみ込んだ。
「ちょうど現場にいた盗賊団の少年たちも、何も見ていなかったみたいだしね」
ホント、役立たず――マーサはそう言っているような目でジョシュアを見やった。
現場で唯一いた盗賊団の一人だという事実は、当たり前だが知られている。しかしジョシュアが何も見ていなかったとのたまっても、誰もそれ以上の追及をしなかった。
不気味な位に。
何か、思惑でもあるのかと心配せずにはいられない。
ただ一つ言えることは、あの姿は兄だった。ちょうど自分は、兄が無力な老婆を惨殺した現場に居合わせたのだ。
それだけだ。不思議なことに恐怖などなかった。怒りさえ抱かなかった――おそらく殺された老婆が大勢の人々を苦しめ金を稼いできた事実がそうさせているのかもしれない。
殺す方も憎まれ、殺された方も憎まれる。
この世界は、どうなっているのだろう？

「まあ、あの街の連中は怯えてるみたいだけど、もう被害はないでしょうね」
「一応、襲われる可能性のある人々の警備を騎士団が強化していますが――我々の見解では、すでに被疑者は別の地へ逃げたものと推測してます」
「とっくに逃げてるでしょ。じゃなかったらもっと被害は出てるわよ」
マーサは吐き捨てるように言った。元々街の住民を心配するつもりは毛頭ないらしい。
「そんな奴らなんかに構ってられないわ。こっちはさっさと証人に会いに行かないと」
「証人？」
「アムール村――あの事件で生き残った村人の一人、デニス・ハートマンよ」
「デニス……」
その名には充分な覚えがあった。兄ウイリアムス・ブレイクの物心ついた時よりの親友。互いの身に起きたあらゆる出来事を知り深い絆で結ばれた無二の友。
かつて兄が起こした事件の際、全力をかけるように彼をかばい、彼の処遇が軽くなったことに大喜びし、彼の帰還を心から喜び、強く笑いながら彼を抱きしめてくれた、ジョシュアにとってはもう一人の兄とも呼べる存在。
二年前の事件で、全てが壊れた。
デニスは妻と身ごもっていた子供を失いながらも生き残り、その後世間の目に耐えきれず精神を病む寸前にまで至り、全てを捨てるように行方知れずとなった。
「今さら、どうしてデニスの兄貴なんかに……」
思わず、昔の呼び名で彼を呼んでしまった。
デニスの兄貴――彼は、実の兄ウィルとは違った意味で、よい兄としてジョシュアを支えてくれた。

兄の過去を知って落ち込んだ自分を、彼は優しく諭してくれた。母に平手打ちを受けて家を飛び出し泣いていた時の、忘れられない思い出の一つだ。

「関係者は一人残らず洗い出す――行方をくらましてる分、実は殺人鬼を匿ってた、協力者だったなんていう展開もあり得るしね」

「おい！　デニスの兄貴がそんなこと――」

「そうかしら？　彼は誰よりもブレイクを親友として慕っていた――この事実だけでも疑いの余地はあるわ」

「でも……兄貴は、あいつに家族を殺されたんだぞ？」

「それ位じゃ、意外と友情は壊れないものよ。我が子が人殺しと知りつつも、それでも最愛の我が子だと声高に叫んで親子の絆を守る面の皮の厚い母親もいるんだしね」

「――！」

怒りはすぐに収まった。そればかりは、同意せざるをえないとつい思ってしまった。

無償の愛という名の偽善の報いを、家族の一員として受けた身なのだから。

果たして、亡き母は今どっちにいるのか。

やはり神は憐れんで彼女を天国へ迎え入れたか、もしくは結果的に殺人鬼を生み落とした元凶として魔王に咎められ地獄の門に引きずりこまれたか。

自分が『被害者』だったら、どっちを望むだろう？

「散々苦労しましたが、何とか彼の所在を突き止めることが出来ました」

フォスターが、本当に苦労したんだと思わせる口調で言った。そして彼が現在住んでいるという街の名を告げた。思ったよりも近く、何もなく寄り道さえしなければ数日で辿りつける絶好にも近い場所だった。

「最近運が向いてきて、ちょっと怖いわね。黒き殺人鬼は後一歩の所で逃がしたけど、あなたを見つけてデニスの居場所も見つけて―

―この好機は無駄に出来ないわ」
マーサはジョシュアを見て、少しだけ口元に笑みを浮かべた。そしてすぐ、本来の冷淡な顔立ちに戻った。
「現在、その地で彼は再婚し妻と幼い子供と暮らしてるそうです」
二年しか時間が経っていないこと考慮すれば、新しい子供は生まれてまもないのだろう。
「いい気なものね。殺人犯の片棒を担いだも同然なのに、過去からまんまと逃げおおせてさっさと愛する妻と子を忘れて、こいつも面の皮が厚いみたいね」
「おい！」
デニスの兄貴の悪口を言うな。兄貴の苦しみを知りもしないで。
「……一番苦しんでいるのは、殺されて人生を奪われた彼の妻と子供よ」
マーサは悲しみをのぞかせるような瞳で彼を見やった。
「彼女たちは殺された。そして生き残った夫は自分たちを忘れて新しい幸せをつかんだ――死んだ人間が残された愛する者の幸せを考えるのが道理だとしても、残された人間が死者を顧みない生き方をするなんていう理由にはならない」
だから私は、彼みたいな人間を許せない。
マーサはそれ以上言うことはないとばかりに、さっさと背を向け一人歩き出した。
「……本当に、申し訳ありません」
フォスターは呆然と歩く彼女の背中を見ることしか出来ないジョシュアの肩に、手を置いた。
「母を殺された悲しみが、彼女を変えてしまいました――マーサはウイリアムス・ブレイクを養護したパトリシア・クロフォードの娘として相当な迫害を受け、辛い日々を過ごしてきました。ブレイクに関係する全ての事柄に憎しみを抱くのは当然のなりゆきです……だから、どうか責めないでやって下さい。私も、出来る限りのことをしますので」

納得など出来ないが、一応彼の言葉を受け入れたふりをしてその場をやり過ごす。
そして、彼女の後について行く。
憎しみ合う者同士の旅が始める。追うのは、全ての元凶である殺人鬼。
必ず、捕まえてやる。
この悪夢から解放されるなら、どんなことだってしてみせるさ。

＊

お久しぶりです。大切なあなた。
また、しつこいようですが謝らせてもらいます――また寂しい思いをさせてしまってごめんなさい。やっぱりわたしは弱い人間です。わたしはあなたに自分の醜い心を見られたくないばかりに、またしばらくの間あなたと向き合う時間を自ら捨てて、何も考えたくない時間を勝手に作って閉じこもっていました。
これ以上自分の心をまっすぐ見つめてしまえば、わたしという人間の汚さを思い知らされ、わたしはその罪深さに耐えきれなくなりそうでとても怖い。
きっとわたしは自分で自分という存在を、とても恐ろしい形で壊し永遠の罪人にすら変えてしまうとんでもない力があるのかもしれません。
それはいけないことです。だからわたしは責められ、罪人として糾弾されるに値するのです。
そんなわたしを、あの人が救ってくれることになりました。会ったことがないけど、わたしの噂を聞いてわざわざこの村まで足を運んでくれました。
彼女は初めて顔を見たわたしのことを、まるで今まで知っているかのような優しい笑顔を向けて接してきてくれました。そして自分のことを打ち明けて、あれと同じようにわたしのことを助けたいと

言ってきました。
それを聞いた瞬間、その人のことが大嫌いになりました。本当に心の底から。初めて見た時から教会の制服を着ていたから嫌いだったけど、もっと嫌いになりました。
本当、大っ嫌い。
もちろんすぐに拒否して部屋に閉じこもりました。でもその人はしつこくて――その人は本当に真剣な目で嫌でもわたしと向き合おうと、無理矢理にでも話し合おうとしてきました。
本当にしつこくて。
まるで、世界中の人間が善人であることを信じて疑っていないような気持ち悪い目で見られて、嫌になってしまいました。
とっても大嫌い。だけどそれは、とても悪いことですね。そんなことを考えていたら、また大好きなお父さんやお母さんがうるさくて仕方がありません。でもそれは、このわたしを愛してからこそなんですよね。悔しいけどそう思うようにしています。それはあなたがいた頃何も変わらないことなのだと言い聞かせて。
最近、あの人たちはあなたのことを忘れているのではないかと変なことを考えてしまいます。でもそれはとっても悪いことなので、すぐに考えるのをやめます。
結局、わたしはとても素直に、それこそ感動と感謝でたまらないといった顔であの人を受け入れて、彼女の提案をのむことにしました。お父さんもお母さんも、周りの村の人たちも喜んでくれました。ああ、やっと立ち直ったんだと言わんばかりに。
こちらの気持ちも知らないで、バカみたいですね。だからみんなあなたがいなくなっても平気なんでしょうね。
ああ、やっぱりわたしはとても罪深い。とっても責められて当然な存在になってしまっていますね。
あなたにだけは正直に打ち明けたいと思います。あなたはわたしの大切な人だから。誰よりも大切な人だから。
わたしは彼女や家族、村の人間の言うことなんて最初から聞くつ

もりなんかありませんでした。
わたしは、逃げるんです。
あなたを失った現実を受け入れようとしても、その元凶を目の前で見せられる恐怖や、あなたがいなくなってもみんな悲しくて辛いふりをしていても結局何事もなく生きているような人たちがいるこの村にいるのは耐えられません。
わたしは怖いのです。自分自身が壊れたり、二度と元の自分に戻れなくなることが怖いのです。あなたを失ったことですでに本当の自分などどうでもいいと考えているくせに、臆病で勝手、ひどい卑怯者ですね。
わたしも、結局みんなと同じ。最低です。
だからそんな事実からも逃げるんです。この村にいつまでもいたくない。この村でいつまでも暮らしたって、きっと何も変わらない。そう考えるようにしました。わたしは変わる。新しい道を自分で見つけて、前向きに生きてまっすぐな足で歩く力を見つけるんだって。
何て都合のいい言い訳なんでしょうね？　でもあなたならきっと、こんなわたしの嘘八百さえ簡単に信じて、優しい笑顔で送り出してくれるんでしょうね。
あなたは、とても優しい人だから。
だからみんな、あなたの名前を利用してわたしに元気になるようしつこく言ってくるんです。
まるで、あの時の出来事がとっても不幸な事故だったとでも言うように。
わたしだけは忘れてないからね。あなたはそんなふざけた理由でいなくなったんじゃない。
わたしだけは、ちゃんと覚えているから。
それにあいつの顔なんか見たくないの。あいつの顔を見たらきっとわたしは壊れてしまう。本当に怖い。
だから、わたしはあなたと生まれ育ったこの村を出て行くことにしました。あなたは悲しむかもしれない。あなたがいれば、わたし

はきっとこの場所にいつまでもいたから――でもね、どんなに離れても、わたしたちは絶対に一緒だよ。
だからどうか信じて下さい。わたしもどんなことがあっても信じているから。
だから寂しくない。
絶対に寂しくない。
そうと決まれば話は早いとばかりに、今旅立つ準備をしています。これは大人への第一歩だから、お母さんの手伝いなしでわたし一人、きちんと立派に荷造りしています。えらいでしょ？　ちょっと前まで、こんなこと考えてもみなかったのに、何だか自分でも大人になったようで誇らしい気持ちになったりしてます。
もっとも、一人の時間を取ることが出来て気が楽なんですけどね。でもあの人がしょっちゅう顔を見に来るので元気なふりをするのが大変です。わたし、女優さんになれたりするかな？
場所はこの村からとっても離れた教会の寄宿学校――そこで、教会の仕事に就くための勉強をするんです。わたしは元々勉強も出来て行儀がよくて優秀な子だとみんな褒めてくれて、そこで元の明るいアンナに戻れるようにって、あの人が熱心に勧めてくれたんです。
これは、子供たちを救う大切な仕事らしいです。だったらどうして、あなたは救われなかったんでしょうか？　神に仕えてる身分だったら、どうしてあんな理不尽な運命からあなたを守れなかったんでしょうか？　――ごめんなさい。また悪いことを考えてしまいました。本当にごめんなさい。
正直言って、あまり興味がありません。でも、勉強は嫌いではないのできっとためになったり、将来いろいろ役立つことがあるんだって、ちょっとだけわくわくしています。一人になって大変かもしれませんけど、わたしが自分で決めたことなので、どんなことがあっても逃げずに頑張ろうと思います。
どうか、どこかで応援していて下さいね。
わたしが決めたこの新しい道を、どうか無事進み通せるか見守っ

て下さい。
あなたがいるから、わたしは頑張れる。だからわたしは、わたしを信じて未来を進んでいこうと思います。
向こうに着いても手紙書くからね。それじゃ、今日はおやすみなさい。
明日いよいよ、旅立ちです。興奮して眠れないかも。

＊

これは息抜き、男にはこういう時間が必要なのだ。バレなければ誰も傷つかないし、誰も損しない。利害がきちんと保護されるのだ。
体のいい言い訳はこれ位にしておこう――デニス・ハートマンは目の前の娘に意識を集中した。
金で買える男と女の極上の幸福。これぞ男冥利につきる。
娘の名はメアリーと言うらしい。ありふれた名前、偽名として扱うにはちょうどいい名だ。知り合いに似たような名前がいたが思い出したくない。
嫌でも思い出してしまう。よくある女の名前だと一蹴する。
家には、新しい妻と幼い我が子が待っている。もちろん二人は誰よりも大切な存在だ。だからこそ、この楽しみに散財は禁物だと自分を戒めている――別の女に体を開かせるという、妻からすれば悪魔の所業とすら罵られる行為の是非など顧みずに。
少し位、後悔しないよう生きたっていいじゃないか。人生は一度きり。やり残したことなど、ましては後悔などしたくない。
生き残って以来、彼は利己的な考えに取り憑かれてしまったのかもしれない。果たして、それを心より責められる存在はいるのか。
久々だからと慎重に選ばせてもらったが、なかなかの上玉だったようだ。少しばかり年をごまかしているかもしれない――幼めの顔立ちだが、体は思った以上に大人びている。成熟しきっているといっていいかもしれない。それでもよかった。それを上回るほどの快

楽を得られたのだ、嘘やごまかしなど、この世界では常識。報酬に見合った対価を得られれば、それだけでいいのだ。
ふと、娘――女と言いたいところだが、成熟した大人の顔よりも、幾分幼さを隠しきれない少女の顔の方が大きいので、そう彼は呼称することにした――の腹部に妙な傷があるのを発見した。
縦に走る、切られたように残る、痛々しくもそれでいてきれいな傷跡。
娘は嫌な顔一つすることなく、デニスに傷のことを話してくれた。ちょっとばかり厄介
な病気になって、子宮を取る羽目になった。大変だったけど天才的な医者と巡り会ったおかげで、こうして今元気に生きられて感謝してるけどね。
代わりに、子供が出来ない体になっちゃったけど――一瞬、深い悲しみに沈んだ娘につられ、体を重ね合わせていたデニスの顔も悲しみに沈んだ。
命が生み出せない悲しみの深さか。男である身分では本当の意味で分からないとしても、少なくともそれを失う悲しみはよく分かる。
だからこそ、今新しく手に入れた命を大切にする――などとのたまっておいて、この行いはどうなのだろうか？
デニスは自分の背負った悲しみだけを重点的に思い、こうして快楽を共にする娘に同情の念を抱いた。気の利いた言葉が見つからない分、自分なりの精一杯の思いやりを込めて言った。
「大変だったな……でもよ、幸せなんてどんな奴にだって平等に降ってくるもんだ。何も子供出来ないからって女として落胆することねえよ。出来ない分だけの幸せってやつを、神様はちゃんと用意してくれてるさ」
ありがとう。あんた、いい人でよかったよ――自分たちの関係性など忘れ、娘は穏やかな笑みで告げた。
深い悲しみがつきまとっていたような娘の瞳に、一瞬希望の光が見えたような気がした。

何だか、とても幸せな気持ちになれた。まだ行為の途中だ、興奮するのは早すぎる。自分でそう考えても、頭と体が異様な熱を持っているような気がして、どんどん何も考えられなくなった。
それさえも、よく分からなくなっていた。
視界がぼやける。天井がよく見えない。部屋の家具さえ何が置いてあるか分からない。体から娘が離れたような気がした。ああ、おそらく終わったから隣で休憩しているのだろう。
それにしてもいい娘だ。きっと、こんな仕事をしていても根は優しいのだろう。貧困がそうさせるのだ。そのうちこんな生活から抜け出せればいいが。
ふと、一体何を考えているんだと我に返る。気づいた時、体はもう動かなかった。
「……！？」
声も出せない。手足はおろか、首さえ動かせない。
恐怖と戦慄が瞬く間に全身を支配した。デニスは本能的に何かをしようとしたが、出来なかった。
無様なほど、何も出来なかった。
ふと、何か気配を感じた。
よく知っているような気がしたが、すぐに違うと慌てて否定するほど、恐ろしい闇を思わせる気配。
誰かが来る。しかし逃げられることなど出来ようか。
最初から、全てはこのためだったのかと、デニスは本能的に悟った。
それは目の前に、ゆっくりと現れた。
よく知っている、忌まわしい存在。
初めは、とても大切な存在だった。どんなことがあっても、周りがどう思おうと大切にすることを誓った愚かな記憶が蘇る。
地獄を見せられ、裏切られた怒りに我を忘れるよりも凄惨な苦しみを味わい、深すぎる悲しみを断ち切るのに必死だった。そして逃げ出し、新たな幸せを手にするまで悪夢の日々だった。

ようやく、忘れられたはずなのに。
また、人生を取り戻せると思ったのに。
どんどん、黒い影が近づいて来る。
嫌だ、嫌だ。お前なんかに、お前なんかに俺の幸せを壊されてたまるか。
やっと逃げられたのに、やり直せると思ってたのに。
意識が遠のいた。このまま、何も出来ないまま闇の世界に引きずり込まれるのか。
何かが見えた。
かつての妻がいた。大勢の村人がいた。
皆、こちらに憎悪の目を向けて待ち構えている。
まるで、こちらを地獄へ引きずり込もうとするかのように。
ああ、あいつは俺をこんなにも恨んでいるのか。俺が忘れて別の女に乗り換えたことを、こんなにも恨んでいるのか。
地獄への門が開かれる前に、急激に彼の意識は現世へ引き戻されることとなった。
それは、今闇の世界で待つ懐かしき人々が味わった同じ苦痛を味わうためだった。
それが、デニス・ハートマンの最期だった。
過去を捨て、新たなる道を選んだはずの男に待ち構えていた、想像を絶する落とし穴だった。

真実への失望

大切なあなたへ。

今、わたしはとっても楽しい日々を過ごしています。想像していたよりも、すごく楽しくて充実した日々。わたし、きっとここで上手くやっていけそうな気がします。

勉強とか寮の暮らしでの決まりとか、覚えなきゃいけないことがたくさんあります。今まで村でのんびり暮らしてきたけど、これからはそうもいかないようです。でもきっと大丈夫。みんな優しくていい人たちばかりで、わたしはきっと頑張れることでしょう。

今、これを書いてる手も嬉しくて跳ね回ってしまいそうです。

でも心配しないでね。どんなに環境が変わったって、あなたのこと絶対に忘れないから。

わたしだけは、あなたのことを忘れたりしないから。ましてや、踏み台にするなんてそんなひどいことしません。

それじゃあ、今日はこれ位で。

明日もまた、楽しいことをたくさん書くから楽しみにしててね。

ずっと大好きだからね、おやすみなさい。

＊

数日の旅の間、少しでもこの二人に信頼を寄せ始めていた自分がとてつもなく愚かだと思えた。

そして、たまらなく悔しかった。

今、こうして目の前で対面するデニスの兄貴の変わり果てた姿に恐怖し、あるいは涙することがないのが、ある意味せめてもの救いだったのかもしれない。

いや、沸騰した怒りでそれらの感情など分からなくなっていたのだろう。

「どういうことなんだよ……どういうことだよ！？」
デニスは、一人密かに滞在していた小さなとある町のさびれた宿屋にいた。別の街でささやかながらも幸せに暮らす妻とその子には、すぐにでも知らせが届くだろう。
ご主人は、殺害されました。
売春婦と密かに戯れていた宿屋で無残に。
おそらく、手口から指名手配されているウイリアムス・ブレイクの犯行だと思われます。
デニスの兄貴は、宿屋の一室――たった一人で、ベッドに横たわっていた。
全身を激しく殴打され、顔はおろか、その身分さえ判別するのが難しいほどに変わり果てた姿で血にまみれ――血と肉、体液の臭いが入り交じった室内は立っているだけで気分が悪くなりそうだった。
あいつは、やはりあの頃と何も変わっていなかった。どうして、どうして二年も経ってデニスの兄貴にまで――ジョシュアが不条理な現実に絶望していた時、至って冷静なマーサが「やっぱりね」とつぶやくのが聞こえた。
すぐにどういう意味だと詰め寄った。
「あら、やっぱり何も知らないみたいなのね？」
気づけば、ブレイクに関する詳しい話は何も聞かされていなかった。いや、むしろ聞きたくなかったから、それでいいのだと勝手によく分かっていないこの現状を享受していたのかもしれない。
強い決意など、何も持っていなかった――そんな当たり前の事実を、自分を冷たく見据えるマーサの目で気づかされた。
この二年、滅んだアムール村の生き残り、世間より激しく罵倒されるべき呪われた一族――ブレイク家の人間であることをひた隠しにして生きてきた。どれほどお調子者で狡猾、冷徹で世渡り上手で頼りがいのある少年を演じていても、心の底ではいつも恐怖でいっぱいだった。
もし、自分の素性や本名が知られたら――努めて平静な顔をしつ

つ、必死にごまかし続けることに精一杯だった。
だからこそ、無意識にウイリアムス・ブレイクの情報を聞かないようにして過ごしてきたのだろう。
事実、この二年奴の動向を一切知らずにいたのだから。
マーサはデニスの元へ向かう道中、ジョシュアがそのことを問いただしても、すぐに詳しいことを話さず――もっと大事な場所で話すべきだと、何も話してはくれなかった。フォスターもそれに倣い、その件に一切触れず歩み寄りだとばかりに自身の身の上話を一方的にするだけだった。
「彼が殺された理由、分かるかしら？」
マーサは怒りで我を忘れかけているジョシュアを諭すよう語りかけた。
「二年前、ブレイクはアムール村で大勢の村人を惨殺した後、逃亡中次々と生き残った村人を捜し出しては殺していったわ。デニス・ハートマンもちょうどその犠牲になったみたいね」
「……！？」
「奴がなぜ、わざわざ生き残った村人を捜し出してまで殺しているのか――残念だけど、まだ何も分かっていないわ。私の母もなぜ殺されたのか分からない」
ただ一つ言えることは、とマーサは続けた。
「奴は、『悪人』を殺しているのよ」
「悪人……？」
一体何の話をしているんだよとばかりにジョシュアの目が思わず嫌な光を持ったが、彼女は無視した。
「あなたが押し入った家の老婆は守銭奴で、金のためには人の命すら惜しくなかった人間だった。二年前からブレイクはアムール村の生き残りを捜す一方で、そういう人間達を大勢殺しているの。強盗殺人犯でありながら証拠不十分で無罪放免になった男。大勢の子供達をさらっては殺したと噂される辺境に住む精神を病んだ領主。中には、周囲から五人の子供を養う働き者で善良な母と慕われていた

女も惨殺されたわ。そして調べてみたら、女は辺境で勃発した内紛中親友の子供を見殺しにしていた事実が判明した。戦争で余裕がないから、自分の子供たちを守るため仕方なく預かっていた二人の姉弟を追い出して餓死させた――その事件は悲惨だったわ。母親だけじゃなくてその再婚相手に五人の子供たちまで、まるで全員姉弟の死に荷担した共犯者だと言わんばかりに皆殺しにされた」

「……ひでえ」

それしか言葉が見つからなかった。

なんて、残酷な人間なのだろう。

改めて兄をそう思い知らされた。いや、兄とすら思うだけでもひどく罪深い。

今思えば、一二才で殺人を犯した時点で奴はれっきとした異常者だったのだ。

なぜ、その事実に誰一人気づけなかったのか？

なぜ、結果的に奴を野放しにしてしまったのか。

奴は反省などしていなかったのだ。

奴は、心の奥底に巣くっていた殺人衝動に負けたのだ。そしてそれは早く葬り去られるべきはずだったのに、誰も事の重大さに気づけず暴走を許したのだ。

ジョシュアが絶望と怒りで肩を落とす姿を、マーサはじっと見つめるだけだった。

そして――ふっと、静かに笑った。

「？」

なぜそんな顔を？　顔を上げたジョシュアの疑問に彼女は冷酷に答えた。

「確かに、奴は『ひどい』わね。だけど、冷静に考えたら――奴は殺されて当然の連中ばかり殺しているわ」

まるで、自分が処刑人にでもなったようにね――そう続けて、マーサはぞっとするような冷笑を浮かべた。

「何言ってんだよ、お前」

ジョシュアは別の怒りで表情を変えたが、彼女の冷笑に想像以上に怯えてもいた。側で、様子を見守っているフォスターが緊張したような気がした。
「だってそうでしょ？　殺された連中は、根っからの極悪人から、善人の振りをした極悪人ばかり――最後の母親なんてひどいじゃない？　自分の子供を守るっていうきれいごとで他人の子供を殺したのよ――自分の手も汚さずに、同情されるべき理由によって誰からも責められずに」
「だからって、子供には何の罪もないじゃないか！？」
「あなたがそんなこと言えるの？」
「……！」
「マーサ、それ位にしておいて下さい――」
「同じ立場で原因を作った――それだけで同罪なのよ。他人や環境のせいにするのは簡単だわ、そうやって裁くべきものを裁かないから、こんなことになったんじゃない！！」
マーサは激しく吐き捨て、デニスの亡骸を指差した。
その瞳には、強くジョシュアと戦ってみせると言わんばかりの強い光が宿っていた。
見つめる相手に、何も言わせないほどの強い光。
「ブレイクは村の脅威を守るため殺人を犯した。そしてまだ少年、将来を守らなければならない――そんなきれいごとを並べて、母は率先してブレイクの世話を焼いたわ。私もそんな母が誇りだった――正直言うとね、彼女は裁かれたんだと思ってるの。殺した相手に関係なくね……」
そしてちらりと、血まみれの骸となったデニスを一瞥する。
「この男だって――アムール村の滅亡に荷担した極悪人よ。当然のように許された愛や友情を出汁に、人殺しを受け入れ奴の凶行を引き起こしたれっきとした罪人よ」
「やめろっ！！」
「そろそろ怖がるのやめたら？　あなたはブレイクの弟として義務

を真っ当しなきゃいけないのに、どうしてそうやって理解すべきことを理解しようとしないのよ！？」
「違う、違う！！」
「違わないわよ！！　私たちはね――生まれながらの罪人なのよ。あたしもあんたも、殺されたみんなもどうあがいたって地獄行きなのよ！！」
「マーサ――！」
バシッ――！！
一瞬の沈黙が流れたような気がしたが、それはとてつもなく長い時間のようだった。
しかし、それはやはり一瞬のことですぐに現実に引き戻される。
右手の平に残った感触で、気づかされた。
たった今、マーサを平手打ちしたのだと――拳でなかったことは、わずかな理性と良心が働いた結果か。
「……ジョシュアさん？」
荒い息をつき腕を上げたまま、目を見開きただ立ち尽くす彼の姿に異様なものを見るように、フォスターがこちらを見ているのを横目に感じた。
マーサはじっと、平手打ちされた頬を押さえて彼を見つめた。痛みなど微塵も感じていないと訴えているような強い瞳で。
「……もううんざりだよ。口開ければ人をゴミみたいにしつこく罵倒しやがって――挙げ句死者にまで無神経にムチ打つような卑怯な真似までしてよ……お前、最低だよ。どうしてそこまで他人に冷たいこと言えるんだよ？」
ジョシュアはそう、努めて冷静に彼女に問いかけた。
マーサは何も言わなかった。
あくまで挑戦的な眼差しで、じっと静かに睨みつけるだけだった。
何か言えよ――イライラさせられて、腹が立って、やりきれなくて仕方ない。
そんな彼の様子に気づいて、マーサはまた冷笑した。

だめだと悟った。
これ以上、我慢する必要はない。
「お前なんかと一緒にいたら、デニスの兄貴に顔向け出来ねえ」
一体どんな言い訳をしているんだ――ジョシュアは自分でも訳が分からなかったが、無視して考えないようにした。
きびすを返し、部屋を出て行こうとした。
「どこへ行くんですか？」
どこまでも穏和だと思わせるフォスターの声を背中に受けて、異様に良心が咎めさせられるが懸命に無視した。
足早にこの場から立ち去ることが、最善の策であるのだと信じ込んで。
「逃げても無駄よ――教会からは逃げられない。私たちの罪からは逃れられないわよ！？」
まあ、どうせ逃げられるなんて思わないけど――侮蔑が存分に入り交じったマーサの声を振り払うように、ジョシュアは一人宿屋を後にした。
自分は一体何をしているのだろう――決して振り払えない悔しさを胸に抱き、あてもなく彷徨うことを選んだ。
それからどうするのか、どうすればいいのか、分からなかった。
デニスが死んだ悲しみさえもうなかった。ただもう、何も考えたくなかった。

＊

お久しぶりです。大切なあなた。
また、しばらく書かないでいてごめんなさい。わたしは不甲斐ないですね。だから、今こんなにも苦しんでいるんでしょうか。
きっとわたしは、大きな報いを与えられているんでしょうね。これを試練だとみんなは言うかもしれませんが、きっと違うんだと確信しています。

だってわたしは、とても罪深い存在。
例え開き直りでも、そんな風に考えて自分を納得させなければやっていけません。
ごめんなさい。わたしはずっと嘘をついていました。
あなたに悲しい顔をしてほしくないばかりに、いや、わたしはあなたにわたしの弱くて汚い部分を見せたくなかったのです。
わたしは嫌でした。あなたにあれだけ明るく頑張っている姿を見せつけておきながら、何も出来なかった自分をさらけ出すのがたまらなく、嫌でした。
そんなずるいことを考えるから、みんなわたしのことを嫌いなんでしょうね？
もう限界です。
ごめんね。ずっと楽しい日々を過ごしていると散々嘘をついてきたけど、もう耐えられなくなってしまいました。
あなたにだけは、全てを話したかったのに。わたしは、大切なあなたに嘘をついてしまった。
それだけは、してはいけないはずなのに。
世界でたった一人、大切なあなたを裏切ってはいけないはずだと、誰よりも分かっていたはずなのに。
わたしは、とても大きな罪を犯してしまいました。
ごめんなさい。
ここに来てから、わたしはたくさん裏切られました。
あの村にいるのは耐えられませんでした。あなたがいなくなってもみんな笑っている。何事もなかったように幸せに暮らすことが出来る。いつまでも悲しみに沈んでいることが罪深いことであるかのように振る舞って、わたしを苦しめて踏みにじる――何より、あなたを冒涜するようなあんな連中のいる村なんか、逃げ出したくて仕方ありませんでした。
あの女から受けた提案なんか、受け入れたくありませんでした。
それでもわたしは彼女を受け入れ、この理不尽な現実から立ち直っ

たふりをして、自分を無理矢理にでも立ち上がらせて前に進んでやろうと強く思いました。
そうしなければならないと、分かっていたから。
分かっていました。あなたがいなくても、どんなことをしても強く生きていかなくてはならないと。
でも、そんな気持ちももう限界みたいです。
毎日が悪夢です。毎日死んだように生きています。生きることは地獄です。どうか今、こうして息をしているこの現実が全て夢となって目覚めた時消えてしまえばいいのにと、毎日それだけを願うだけです。
どうしてなのかな？
どうして、あんなにも辛い思いをしたのに、またこんなにも辛い思いをしなければならないの？
どうしてみんな、わたしを悪く言うの？
どうしてみんな、わたしを悪いものを見るような目で見るの？
わたしが何をしたの？　わたしが辛い経験をしたことがそんなに悪いことなの？
わたしのせいなの？
わたしのせいで、あなたがいなくなったからみんなわたしが悪者だと思ってるの？
わたしのせいなのかな？
みんなやっぱり、わたしはとっても醜い心を持った、汚らわしい心を持った腐った人間だって気づいているのかな？
そうなんだよね。だから、わたしは今こんなに苦しめられてるんだ。
だったらどうして、あいつは今あの村で幸せに暮らしているのかな？
どうして、あいつはあの村に戻ってこれたの？　どうして、あいつはあんなにものうのうと暮らしていられるの？
どうしてどうしてどうして、あいつは生きてるの？　どうしてど

うしてどうしてどうして、どうしてあいつがあいつがあいつが。
許さない。
大っ嫌い。
全部大っ嫌い。全部消えてしまえ。みんな地獄に堕ちてしまえ。
全部、全部なくなってしまえばいい。
ほら――分かった？
わたしの心はとっても汚いでしょ？　顔すら思い出したくない位に。気持ち悪いでしょ？
だから、わたしはずっとこんな自分を隠し続けてきました。誰よりも大切なあなたに、こんなわたしを見せるのは耐えられませんでした。
わたしは、とても重い罪を犯しました。きっとこういうことなんでしょうね。
だから、人を許す資格などないのでしょう。こんな風に、人を許せない歪んだ心を持っている以上、わたしはいつまでも罪人のままです。
だからといって、許されたいと思いません。
あなたの身に降りかかった出来事をなかったことにする位なら、わたしは罪を背負ったまま命を捨てるでしょう。
わたしは、これから自分を裁こうと思います。だってわたしは、とても重い罪を背負っているから。きっと生きる資格などありません。これ以上生きていれば、この罪を持つが故に誰かを傷つけ、下手をしたら一生取り返しのつかないことをしでかすかもしれません。
そんなのはごめんだわ。そんなことをする位なら、誰かにまた責められる位なら、わたしは自分でこの人生を終わらせます。
ねえ、おかしいよね？
誰かの命を奪っても、神様にすがって深く反省すれば許されるのに、どうして自分の命を奪うことは、それだけでもう許されないんでしょうか？
誰かを傷つける位なら、そうした方がいいのに。そうしてほしか

ったのに。
誰かを傷つけた方が、よっぽど重い罪に決まってるのに――どうして、誰もそんなこと分からないんだろう？
ほら、やっぱりわたしの魂は汚れてる。
だから、わたしは自分でとても苦しい罰を与えるんです。
こんなわたしに、とってもふさわしい運命。
これでわたしの魂は、永遠に許されないものになる。きっとその苦しみはいつまでも続くのでしょう。
構いません。誰かに裁かれる位なら自分から裁いてやります。
誰かを傷つける位なら、わたしはその誰かを守るため潔く消え去ってみせる。
わたしは、あいつとは違う。
だから、ごめんなさい。
いつか会おうって誓っていたのに、わたしは今度こそあなたに会えなくなりました。
本当にごめんなさい。
だけどわたしは、どんな苦しい世界に行ったって忘れないから。
あなたのこと、絶対に忘れない。
だってこうして目を閉じただけでも、今もあなたの記憶は薄れることなく、あなたの輝く姿がはっきりと浮かんでくるのだから。
ありがとう。とても短い間だったけど、あなたと過ごした時間は楽しかった。かけがえのない宝物をありがとう。
わたしたちは、どんなに離れていても一緒だから。どんな暗闇にいても、わたしの心にあなたは消えないから。
全ての記憶をなくしても、あなたのことだけは忘れたりはしない。
さようなら。どうか、いつまでも笑顔を忘れないで。あなたに似合うのは太陽のような笑顔だけだから。
どうか、いつまでも輝いていて下さい。
さようなら。大切なあなた。
いつまでも、元気でね。

わたしはあなたを愛することが出来て、本当に幸せでした。
この愛は、わたしの永遠の誇りです。
どんなに汚れた魂を持っても、これだけは紛れもない真実です。
だから、どうか変わらないあなたでいてください。
さようなら。世界中の誰よりも大切なあなた。

＊

これからどうしよう、などと怯えたまま歩き続けるつもりはなかった。
教会など知ったことか、殺人鬼を野放しにした偽善者共。ついでに、殺人鬼に殺された被害者まで冒涜するペテン師共。
殺されていい人間など一人もいない。生まれてきてはいけない命などありはしない。
どんな命にだって、生まれて来る意味はあるのだ――飽きるほど聞かされた、生命の尊さと素晴らしさ。
人殺しを生み落とした奴がよく言うよ。
思えば、母は自分の犯した罪から逃れようと、人間達が大昔から信じて疑わない道徳心にしがみついていたのだろう。
その代償は重かったのか――逃げれば、それ相応の報いは受けるってわけか。
上等だよ。いくらでも払わせてみろよ。
ジョシュアは二年前より培ってきた歪んだ反骨精神を駆り立てられるのを感じた。高揚感とでも言うのか。
どうせオレは、ウイリアムス・ブレイクの弟だ。人殺しの弟だ。殺人鬼の弟だ。
代償なんて、この世に生を受けたことと引き換えに勝手に払わされたんだ。これだけで何も怖くない。
そうだ、何を怯えているんだ。今までそうやって生き抜いてこれたんだ。これからどう生きようと、怖がる理由もありはしない。

堂々と生きてやれ。太陽なんかどこの誰にも平等に日を照らすのだ。
ジョシュアはどんどん希望が病的にわき上がる己に戸惑うことも せず、軽くまっすぐな足取りで歩き続ける。
その道の先に待つものを、絶対的に信じているかのように。
念のため立ち止まり、後ろを振り返ってしまった――一応全力疾走であの場所から離れておいたから、誰の追跡も受けていない。監視しているのはあの二人だけとは限らない。教会の連中のことだ。物陰からこっそり見張ってる手先がいたって不思議ではない。
だったらもっと逃げてしまおう。二年も行方をくらませることが出来たのだ。見つかった理由は――そこまで考えてやめる。
これ以上、てめえに人生をめちゃくちゃにされる覚えはねえよ。血のつながりなんぞ知ったことか。
だったらオレは、もっと濃い水でも探し出してやるさ。
もう町は遠い。どんどん小さくなっていく――今頃別の町で、デニスの新しい妻と子は大黒柱の訃報を聞かされ絶望しているのだろうか。もしくはもうすぐか。
それが罰だと、マーサはあの冷たい顔で言い放つのか。罪を犯した人間を都合よく受け入れることなど同罪だ。傷つけられた者達の気持ちを顧みないことは、大罪なのだと。
自分の幸せしか考えられないような奴は死んじまえ。
くそ。あいつはとんでもない危険思想の塊だ。本当にあのパトリシア・クロフォードの娘なのか？
本当に、あの明るくて優しい幼馴染みの少女なのだろうか――ジョシュアは一瞬だけ浮かべた悲哀の表情を振り払い、強い決意を秘めた瞳をたたえ歩き出す。
過去は過去だ。忘れてしまえ。
まずは、どこか別の町か村――出来るだけ遠くの場所がいい、何とか探し出して、何食わぬ旅人を装って潜り込もう。年齢などどうにかなる。放浪する子供など別に珍しくはない。不審な目を向けて

も皆自分のことで精一杯なのだ。一人旅をする子供などすぐにどうでもよくなるし、こっちも至って平凡な少年を装えばどうにもなる。
そうやって生き抜いてきたのだ。
誰にも邪魔はさせない。
誰にも、決して――妙な視線を感じて、足が止まった。
そろそろ夕暮れ時のようだ。一人街道を歩き続けてだいぶ経つ。
てっきり、他に歩く旅人でもいるのかと楽観的にふと思った。
すぐに気づかされた。
視線が、四方八方に存在すると。
「――！」
身構えそうになったが、ひとまず腰につけた布袋をあさるふりをする――立ち止まったことに不信感を抱かれないため、咄嗟に行った行為だ。
すぐにまた、何も気づいていないふりをしてしばらく歩き続ける。
嫌でも感じ取れた。
自分をじっと監視するように、一斉に見つめるその視線が、とても憎悪に満ちたものであると。
皆一様に、示し合わせたように同じ視線だ。
努めて恐怖や戸惑いなど押し殺し、ジョシュアは冷静に足を進めた――ほんのわずか、おそらく相手が気づかないほどわずかに油断した気配をついて、全力で駆け出した。
目の前に続く道が、限りなく彼方まで続いているような一抹の悪夢を見せられる。
こんなところで捕まるわけにはいかない。こんなところで捕まるわけにはいかない。
気配が遠くなる。このまま逃げ切れる――と、油断したことが大きな災いか。
肩に激しい痛みが走った。
「――！？」
ここでやっと、今まで数本の矢が自分めがけて飛んできていた事

実に気づかされた。しかしこれ位で力尽きるかと、苦痛などものともせず走り続けてみせる。
体に妙な揺れを感じたと思った時、何も考えられなくなったような気がした。
「――！」
もっと気づけば足がもつれた。腕が動かない。足が鉛のように重い。体がいきなり重りを乗せられたような感覚に支配される。
体が理不尽に動かない。
すぐに、肩に刺さった弓に強力な毒が仕込まれていたのだと、頭の片隅で考えた。これは有名な毒だ。決して致死量がない分、強力な作用で体を数日もの間麻痺させる力を持つ。
そして、一時的にせよ意識を昏迷させる。
視界が分かりやすい位ぼやけていく。肉体に合わせるかのように、聴覚も失われていく。
恐怖や戸惑い、悔しさなど感じてる余裕などなかった。
「世話かけさせやがって」
いまいましげに吐き捨てる男らしき声を聞いたまま、ジョシュアは気を失った。

転機

お久しぶりです、大切なあなた。
本当に、お久しぶりです。
……もう、会わないと決めていました。会えないと勝手に絶望していました。
その理由を、まずはゆっくり話しておきたいと思います。でもその前に、嘘をついていたこと、もう一度謝らせて下さい。
ごめんなさい。わたしはあなたに心配をかけたくない、何より自分の弱さを見せたくないという臆病で身勝手な理由のためだけに、大切なあなたに嘘をつき、自分の人生がとても美しく輝いているかのように振る舞っていました。
実際は違います。
わたしの人生は、あなたと引き離されて以来二度と光の当たらない場所へおいやられてしまったようです。最も、そんなのは全て自分のせいだとでも、偉そうな顔をする大人たちは口を揃えるのでしょう。わたしたちのお父さんとお母さんもそんな連中の一員です。
あなたを失って分かったことが一つあります。
人は、自分自身や自分の大切な人々が犯した罪を共に受け入れ、共に生涯苦しみ悔い改めるふりをしながら、その罪さえ踏み台に己の幸福の糧とするのだと。
どれほど愛する者を失い絶望を教えられても、人はその苦しみさえ新たな幸せの土台にする強さへとすり替えていく。
人間は強い生き物だから、どれほど弱くたって、その分それを乗り越える強さだって必ずある。だからこそ、人は人を信じ、手を差し伸べなければいけない――あいつを救おうとしたあの人の言葉です。
くだらないよね？
結局、都合の悪いことを全部忘れて、それをきれいごとでごまか

してるだけなのに。
絶対に許さない。
だからわたしは、みんなから憎まれる役割を与えられてしまったのでしょうね。
偽善と欺瞞に満ちたあの村に居続けるのは耐えられませんでした。彼らに言わせればわたしなど悪意の塊。罪深い罪人でしかないのです。『深く反省し後悔している』あいつなんかよりよっぽど極悪人だって、理不尽なことを考えてる。両親はそんなわたしが恥ずかしかったのでしょう。だからわたしが自分の意志で自分の将来を決めたような顔をしたのを見て、あんなに喜んだのでしょう。
ああ、よかった。やっとあの子が死んだことを忘れてくれた。おかげでこっちも心おきなく明るく幸せに生きられる。
そしてわたしはあの村から逃げました。あいつを更正させようと躍起になってる偽善者のあの人は嫌いで関わりたくありませんでしたが、利用しない手はないと思い、彼女を信じて受け入れ、前に進もうとする少女を演じてみせました。それでも、あまり演じる必要はありませんでしたから。
事実、あなたのことを忘れてしまいたいと強く願う自分もいましたから。ごめんなさい。でも結局わたしはあなたを忘れずに済んだようです。わたしはあいつらとは違いますから。
その罰を受けたかのように、わたしは神学校でひどいいじめに遭いました。神学校ですよ？　神に仕えようと勉学を志し、信仰心をより高めようと神への忠誠心と人への愛情に満ちあふれたと褒めそやされる子供たちが、全く呆れてしまいますよね？　わたしも人のことは言えませんけど、彼女たちよりはましだと断言出来ます。
傷つけた人間よりも、やはり傷つけられた人間の方がいつまでも割に合わない苦しみを背負うのはこの世の中だと、改めて思い知らされました。
わたしは弟を殺された姉。あの事件の被害者の家族。あの村に住んでる、しかも当事者に限りなく近い存在。何も同情してくれ、憐

れんでくれなんてこと言いません。それもそれで傷つき、みじめになります。

だからって、どうしてその理由でわたしがこんなにも傷つけられ、辱められなければいけないのでしょうか？　なぜ彼女たちは、そんな理由でわたしをいたぶる結論に至ったのでしょうか？

おそらく、理由などどんなものでもいいのでしょう。たまたまわたしが、そんな重い理由を背負っていただけの話なのです。

彼女たちはかわいそう、子供が過ごすには不向きな、窮屈な戒律に苦しめられる被害者なのだと、それを生み出しておきながら善人ぶった大人たちは知ったような口を叩きます。

だからわたしみたいな人間は我慢しろって言うの？　またそうやって、罪を犯した本人を罰することなく野放しにするの？

結局こっちは泣き寝入り？　人を憎むことの愚かさを説いて、その原因を作り出した張本人さえ『愛』や『神の教え』とかいう適当なものでごまかして、許してあげるっていうの？

同じじゃない。あなたが殺された時と何一つ変わらない。こっちはただ行き場のいない怒りと憎しみを与えられそれさえ自分の心の弱さに負けた弱者だと批判され、愛や赦しを否定する罪人だと糾弾する。命があるだけでも感謝しろって言われてるようなもの、むしろ殺してくれた方がどれだけ救われるか。

復讐してやりたい。

いつも笑って人のものを傷つけて、心だけじゃなくて体まで傷つけるあいつらを全部殺してやりたい。

それでわたしは悪人になるのでしょうか？　だったら、あいつみたいに反省したふりを一生懸命すれば分かってもらえるかもしれませんね。わたしはまだ若く、あなたを奪われた免罪符があるんですもの。きっと数年のうちに無罪放免、人生をやり直すことが出来るのでしょう。

でも残念なことに、わたしにそんな度胸はありません。ただ黙って、愛すべき学友の不条理な仕打ちに耐え、大人しく負い目を抱い

た優等生として振る舞うのが精一杯です。現実から逃れるため、勉学に打ち込む毎日。神学の授業は一つも面白くありませんが、歴史や文学の授業は面白くて毎日その二つの時間だけ、授業が楽しくてなりません。何度も教科書やノートを破られ、なくされたりして大変ですが、何とか上手くごまかしています。

毎日ずっと耐え続けていました。あいつが村に戻って来ると知って逃げてきたようなものでしたが、せめてあいつがあの村でみじめに居心地悪く暮らしているのだろうと信じて、何とか生きて来れました。

どれほど反省し、村の人間が受け入れたとしても、あいつには重い十字架があるのです。それだけで、充分あいつがこれから生涯、それこそ永遠にも近い時間苦しみ続け、真の安らぎなど得られない――それは当然のことですよね？　何より、それはあなたが何よりも理解し望んでいることです。

わたしはそれを強く、深く信じ続けてきました。

それなのに、それなのにどうしてあんなことになってしまうのでしょうか？

あいつに、弟が出来ました。

よりによって、どうして弟なんでしょうね。悪趣味にもほどがあります。あいつの母親、あれだけ泣きじゃくって必死にわたしたち家族に許しをこいていたくせに、反省なんかしていなかったんでしょうね。

人間が持つ最も卑しくて吐き気のする欲を我慢出来ないような人間が、反省なんかしているはずありません。あの女もあいつを生み落とした諸悪の根源です。きっとこういうことをするのだろうと気づくべきだったのです。

わたしたちの家族は壊れた。わたしは二度と両親を信じることが出来ない。両親はわたしの本心を理解しようともしない。

何より、あなたを失った。

あいつと、あいつの家族はそんなことろくに考えもしないで、当

然の顔をして新しい命を生み落とした。
あなたなんかそっちのけで。
そんな権利ないくせに、資格なんかないくせに。自然の摂理に従うことには何の罪もないんだっていう顔をして、気持ち悪い奴ら。
毎月、両親が寂しくないようにとわたしに手紙を送ってくれていました。彼らはいつもわたしを気遣うような文面で接してきています。わたしが罪人であることに負い目があるんでしょうが、実の娘だからといろいろ考えてくれていたのでしょうね。見え見えでした。
だからよせばいいのに、彼らは戻ってきたあいつとその家族の近況まで報告してきました。
『彼が帰ってきて一年。彼ら家族に、新しい家族が一人増えました。かわいらしい男の子です。見る者を思わず笑顔にしてしまうほど愛らしい子。わたしたちも我がことのように喜び、村人総出で祝福しました。失った命の傷が癒えぬ中生まれたかけがえのない命――誕生した弟の存在を目の当たりにして、彼はとても悔いたような涙を流しました。
新しい命が生まれたことによって、やっと自分の犯した罪の深さに気づくことが出来たのでしょう。
彼ら家族は、これから重い十字架を背負って生きていくことになります。しかし、きっとそれを乗り越え強く深い絆を胸に、日々を過ごすことでしょう。それを助け、つなぎ止めるためにその子は生まれてきたのでしょう。
子供に罪などありません。生まれてきてはいけない命などありはしない。
どの命も、必ず生まれてきたことに意味はある。きっと生まれて来た彼の弟も、彼らの新しい家族になるだけでなく、共に苦難を乗り越えるため、一家の絆をつなぎ止めるため天より使わされてきた大切な存在なのでしょう。
きっと、亡くなったあの子も祝福していることでしょう。だからあなたも、かつてのような明るさを取り戻し生きて、立派な女性へ

と成長して下さい。それが生きている私たちの努めなのですから。
罪を犯した彼だって、あんなにも希望に溢れ真面目に生きているのですから。あなたならきっと大丈夫です』
――もう、限界だなと思いました。
罪を犯した人間がのうのうと幸せに暮らす。それに何の疑問も持たない周囲の人々。あなたは亡くなったんじゃない。奪われたのに。
わたしだけが、間違っているとののしられる理不尽な毎日。
だから、わたしは自らこの世界に見切りをつけることにしました。これは神への反逆として大罪ということになってるらしいのですが、こっちはもう神様なんて信じていませんからどうでいい話ですよね。神学校に入ったのだって、教会の連中を利用してやるつもりだったし。
それに、神様なんているわけない。
あなたがあんな形でわたしの元からいなくなって、その理由を生み出した人間がまだ子供だからという理由で大した罪に問われず、挙げ句今新しい家族が出来て幸せに暮らす。それに愛する者を奪われた者は何の疑問に思わない。周囲の人間も所詮他人事だからと手放しに喜んでもいる。
こんな世界に、神様なんかいるわけない。
もし偉大なる神様のいる世界がこんな世界だったら、わたしはこんな場所からさっさといなくなってやる。
あなたが奪われた現実を野放しにするような神様、いくらでも逆らってやる。
だから神様。このわたしを地獄へ堕として下さい。ほら、わたしは罪人だから。人や世界を憎むことしか知らない憐れな魂しか持っていません。
神学校には、とても高い塔があります。だいぶ古くなっているので立ち入り禁止になっていますが、忍び込むのは簡単です。
あの日、あなたにお別れを告げた明くる日――わたしは、周囲の目を盗んでその塔へ向かいました。また学友に捕まっていじめられ

たらたまりませんので、夜が明けそうな時こっそり部屋を出ました。
塔はとても古く、階段を上っているだけで崩れ落ちてしまいそうでした。それに薄暗くてお化けも出そうで――でも、こんな場所こそわたしが死ぬのにふさわしいと励まされました。
長い時間をかけ、やっと頂上へ辿り着きました。そこは想像以上に高く、神学校中を見渡せるだけでなく、その周りに広がる山や森、空の向こうと、世界中が見えてしまいそうなほどたくさんの景色を見ることが出来ました。
ここなら、わたしは心おきなくこの世界からさよなら出来る。こんなに汚い人間ばかり住んでいるのに、美しい世界を最後に見ることが出来て、思い残すことは何もありませんでした。
あなたにもう会えなくなることが辛かったけど、わたしはそれ以上にもう耐えられませんでした。
後は、この後無になって何も考えられなくなることを願うだけでした。
最後に、あなたも大好きだった青い空を見て、ゆっくり飛び降りようとしました。これだけ高いのだから、すぐ発見されてもわたしの命はないだろう、まさにちょうどいい死に場所でした。
後は何も考えず、体をゆっくり倒すだけ――不思議と、恐怖や絶望などありませんでした。この世界こそ地獄なのですから、元々何も悩む必要などなかったんでしょうね。
だから、そのままわたしは激しい痛みを感じるだけで、後はもうどうでもいいのだと思っていました。
それを、邪魔する人が現れました。
わたしは、『彼』に助けられたのです。
それはずっと――わたしが密かに求めながらも、現実に絶望し夢見ることをやめた存在でもありました。

＊

やっと、意識が頭だけでも回復出来た。手足にはしびれと不快な重みが付きまとっていると、嫌でも認識出来た。
「なんだ、もう起きたのか」
まるで親しい間柄を思わせるほど軽い調子の声が、耳に響いた。そしてすぐその違和感に気づかされる。
自分の身に何が起きたのか――冷静に考えようとした少年の思考を、無神経に破壊するような殴打の衝撃が彼の頭にもたらされた。
体が何も出来ないまま崩れ落ちる。それによって、自分が壁に背中を預けた状態で座らされていたことにジョシュアは気づいた。肉体が未だ麻痺していたため痛みが走らず、代わりに鈍い衝撃が頭を中心に居座り身動きの取れない不快感に拍車をかけていく。
見上げると、実に不愉快にさせられる笑みを浮かべた見知らぬ男が、無抵抗であったはずの彼を見下ろしていた。そいつ以外にも、同じ笑みを浮かべる男が何人もいた。
そして背後に、深く静かな憎しみをたたえる女達の姿も。
どいつもこいつも、知らない顔だった。
「ちゃんと起きろ、クソガキ」
苛立ったように男の一人がジョシュアの襟元を乱暴に掴み再び座らせる――そして、する必要のない殴打を頭部にお見舞いしてきた。
「うっ……！！」
まだ出しづらいのか、頼りないうめき声がジョシュアの口からこぼれた。
「何だ、これ位でもうへばるのか」
冷めた男の口調、異様に神経を逆撫でさせる。それだけで、今目の前にいる連中が敵であることを実感させられた。
「何だよ……お前ら」
再び男に襟元を掴まれ強引に体を起こされた――ジョシュアは素早く取り囲む連中を睨みつけた。声が出にくくてはがゆい。
すぐに今度は肩を蹴られた。倒れないように軽く、それでいて陰湿にしつこく何度も体を蹴られ殴られる。おかげで体の麻痺が少し

ずつ取れていく。
そこでやっと、両手足が縛られている事実に気づいた。麻痺が取れた時の予防線か。
しばしいたぶられた後、別の男が冷静に制止の一声を投げかけたため、一応収まった。それでもジョシュアはまたやられるかもしれないにも関わらず、連中を睨みつけることを出来ずにいられなかった。
彼らの暴力に、自分へ向けるには理不尽な怒りや憎しみを感じ取ったから。
「気持ちの悪い目だ。さすが殺人鬼と同じ血を引くだけのことはある」
襟元を掴んできた男が吐き捨てるように言い放ち、ジョシュアに侮蔑まじりの視線を向ける。そんな瞳が一斉にこちらを見下ろす――幼い子供ならば恐怖と想像を絶する困惑で、身動きも取れないだろう。
あの頃、毎日のように感じた感覚が蘇り吐き気を覚えた。
「誰なんだよ、お前ら」
弱い感情を押し殺し、強気な口調でジョシュアは聞いた。後方に立つ若い女は彼を刺し殺さん勢いだ。
「ふん。盗賊の厄介になっていただけに、威勢だけはいいようだな」
「まったく……おめえみたいなクソガキに、ここまで手間を取らされるとはな」
「卑怯だなお前ら――こんなクソガキ相手に、大の大人でよってたがって」
よせばいいのに、侮蔑の笑みを浮かべジョシュアは言い放つ。すぐに頭に拳がお見舞いされたのは語るまでもないだろう。
「このクソガキ！！　人でなしの血を引いてる分際でよくもそんな態度で――」
奴らが言わんとしていること、やろうとしていることが嫌でも理解出来る。

「それ位にしておけ！　こいつは大事な人質なんだ」
「そうよ、忘れたの？」
後方に立つ不安げな女の声――その割には、とげとげしい感情が含まれていることを嫌でも感じさせられる。
「一体、お前ら何なんだよ……！」
頬に痛みが走りながらも、ジョシュアは強く悔しげに言い放つ。口の中に血の味がするのが不快でたまらない。
「何も知らなくてのんきなもんだな――てめえの兄貴のことなんか忘れて、好き勝手に生きてきただけのことはある」
「……兄貴のことなんか、お前らに関係ねえだろ」
兄貴がどんな人間だろうと関係ない。
弟だからって、同じ罪を背負ったかのように扱われるなんておかしいじゃないか。
ずっと、そうやって不条理な世間に対して怒りを抱き続けてきた。それは二年前のあの日より始まり、今も心の深く触れてはならないほど暗い闇に包まれた場所で、暴れ回るのを待っている。
「そう……自分は血のつながった兄弟というだけで、罪はないと言うのね」
それまでじっと、背後で他の女達と共に男達が少年をいたぶる様子を眺めているだけだった女の一人が、おもむろに前へ進み出た。
痩せて青白い顔をした小柄な女だ。年齢以上に老けて見え、生気など失ってしまったかのようにか弱い雰囲気をまとっている――その割には、目の前のジョシュアを見下ろす瞳は異様な光を放っていた。
それは人間が隠し持つ、最もどす黒い感情が為せる業か。
「私の子供にだって、何の罪もなかったわ……だけど、殺された。あんたの兄さんが、殺したのよ――！」
突然、しゃがんでこちらに目線を合わせてきたかと思えば、そのか細い腕からは想像も出来ない強い拳でジョシュアの体を叩いてきた。

「あんたの兄さんが殺したのよ！　私の子供には何の罪もなかったのに――あんたはそれでも自分に罪はないだなんて言えるの！？」
女は泣きじゃくり、悲鳴にも近い罵声でジョシュアに言葉をぶつける――周りの男達に取り押さえられても、女は暴れ回り怒りをぶちまけるのをやめようとしなかった。
「人殺し！　人殺し！！　どうせならあんたが死ねばよかったのよ！！　うちの子の代わりに、あんたが死んでくれればよかったのに――！！」
心を引き裂くほどの叫びだった。
ジョシュアはただ女を見るだけで、何も考えられなくなった。
「なんでうちの子なのよー……！！　なんで、なんでうちの子まで殺したのよー……」
女はやがて泣き崩れ、男達に抱えられどこかへ消えた。残った女達が代わりにジョシュアの前に進み出て、彼女の代わりを果たさんとばかりに無抵抗の少年を睨みつけた。
思い出したと、機能していなかったはずの頭が女を見覚えのある存在だと理解する。そして連鎖反応の如く、目の前で自分に憎悪をたたえ見下ろす人々の顔が記憶に宿る誰かと、次々と共鳴していく。
皆、村の生き残りだ。
アムール村――二年前一人の殺人鬼の手により唐突に滅びをもたらされ、大勢の村人の命と共にこの世へ消え去った幻の村。
今では、かつての村はいわくつきの地として怖れられ、人々は今もこぞって呪いの土地と糾弾する。もう、あの場所に人々の営みはない。あるのはただ、想像を絶する惨劇の記憶だけ。
そして、その記憶を宿す当事者達は拭えぬ惨殺の過去を胸に、残酷な現実を生き抜くことを余儀なくされた――ジョシュアの人生も、二年前からそうやって時を刻み続けてきた。
ずっと、ずっと怖かったのだ。
あの村の生き残りというだけで好奇の目でさらされるなどかわいいものだった。

それ以上に恐ろしい現実の断片を、教会が斡旋する施設内でものの見事に教えてもらったから。
そうだ。
ずっと自分は、今目の前に広がるものから逃げ続けてきたのだ。
「かわいそうだが、もう逃げられないぜ」
ジョシュアの思考を読み取ったかのように、男が全く憐れみのない口調で言ってきた。
「お前を見つけるのは苦労したよ――ガキのくせして世渡り上手な奴だよな。さすが、ブレイクの呪われた血を引くだけのことはある」
「オレはオレだ。家族や血なんか関係ないだろ――」
台詞を言い終えた途端、今度はやつれた中年女の一人に平手打ちされた。唐突に起きた悲劇でやたら老け込んだ外見の割に、その手の力は強かった。
頬の痛みを介して、女の深い怒りを感じさせられる。
「被害者ぶるんじゃないよ……！！　あの家族に命をもらった時点で、あんたも償う義務があるんだ」
名前を覚えている。ケイトと言ったか――恰幅のよく社交的な笑顔の絶えない肝っ玉母さんを地で行くような中年女性で、旦那を尻に敷き大勢の子供達を育て上げた。あの事件が起きる少し前、新しい孫が生まれて嬉しそうだった。
せめて孫だけでも助かってほしかったと、血の海に横たわる生まれたばかりの孫を抱く娘の姿を泣きじゃくりながら見ていた姿を、思い出した。
「本当言うとな、お前を身ごもったとメアリーベルが嬉しそうに報告した時、耳を疑ったんだ。おいおい、息子が人殺しおいて新しい命かよって――でもな、俺たちもまさかこんな目に遭わされるだなんて思ってなかったからな。精一杯祝福しちまったよ」
「今思えば、あの女には感謝してるわ。こうして私たちに行き場のない怒りをぶつける相手を残してくれたんだからね」
理不尽な憎悪に取り囲まれている。

ジョシュアは常軌を逸した事態をじわじわと思い知り、生命の危機を当然のように感じた。しかし反面、怒りを覚えてもいた。彼らの憎しみのはけ口になるなど、なぜそんなバカげた状況に付き合わなければいけない。

「なんだ、不満そうな顔してるな」

「その憎たらしい顔……殺人鬼の兄によく似てるわ。人を人とも思わないクズの目ね」

次から次へと、こちらを勝手に批判しいたぶってくる――いつまでも続きそうなネチネチした罵詈雑言を聞かされていると、不意にその流れを止める手が上がった。

雰囲気だけで、最も紳士的で冷静沈着を絵に描いたような男性だと気づかされた――とても他人を深く洞察しそうな瞳に射貫かれ、ジョシュアは周囲を取り巻く憎悪以上に居心地の悪さを抱かされる。

男は、じっと自身と見つめ合う少年の前に進み出る。おかげで一際丁寧な身なりを拝むことが出来た。皆一様にやつれ過去の傷を隠し切れない古びた衣服を身に纏い、目には深すぎる悲しみと憎しみを隠し切れない様子だと言うのに、彼だけは異様に浮いている。

「君の気持ちもよく分かる――君も充分『被害者』だ。両親を失い、兄は殺人鬼。我々同様愛する家族や仲間を理不尽に奪い取られた一人だ。しかし、どれほど考慮すべき事情があろうとも、我々は個人的感情として君を受け入れることは出来ない。それだけ、我々が受けた被害は計り知れない」

「分かってるわ……あんたなんか痛めつけたって私たちの家族は戻ってこないし、あの殺人鬼の復讐にすらならない」

「それでも俺たちは――やりきれないこの怒りを野放しに出来なかった」

「お互いの立場を受け入れるのは人として当然のことだ――しかし我々はそれを考慮しようにも、起こった悲劇の大きさに為す術がなかった」

これが、我々の出した答えだ。

紳士的な男はじっと、まっすぐな眼差しでジョシュアを見つめた。
「ブレイク家の一員として、罪滅ぼしをさせてやろう」
「罪滅ぼし……？」
「そうさ。お前は兄さんを捕まえるための囮になってもらうよ」
彼らに説明された。
ウイリアムス・ブレイクはあの村の生き残りを捜しては殺して各地を回っている――そのついでのように、村とは無関係な人間を惨殺しているが。その特性を利用し、彼らはブレイクを自分達の手で捕まえる作戦を実行に移すことにした。
愛する家族を殺された復讐のために。
そのために、ジョシュアが必要らしい。
「教会や騎士団なんぞ当てにならん。元々一度殺人を犯した奴を事実上の無罪放免にした連中なんだ。あの時奴の本性を見抜けなかったような連中に、逃げおおせる奴を捕まえることなど出来んさ」
それはオレたちだって同じだろう？
かわいそうなウィル。
村を守ろうと夢中になったばかりに、大切な親友があんなことに。
あれはあまりにも不幸な事故だった。彼は悪くない、厳罰になるなんておかしい。きっとやり直せるはずだ――そんなことを皆判で押したように言っていたくせに。
自分達のことを棚に上げて、被害者面かよ。挙げ句自分達の醜態を正当化して。
卑怯者、薄汚れた卑怯者――しかし、彼らにそんな暴言を吐く勇気と資格が、果たしてジョシュア自身にあるのか。
そんな彼の葛藤など知りもしないで、連中は今回の作戦を喜々として語って聞かせる。
ブレイクを捕まえ、この手で血祭りに上げたいと望む者は大勢いる――今ここに集う元村人達は、一つの決意を胸に過去と向き合う痛みと共に、同胞との再会を果たした。
デニスのように過去を捨て新たな人生を踏み出す者もいる中、彼

らは過去の亡霊にされた愛する者達の無念を晴らす道を選んだのだ。
同じようにブレイクを憎む、ある人物の手助けを借りて。
「誰なんだよ、そいつは――！」
「それはお前が知る必要はない。お前はここでおびき出された奴の手にかかるんだからな」
「何だと……！？」
紳士的な男が、ジョシュアに憐れむような目をよこした。
「君も子供だが分かっているだろう。どれほど同じ被害者だと主張したところで、殺人鬼の家族であるだけで受ける苦痛は計り知れない――ある意味君の方が、よほど我々より辛い日々を送ってきたのではないのかね？」
男に寄り添い、同じように別の女が憐れみの目を向けてよこしてきた。まるで自分達はジョシュアの苦しみを理解し、常にその身を案じ心優しく憐れんでいたと誇示するかのように。
「だから……別に死んでも構わないだろうってわけか？」
「そう思われても仕方がない――しかし、この世にはある意味死よりも辛く過酷な現実があるものだ。我々はそれを身をもって教えられた。君が過去を完全に断ち切り別の人間として新しい人生を歩むのは難しいだろう。被害者である我々にも出来なかったのだから。ましてや君はあのウイリアムス・ブレイクの『弟』――血のつながった正真正銘の『家族』だ。君はまだ若い。この先長い人生、一生その事実を隠し通すことは厳しいと思うが」
我々は、あまりにも重過ぎる過去を背負わされた。きっと過去は、これから生涯我々を見逃してはくれないだろう。
「だったらせめて、兄の罪を償わせる手助けをすることが道理だと思うんだが？　――どのみち安穏な未来など許さないのは気の毒だが、代わりにその命をかけ、全ての人々の無念を晴らせばきっと、人々は何の気兼ねもなく君の魂が神の御許へ向かうことを祈ることが出来る。何よりも君のためだ――教会などには決して出来ない芸当だ。君は自ら殺人鬼と戦うことでその罪を浄めるのだ」

「くどいこと抜かすんじゃねえよ。自分たちの復讐のために死んでくれって素直にお願いしろよ」
さすがに腸が煮えくりかえったジョシュアは、ふてぶてしく言い放つ。この紳士ぶった男は思った以上に卑劣な奴かもしれない。
「ふん。ブレイクの血を引く人間にそんな礼儀をわきまえる必要なんかないわ」
「むしろ感謝してもらいたいな。俺たちは貴様を地獄のような一生から解放してやる手助けをするんだからな」
「……悪いな、オレは自分の運命に絶望はしても、この世を地獄だなんて思ったことは一度もねえ」
「そうか。ずいぶん前向きに生きてきたのだな――しかし、我々はそうなのだ。君の兄のせいで今も死にたくて仕方がない」
紳士的な男は、ジョシュアの胸を打たれてもおかしくない『悲惨な半生を送った少年の主張』をたやすく両断した。
「でも死ぬなんてまっぴら。せめて奴をみんなで血祭りに上げるまで死んでたまるもんですか」
一体どんな奴なんだ。
心に深い傷を負った村人達をそそのかし、一人の少年を捕まえいたぶらせ、その命を無価値なものとして何の抵抗もなく、生け贄として捧げる真似をさせるなんて。
とんでもない奴だ。しかし、そんな悪趣味で卑劣な真似をすることに何の躊躇も抱かない彼らを目の前にして、いかにウィルの犯した罪が深いかを改めて思い知らされる。
きっと、この作戦とやらを思いついた奴も――いや、とジョシュアは頭で激しく否定する。
こいつらはただの卑怯者だ。
無抵抗の人間を捕まえ理不尽な憎悪をぶつけ、自分達の不幸を勝手に押しつけはけ口にしている愚かな、ただの弱い連中なのだ。
オレは、オレは絶対にこいつらの思い通りになんかならない。
あいつにみすみす、殺されてたまるか。

あいつを捕まえるのはオレだ。
オレは、あいつに殺されるんじゃない。
捕まえるんだ。捕まえてやるんだ。
ジョシュアは心の奥に生まれ出た大きな決意を抱きながら、腹から湧き出す怒りや憎しみをこらえた。
そして後ろ手に縛られた両手をそっと、気づかれないように動かす。両足も同じように、丈夫な縄で頑丈に縛られている。
何とかして、まずは縄を解かなければ。
目の前の連中が次の行動を起こす前にと、ジョシュアの頭はめまぐるしく回転を続けていた。

＊

彼らは一体、何をしようというのだ？
密かに追跡を試みた――そしてすぐ、彼らの常軌を逸した目的を知ってしまった。
いけない。そんな真似をさせてはいけない。
愛する者を奪われた苦しみなど、当事者でなければ計り知れないだろう。その悲しみは計り知れないほど深く、そしてそれ以上に深い憎悪を得てしまうことなど、珍しいことではない。
理解出来る。
なぜなら、自分はその現実を思い知らされた身なのだから――だからといって、簡単に彼らを止められるなどとは思っていない。
ただ、純粋にやめてほしいだけだ。
それはただの自己満足だ。彼らはきっと自分を許さないだろう、最悪、自分もまた暴力の連鎖に巻き込まれることだってあるだろう。
だったらそうなる前に、全力を持って止めるだけだ。今さら誰かに憎まれ、我が十字架を糾弾され後ろ指を指される人生を怖れる必要など、ないのだから。自分にそんな資格などないと、わざわざ後ろ向きになる余裕さえ今はない。

考える時間はあまりない。まずはどうやって誰も傷つけずに上手く出来るか――そんな都合のいい方法皆無だと理解しているが、そう願わずにいられない。

きっと自分は、まだ誰かを傷つけることを極度に怖れているのだ。

一度起こした過去は消せないというのに。

影に気づいた。

自分以外にも彼らを監視している別の存在がいるのか。いや、もしくは彼らをまとめる負の存在か。だとすれば憎むべき黒幕。

すぐに、戦慄が走るのを感じた。

体が動かない。まるで想像を絶する恐怖をこれから体験することを肉体が先に感じ取ったかのように、いざ動きだそうとした足はおろか、首さえも動かせなくなった。

これは、まさか。

まさか、あれは。

魂が今まで体験したことのない恐怖を嗅ぎ取り萎縮していく。にも関わらず、消滅さえしていく気がした自我を奮い立たせ立ち上がらせることが出来たのは、自分しか知りうることの出来ない大いなる奇跡の一種か。

もしくは、何度も愛する家族を目の前で焼き殺されたことで生み出され、望まぬ形で手にすることの出来た『強さ』がそうさせたのか。

それならばきっと、家族が見守ってくれている。家族が力を与え、悲劇を止め罪なき子供を救うことを祈っているのだ。

だから、救わなければいけない。

自分が、やらなくてはいけないのだ。

運命の出会い

ねえ、すっかり月日が流れてしまいましたが、覚えていますか？
初めて、人を好きになった時の気持ち。
わたしは、そんな気持ちに包まれて幸せそうだったあなたの姿を、今でも昨日のことのように覚えています。あなたが今まで見せたことのないような笑みを浮かべる様子を、隣でずっと見ていたんですから。
情けないことですが、わたしにはそんな気持ち分かりませんでした。なぜなら、恥ずかしいことに人を好きになったことがないからです。病弱で家に閉じこもりがちだったことが理由かもしれませんが、もっと大きな原因があったのだろうと思います。今さらここで考える意味はありませんが。
甘酸っぱいものだと、人づてに聞いても分かりませんでした。そうですよね。誰だって、一度その身を持って体験しなければ分からないことってありますものね？
それでも、わたしは漠然としながらも、あなたがとても幸せそうだなと思い、見ているだけで勝手に微笑ましい気持ちにさせてもらいました。あの人たちに冷やかされて、あなたはいつも怒って子供っぽく反論していましたね。そんな様子でさえも、幸せそうでうらやましくなるほどでした。
思えば、あなたは本当に幸せだったのでしょうね。
ありふれた、何の特徴もない平和で小さな村の一つに住んで、当たり前のように泣いて笑って、そして初恋をした。
それだけでよかったのに。それ以上の幸せを望まなかったのに、どうしてなんでしょうね？　どうしてあなただったんでしょうね。
今でも代わりになりたいという気持ちが消えません。
ただ、あなたのおかげで、わたしは人を愛することの素晴らしさをあらかじめ教えられていたのだろうと思います。そしてあなたを

失ったことでいつの間にか忘れてしまった。
こんな気持ち、初めてです。それにあなたと別れて以来、こんなにも幸せな気持ちになれるとは思ってもいませんでした。
これが生きるってことなのでしょうか。
正直、後ろめたさもあります。このままこの気持ちに我が身を全て捧げてしまい、そのままあなたのことさえも忘れてしまいそうで、とても怖いです。
そんなのは嫌です。耐えられません。
だからわたしは、こうしてあなたに手紙を書くことで自分を取り戻すことを忘れないようにしています。何だか今度は、あなたを言い訳に自分を正当化しようとしている自分の卑しさを気づかされ、嫌気が差します。
だけど、そんな気持ちとはもうこれっきり。こんな暗い感情を持ったままあなたと彼に接しているなんて、大切なあなたたちを冒涜してしまうことになりますもの。
だから、わたしは少しずつ明るく生きていきたい――そんな些細な決意を抱かせてくれたのは、彼でした。
あなたを失ったわたしが、新たに与えられた希望。暗黒にも等しい今のこの現実に、一筋の光を与えられたと感じています。
彼は、わたしの命を救ってくれました。
あの時――全てに絶望し、疲れ果て、己の死さえも正当化する勢いで、わたしは両手を広げあの高い塔から飛び立とうとしました。
それを、偶然通りかかった彼が見つけ、止めてくれました。人に見つからない自信があったのに、やはり人は必ずどこかで誰かを見ているものなのでしょうね。
わたしの体が彼の力強い腕に抱きかかえられ、引き止められました。彼と共に地面に転がった時痛かったのですが、もしあのまま身を投げ出していればそれ以上の苦痛が待っていたのでしょうね。
それでも、あなたが受けた苦痛に比べればどうってことないのでしょう。あなたの受けた苦しみは、きっとその程度では知ることは

出来ないのでしょう。永遠に。
正直、なんて余計なことをするんだと怒り狂いました。わたしは我も忘れて彼に食ってかかり、暴れ回って彼を傷つけかねない状態となりました。それを彼は、わたしを冷静に諌め、どんなことをされようとも受け止め、やがてわたしも我に返りました。
彼は、当然のことをしたのです。誰だって目の前で誰かが自殺しようとすれば、慌てて止めるのが人として当たり前の行いです。
それでも、わたしには信じられませんでした。
いつも、物静かでも明るく振るまい、周りから真面目で信頼されていた彼の姿に、わたしは違うものを見ていたからです。
笑ってみせても、その目は笑っていない。いつも無理したような微笑み。誰も気づいていなくても、いつも悲しそうにしていた暗い瞳。
それはたまに、とても黒いものが宿っていたようにも思えました。しかし彼の過去を思えば仕方ないことなのかもしれません。
彼はとても、悲しい運命を与えられた人でした。わたしと同じ。いいえ、もっとひどいものなのかもしれません。でも同じように、突然理不尽な悲しみと絶望を与えられ、心に一生消えることのない傷をつけられた。
だからこそ、わたしはあまり彼と関わらないようにしていました。避けてさえいました。改めてあなたを失った悲しみと現実に向き合わされるような恐怖を感じ、彼の存在を疎ましく思ってもいました。今思えば、何て恩知らずなことをしていたのでしょうね。
こんなわたしを、彼は身を挺して助け出してくれたのです。こんなわたしに関わってしまえば、彼は自分の心の傷をえぐられることはおろか、様々な厄介事を背負う羽目になるというのに、彼は本当に勇気のある人です。
とても強くて、素敵な人。
この出来事には、きっと大きな意味があるのではないかと勝手に信じています。

だって、今とても嬉しいから。
命を救われただけでなく、わたしの苦悩に初めて気づき、ただ優しく受け入れてくれた初めての人だから。今まで出会ってきた偽善者連中なんかとは違います。
おそらく、今わたしの心を理解出来る人は世界中で彼ただ一人でしょう。こう書くと大げさで、初めて人を好きになって浮かれきった小娘の戯言だと非難されても文句は言えません。
それでも、この気持ちには正直でいたいと思います。だから大切なあなたにだけ打ち明けることにしました。この気持ちは大切なものだから、大切なあなたには伝えたかったから。
これから、わたしは立ち上がります。
彼が隣にいるから、わたしは負けません。
わたしは、わたしのままでいられるためこの世界と戦います。
だからどうか、応援していて下さいね。どんなに人を好きになったって、わたしの心にあなたは消えたりしないから。
だからずっと、わたしの思い出の中で笑っていて下さいね。

＊

どうして、こんな状況であの記憶が頭をよぎるのか。
現実逃避でもするつもりか、なんて愚かな――マーサは己を頭で叱責し、そして罵倒し軽蔑した。
二年前から始まった悪癖だ。母と共に世間より激しい誹謗中傷を受け、やがて洗脳されるように、まるで現実から逃げるように頭の中で代わりに自分自身を傷つけるようになった。そうするようになったおかげで、他人からどんな仕打ちを受けようとも平常心を保てるようになった。わずか二年の間だけだというのに、結構な精神的進歩だと密かに自画自賛している。
それでも、どれだけ強くなったと思い込んでも――この記憶からは逃れられなかった。

母はパトリシア・クロフォード。
あの『アムール村封印解放事件』――別名、『アムール村少年惨殺事件』を起こし世間を震撼させた被疑者少年の更生に尽力し、その功績を高く評価された人物。
教会の誇り。
水面下で続く騎士団との長きに渡る権力闘争において、教会にひとときの優勢をもたらしたことで、教会関係者は彼女を英雄扱いした。持ち上げるだけ持ち上げて、自分達の手柄を誇張するため騎士団だけでなく、世間にも教会という絶対的な権力と存在感を持つ神の代行組織の意義を示した。
そんな周囲の思惑に流されず、彼女が彼女のままで居続けられる意思の強さを持っていたのがせめてもの救いだったのかもしれないが、いずれにせよ無意味なことだった。
そう、何の意味もなかった。
世間の激しい非難は想像を絶する力を持っていた。それだけ失われた命が多すぎたと口で嘆くのは簡単だろうが、この感覚はやはり当事者でなければうかがい知ることは出来ない。わざわざ知ろうとする必要性などないと思うが。
教会に迷惑はかけられないと、母は教会の職を半ば放棄する形で辞し、同じく事件の影響で別の職を失った父と二人、一人娘を守ろうと人目を避ける暮らしを始めた。しかしどれほど辺境の地へ逃げおおせようとも、執拗に人々は一家を追い誹謗中傷の的とした。それは両親だけでなく娘の心を著しく引き裂くこともたやすかった。
そして、母親への絶対的な信頼も。
あの日の前日、マーサは母に自分の思いをぶちまけた。幸せだった生活が、全て母のせいでぶち壊されたと泣き叫んだ。止めに入った父にも食ってかかった。どんな状況に置かれようとも、夫婦の絆を決して壊さないほど強い精神力を持った両親がかえって悪者に見えた。惨殺された村人への後ろめたさもあったのかもしれない。きっと同じ目に遭うのが怖かったのだろう。

今もまだ、母や父に言い放った自身の罵詈雑言が耳にこびりついて離れない。
しかし、それをぶちまけたことについて未だに何の罪悪感を抱いていないのは、一体どれほどの罪なのだろうか。
せめて、母の亡骸を前にして――二度と、昨日の出来事を謝罪する術を奪われたと嘆き悲しみ、絶望する位はしてもよかったのに。
その時は、死への恐怖で頭がいっぱいだったのだ。仕方がない。
今も目に焼きついて離れない。
暗黒をまとった、母の血をまとった男の姿。まるで地獄より現れた使者の如く、それは彼女を地獄へと連れ去る役目を果たすために、そこへ現れたのだろうか。
そんな妄想など抱くのは簡単だ。
あの顔は忘れない。
どれほど不可解な闇をまとい、その身をごまかそうとも、その瞳に宿りし光はごまかしようがない。
決して忘れたりはしない。
どれほど常軌を逸した殺意と『力』に取り憑かれたとしても、それが『悪魔の所業』だと人々が嘆き怖れようとも、その目を間近で見た者の一人として、マーサは決して騙されたりはしない、とあの日誓った。
それは母を惨殺された怒りと憎悪よりも深く大きな決意として、少女の心へ宿った。そのせいか母の密葬と埋葬の時も、最後まで涙を流せなかった。父や周囲の人々は母の死とその凄惨な亡骸を目の当たりにしたせいで泣くことはおろか、感情さえなくしてしまったのだと結論づけたが、残念ながら違う。
自分でも驚くほど自分の人格が冷酷になったと気づいた時、むしろそれは都合がよかった。
「マーサ、大丈夫ですか」
「――平気よ。それより早くあいつを捜さないと」
彼と再会した時、ただ理不尽な憎しみしか抱けなかった。それで

も彼が自分を思い出してくれた時――少しだけ、嬉しかったような気がした。
そんな感情はすぐつかの間の白昼夢だと切り捨てた。今隣にいる、この人のいいだけの不愉快な男が教会の監視役だという事実に不快感を抱くこともこらえ、まっすぐな足で歩き続ける。
追い続ければ、必ず奴とまた対峙出来る。
その時は今度こそ、今度は貴様を血祭りに上げてやる。
正直な殺人鬼の目をした、悪魔のふりをしたただの極悪人め。
人を殺す快楽に取り憑かれただけのクズめ。
「また――そんな顔をしていますね」
実に丁寧な口調で心配したようなフォスターの声が聞こえた。
「どういう意味？」
意味はないが、せっかくなので顔を見て返答してやる。
「いえ……別に深い意味はありませんが」
彼女の少女らしならぬ冷徹な眼差しに怖れをなしたか、フォスターはそれ以上の言葉を避けた。
いつもそうやって、余計なことばかり考えて――彼が言わんとしたこと位理解出来た。
やはりまだ子供だから、どれほど背伸びをし過酷な旅路に身を置き、自ら残酷な世界に入り込み覚悟を抱いたつもりでも、そこに子供らしい『心』は残っているのだ。
弱さとか、そんな感情だってやはりあるのだ。やはり子供だから、少女だから。
くだらない。
そうやって大人は子供に幻想を抱き、大勢の人々が血祭りに上げられた。ブレイクは生まれるべくして生まれた存在かもしれない。
殺すのは皆『悪人』――その考えには個々人の主観や客観性を考慮し、意見が分かれるだろうが、マーサの見解は元から変わらなかった。
母は殺人犯を結果的に野放しにしたのだ。その考えは変わらない。

殺すのならいくらでも殺せばいいとさえ思う。
どうせ皆、自分達が何も悪いことをしていないと被害者面しておめおめ生き残ってる連中ばかりなのだ。まあ最も、人は多かれ少なかれ罪人として生きているなどという、反吐の出るきれいごとを言うつもりはないが。
ただ――こうして、奴に憎しみを抱き、奴を捕まえることに執念を燃やしている時点で、自分は母が殺されたことを納得する以上に、母を殺された恨みを抱いていられるのかもしれない。
どうでもいい話だ。
マーサはあの日、暗闇に包まれた居間の中央、母の惨殺死体の側に立つどす黒いブレイクの姿――その暗黒に包まれたわずかな素顔と、姿を消したその弟の顔を重ね会わせた。
幼い頃から見ていた顔と変わらない。
二人共、兄弟らしく本当によく似ていた。

＊

悪寒が走った。
すぐに気づくはずなのに、頭は現実を受け入れることを激しく拒否した。
しかし、そんな抵抗など奴の抱える闇の力めいたものの前では無意味だったのか。
「ひっ――！！」
女達が震え上がる。男達も何人か臆病な醜態をさらしかけるが、すぐに平静を保ち勇敢なる戦士ぶった表情と姿勢を繕う。
「来たな、殺人鬼」
紳士ぶった男はそれでも冷静に、この場所に迫って来る黒い影を感じつぶやく。
「怖がることなど何もない。我々にはあの方の力がついているのだ――手順通りに始めろ！！」

「はいっ」
何をするつもりだと、ジョシュアの叫びは虚しく無視される。この紳士ぶった男はずいぶんと仲間のリーダーとしてえらく信頼されているのだろうと感心させられるほど、彼らの行動はきびきびと素早かった。
実に素早く、ジョシュアを残し全員両端の壁際に張りつくように立ち尽くした。そこで初めて、魔法陣がジョシュアを中心として部屋いっぱいに描き出されていたことに気づかされた。
床一面に、とても神聖で、それでいてどこかおぞましい何かを感じさせずにはいられないようなものを感じた。意味深な銀に輝き宝石のついた置物めいたものもそれに合わせて規則的に点在していた。
よからぬ儀式を、思わせる。
途端、薬が切れかけていたはずの体がまた動かなくなった。
「……！？」
「案ずることはない。薬と違ってよく出来た仕組みだ。苦痛がないだけで感謝するんだな」
紳士ぶった男は冷たくジョシュアを一瞥すると、後は何事もなかったような冷静な様子で視線を迫る闇の気配が現れるであろう扉を見やった。周りの連中もそれに続く。
体が石のように硬い。身動きが取れないなんてものじゃない。戦慄がどんどん走っていく。
「――っ！！」
声も当然出せない。再びあっという間に新たな変化に支配される羽目になった。せっかく紐がゆるんできたのにと悔しがることすら愚かしい。
ちくしょう。こんなしみったれた部屋でこんな連中に囲まれたまま、何も出来ないなんて。
魔法陣が描かれていることもそうだが、部屋はひどく異様なものだと改めて気づかされた。
「ふふ、来るな」

紳士ぶった男はジョシュアにしてやったりの笑みを浮かべる。一体どんな自信だ、こんなくだらない部屋で集団で閉じこもってる分際で。

しかし、そんな苛立ちを抱く余裕はすぐになくなった。

どうして、こんな恐怖を抱かなければならないのだろう。どうして、こんなことになってしまったのだろう。

部屋が一気に不穏な気配に支配された。重たい、怖い、気持ちが悪い。

二年前、あの夜の記憶が突然鮮明なものとなって蘇ってきた。

＊

穏やかな静寂が、夜の闇を支配していた。

いつもと変わらない、眠りにつくには実にちょうどいい安らかな時間。

まるで世界中の誰もが、示し合わせたように眠りについているのではないかと、ジョシュアは当たり前のように思い込んでもいた。

だって、こんなにも静かな夜だもの。みんな幸せな気持ちで眠りについてるに決まってる――他の子供と違い唯一夜更かしをしないことを両親に褒められた時、そんな言葉を喜々として口にした記憶が、やけに鮮明なものとして残っている。

なんて純粋な子供だったのだろうか。

物心ついた頃から、善人ばかりが住んでいるようなちっぽけな村が隠し持つ秘密を知り、やがて心を激しく乱されその後の人生を決定的に転落させたっておかしくなかったのに。

気づいたら、『愛』といったまやかしに丸め込まれ、現実を厳しくも根は慈愛に満ちた女神の住まう楽園だと勘違いさせられたのだ。

堕ちた方が、幸せだったのかもしれない。

夜中に目が覚めることなんて初めてのことだ――などと戸惑う余裕はなかった。

すさまじい女性の悲鳴で、突然意識が覚醒したから。
「！」
目を開けたまま、一瞬悪夢から目覚めたのだと自己完結しようとした。しかし、そう思わせない異様な雰囲気を感じ取ってしまった。
そしてすぐ、上がった悲鳴はポーリーンのものだと気づかされた。
ポーリーン。
兄ウィルの幼馴染みで、村に戻ってきた兄を以前と何も変わらない幼馴染みだと受け入れ、彼の人生を支える大きな役割を果たした存在。
長い年月は、二人に友情を超えた感情を抱かせるには充分だった。彼女は兄を一生、最も素晴らしい形で支えることを選んでくれた。
とても仲むつまじい夫婦と、村人は祝福した。やがて二人の子供が生まれ、幼い叔父としてジョシュアは彼らと交流を深めた。
もうすぐ、下の長男ステファンが六才になるはずだった。いつも弟のようにかわいがっていた、大切な甥。もちろん、長女のステファニーもかわいがっていた。妹がいなかった分、余計に。
何かが起きている――よく分からないけど、何か恐ろしいことが起きている。頭で考えるより早く、体は素早くベッドから抜け出て両親の眠る寝室へと向かった。
「ジョシュア――！」
ちょうど両親もしっかりと目覚めていた。母が駆け寄り、怯える息子を抱きしめる。父は二人に決して家から出るな、隠れているんだと命じ単身外を出た。
まもなく、大勢の人間の絶叫が次々と聞こえてきた。
なぜ。助けて。逃げろ。怖い。
大人の悲鳴と怒号。女子供の泣き叫ぶ声。
それはやむことを知らない旋律の如く、神聖なる静寂を保つ村を瞬く間に支配した。
ジョシュアは母と二人、ただ訳の分からない恐怖に怯えた。現状を理解せずとも感じることだけは出来る、人の持つ本能的な恐怖心

に、体が強張った。
しかし母は強い生き物なのか――怯えるだけの無力な息子を物置に隠し、決してここから出てはいけないと命令してのけた。
従うしかなかった。
情けなく一人になるのが怖いと、扉越しに母の名を叫んで注意されて、すぐ大人しく静かになった。
妙な予感があった。
母を一人にしてはいけない。どんどん母の気配が遠くなる。
行かせてはいけない。一緒に隠れていようと言いたくても、怖くて言えなかった。全て幼いが故に抱え込む弱さによって、それは無残に打ち砕かれた。
乱暴に家の扉が開かれる音がした。あまりにも大きな音で、そのまま扉が壊れてしまったのかと思い、恐怖で耳をふさいでうずくまった。
たった今まで、わずかな勇気を引っ張り出して母を守ろうとした果敢な少年は、しっぽを巻いて逃げ出した。
ジョシュアは現実から逃げた。決して動いてはいけない。声を出してはいけない。何も考えてはいけない。
ここにいると、自ら証明してはならない。
遠くで母が悲鳴を上げるのが近くで聞こえる。それさえも強く両手で耳をふさぎ黙殺する。
呼吸すらしない勢いで、ジョシュアはその場からいなくなった。
しばらくして、辺りに異様な静けさが漂っていることに気づき、おそるおそる意識を現実へと引き戻した。
異常な静けさだったが、静かになったことで妙な安心感を抱くことが出来た。
母はどうなったのだろうかと、今さらな疑問を抱きながら、ジョシュアはそっと、扉を開けた。
そこには、母の無残な死体が転がっていた。
あまりに無残過ぎて、それが本当に母なのかどうか確信が持てな

いほどだった。
そしてすぐ側に――血まみれで不気味な笑みを浮かべた黒い影が立っていた。
大きな暗黒の塊が、その影を支配していた。
その手にはしっかりと、おびただしい血がしたたる長い棒が握られていた。
愛する母の血だと、ぼんやりとジョシュアは思った。

＊

その時と全く同じ様子で、黒き殺人鬼はそこにいた。
周囲には血の海――すぐに、自分が意識を一時的に失っている間に周りにいた連中が一人残らずやられたのだと、ジョシュアは気づいた。
あの時と同じか。
母をみすみす見殺しにした二年前のあの日と同じように、現実から逃げて人を間接的に殺してみせたのか。それも今度は大量に。
「く、くそ……」
囚われたジョシュアのすぐ側に転がりつつも、かろうじて息のある紳士ぶった男が悔しげな様子で黒を纏う影を見上げている。
彼らは、復讐を果たそうとした。
そのためにある協力者の手を借り、黒き殺人鬼をおびき寄せた。
自分達の手で愛する者の仇を取るため。
その結果がこの様のようだ。この男以外、見事にやられている。
殺人鬼の力は健在のようだ。手口も同じ――今も変わらずその手には、あの時と同じ棒状のものが握られている。それは新しい血を吸ったことで赤く輝き、忌み嫌われる力を自ら発してみせているようだ。
「……兄貴」
魔法陣の力などすでに消失している――黒き殺人鬼がこの部屋に

現れ、罠にかけるようにその力が発動され、囮にされたジョシュアだけでなく足を踏み入れた黒き殺人鬼の動きをあっという間に封じた。すぐに異変に気づきもがく黒い影の様子は、実に無様で見物していた村人が嘲笑するようだった。

しかし、そんなたやすくカゴの中の鳥に出来るなどと、果たして彼らは本当にそんなことを信じていたのだろうか。

黒き殺人鬼は兄と呼ぶ弟を無視して、紳士ぶった男に最後のとどめを刺した。返り血がジョシュアの顔にかかった。

手口も変わらない。苦しむ人間をあざ笑い、棒状の凶器でひたすら殴り続ける。相手が苦しみの中で死に絶えることに、喜びを見出しているのだ。

それが黒き殺人鬼の正体だ。それがかつて、愛する妻と子に囲まれたよき父であり夫であったという過去を持つ事実など、誰が無条件に信じてくれるのか。

むしろ、一二で初めて殺人を犯した事実の方を、皆喜んで信じてくれるだろう。何せその時と全く変わらない手口で、この殺人鬼は人を殺し続けているのだ。

「マクレインめ」

紳士ぶった男は死の間際に一言だけつぶやき、あっけなく絶命した。凄惨な最期を迎えた割にその口調はひどく冷静だった。

まるで黒く殺人鬼の冷酷さが伝染したかのように――その素顔を見ることは叶わない。なぜなら、それは文字通り黒い影に覆われて見えないのだから。

「……満足かよ？」

また、殺したんだな。今度は殺し損ねた村人を大量に殺してみせた。

せっかく生き残ったのに、自ら殺されたようなものだと、世間は批判するだろう。こんな目に遭う位ならわざわざ殺人鬼などと関わる必要などなかったのに。

だったらどうすればよかったんだよ？

逃げたって、結局こうやって追いつかれるだけじゃないか。
「こうやって……死ぬまでオレたちを追いかけ回すつもりかよ？」
一人残らず殺すまで。
ジョシュアはあの時とは違った眼差しで、兄であるはずの黒い影を見つめた。
どうして、顔を見ることが出来ない？
かろうじて口元は確認出来る。兄ウイリアムスが持っていた口元、顎。それがいまいましく歪んでいる。
笑っていると嫌でも気づく。
「楽しいのかよ？　人を殺すのが――そんなに楽しいのかよっ！？」
ジョシュアの目が涙でにじんだ。悔しくて、腹が立ってしょうがない。
どうして、顔を見せてくれない？
その黒い影は何なんだ？
体はまだ動かなかった。それでも思い切ってつかみかかってやりたいと思った。自殺行為だとしても、構わなかった。
「何とか言えよ……」
二人きりだった。周囲の人間は全員殺されている。自分の命は風前の灯火かもしれない。
あの頃のように。
それなのに、兄は殺さないまま自分の前から姿を消した。母の死体と二人きりにされ、呆然と外でまだ生き残っていた村人が絶望の断末魔を上げるのを聞くに任せた。
二度目は許さないのだと気づいた時、すでに兄は眼前に立ち棒を大きく振り上げていた。
やってみろよ。
自分の無様な現状など忘れ、ジョシュアは挑戦的な瞳で暗黒に包まれた兄を見上げた。
黒い影をまとうその顔の全体像が、わずかに見えた気がした。
その目は、とてもひどい悲しみを宿していた。

＊

助けなければと頭で思う前に、気づけば体は動き出していた。

「危ない――！！」

ただの護身用と口で語るにはいささかな大振りな剣を素早く鞘から抜き、男の振り下ろす棒を止めた。想像以上に激しい力が両腕に負荷として染み込んでいく。一瞬腕が取れるのではないかと思えたが、惑わされなかった。

なんて、すさまじい力だ。

これが、これが『黒き殺人鬼』と呼ばれる者の力か。だからこの力を持ってして、大勢の人間を血祭りに上げられたのか。

なんて恐ろしいんだ。そんな存在に、自分はこんな形で立ち向かっているなんて――ふと、もう一人の冷静な自分が、そんな自分をあざ笑っている感覚を覚えた。

お前に、殺人鬼を怖れる資格などあるのか。

黙れ。あれは事故だったんだ。

そうだな。だからお前は許してもらえたんだ。幼く未熟、ただ純粋に家族を守りたかっただけだ。だから愚かなことをしてしまったのだと同情されたから、のうのうと幸せに暮らすことが出来たのだ。

違う。俺は反省した。罪を償って生き続けようと誓ったんだ。だからその後の人生は家族のために捧げようと決めたんだ。

詭弁だな。お前は卑怯者の偽善者の鑑だ。人殺しの分際で人としての権利にしがみつき、義務と正当化し、挙げ句善人として人々に慕われようと画策して――だから殺されたんだ。お前のその反吐の出る偽善の道具として利用した愛する家族が、一人残らず皮肉にも焼き殺されたのだ。あれは報いだったんだよ。

違う。違う。家族の死に自分は関係ない。

じゃあ、あの一家の死と同じことだったと言い訳するのか？　お前は何も分かっちゃいない。やっぱりお前はゲス野郎だ。反省なん

かしちゃいなかった。更正だなんて抜かしやがった教会が生み落とした悪の手先だ。神の家から吐き出された邪悪な極悪人だ。
やめろ。やめろ。
俺は悪くない。
僕は悪くない。
悪いのはお前だ！　お前は人殺しの悪党だ。人を殺しておきながらその罰から都合よく逃れ、殺された人間が手に入れるはずだった幸せの世界でぬくぬくと生きている。
死んだ奴は戻ってこないのに。
殺した奴はそうやってやり直せるのか。
本当に自分の罪を認めるんだったら、どうして自分の命を神にでも差し出さなかった？
どうして、自分を守ってくれる家族にすがりついた？　家族との愛で自分の罪を帳消しにした卑怯者。
家族は悪くない。何の罪もなかったんだ。それなのにどうして。
お前の親はお前を生み落とした元凶だ。それによく考えてみろ。
お前が殺した人間にこそ、何の罪もなかったじゃないか。
声がもう一人増えていることに気づいた。
「――！？」
咄嗟に隙をついて、ブレイクから離れた。
互いに荒い呼吸で声も出ないと言った様子で、肩を激しく上下させ片膝をついていた。
そして気づいた。
黒き殺人鬼の身を覆っていた黒い影が薄れているのが。
「……兄貴？」
予期せぬ事態に遭遇したかのように、囚われていた少年が困惑の声を発した。すぐに視線を戻すと、信じられないものを見たような気持にさせられた。
黒い影が取れ、その顔の下半分を露出させていたのだ。あれほど深かった『闇』が、まるで聖なる力によって浄化されようとしてい

るかのように。
思わず、一瞬そう思ってしまった。
泣いていたのだ。
ウイリアムス・ブレイク――かつて、まだ幼い少年だった時、親友だった村の少年を殺し、やがて社会復帰を果たし立派に成長し、今度は故郷の村を全滅させた、史上最悪の殺人鬼。
そんな存在が、涙を流し、純粋な子供のように肩を震わせ始めた。すぐにそれは嗚咽へと変わり、ただ悲しみにのまれる存在へと様変わりした。
その手に握られた血まみれの棒と、まだ体の半分を覆う闇の影さえなければ、とても無様だが美しいものを見ていると錯覚してしまったかもしれない。
「……どうしたんだ？　一体」
思わず声をかけてしまった。普通なら考えられない行為のはずだが、そんな発想を抱く感覚はなかった。
ただ、今目の前で涙を流す存在を純粋に憐れみ、優しい心で接してみようと思っただけだ。
それは人間として当然の行為だ。悲しみにくれる存在に救いの手を差し伸べる。自分もそうやって救われたのだ。だから――自然と体が立ち上がり、彼に近づいていた。
その手が血に染まり、闇に侵食されることを構わずに、自らその手を掴んでやろうとした。
「――！！」
涙は一瞬のうちに蒸発したかのように消え失せた。そして即座に、萎縮しつつあった黒い影がその身覆い隠し、再び殺人鬼としての力を与えたようだ。
しかしその力を正しく活用することなく、ブレイクは大きく跳躍二人の前から姿を消した。
あまりにも一瞬のことだった。手を伸ばすことさえ許さないまま、黒い影はその場から逃げ去った。

残された二人に、死体の山を残して。
「……」
今まで何が起きていたのか、それさえも分からないまま、ジョシュアはしばらくぼうっとするに我を任せた。
「君――大丈夫かい？」
はっと我に返ったかと思えば、自分に駆け寄り気遣う謎の男を異質なものを見るような目で見つめてしまった。
今周囲に広がる惨状を生み出した殺人鬼に手を差し伸べようとしたのだ――自分のことを棚に上げて、男へ憎悪にも近い感情を理不尽に抱いてもいた。
そんな真似をしたから、あの殺人鬼を野放しにして大勢の人間を血祭りに上げてしまったんだ。しかし、あの涙は一体？
「ジョシュア！！」
「！」
彼女の声を聞いた途端、兄が姿を消してからずいぶん長い時間が経ったような気がした。

＊

怖い夢を見たような――ずっとそんな感覚がつきまとって離れない。
かと思えば、それがとても心地良いものだと感じている自分に気づく。
そして忘れる、恐怖と戦慄。
気づけば全ての狂気を歓喜と認識し、絶望を歪んだ希望にすり替える――それが殺人鬼、ウイリアムス・ブレイクの真実だとでも教え込むように。
愛する人々を血祭りに上げ、信頼してくれた村人を皆殺しにした男。人々は彼を人類史上最大級の裏切り者だと糾弾するであろう。
犯した大きな過ちを共に受け入れ、許し共に苦しみながら同じ道

を歩むことをよしとしてくれた大勢の仲間を、恩知らずと呼んでも足りないほどの悪意で持って痛めつけ、葬り去ったのだから。
許されたはずの男は、自らその慈愛を引き裂いてみせたのだ。
なんて、楽しくて滑稽で快感に満ちあふれた所業なのだろうか。
人を傷つけるのは、こんなにも楽しい行いだったのか。人をズタズタに引き裂き、血祭りに上げるのがこんなに素晴らしいとは。人を裏切り、その顔を絶望に染め上げながら滅ぼすのがこんなにもおかしくてたまらないのか。
愛する誰かをここまで追い詰め、後悔させるのがこんなにも崇高だとは思いもしなかった。ありふれた偽善と欺瞞に満足し、それを霞のごとく喰い潰しては自己中心の骨頂である道徳心と正義感で己の感情をごまかし、それを他者に押しつけ壮大な自己満足に浸ることに何の自覚も躊躇もない、それが人間。
特にあの村に住む連中はひどかった。
そして、あの女。
面白くてしょうがない。こんな人間達を一人残らず打ち砕き、滅亡という救済を与えることが。
奴らは裁かれたと同時に、救われた。奴らの思想に乗っ取って考えればそういうことなのだろう。
楽しい。面白くて笑いが止まらない。
思い知ったか。思い知ったか。
ふと、頭が割れそうなほど痛くなった。今の自分に違和感を抱いた瞬間、それを咎めるように苦痛が生まれた。
そして全身に走る、すさまじい痛みの嵐。それは肉体と精神を狂おしいほどに痛めつけ、決して滅ぼしはしない、ある意味最もおぞましい苦痛であった。
決して誰にも理解されない地獄の苦しみ。地獄すら生ぬるいと感じさせる。
それは、それはまるで罪人に対する憎悪以上の怨念がこもった神よりの罰のようだ。

神？
消えゆく自我の中最後に思った。
違う。
神はこんなことしやしない。
こんなことをしているのは、きっと、きっと――

過去にすがりつく者達

救出され、マーサに一言二言生命の危機と殺人鬼の大量殺人現場を目撃し、精神をすり減らされた者に対してとは思えない冷淡な嫌味をぶつけられたが、それ以降あまり記憶がない。

ジョシュアが意識を取り戻した時、そこには心配そうなフォスターの顔が間近にあった。大丈夫ですか、どこも痛くありませんかとありふれた台詞は耳に不快だったが、気の毒なその顔を傷つけないようはっきりした意識と口調で安心させた。

マーサは相変わらず、少し離れた場所から冷たくこちらを見下ろしている――その顔が、氷のような冷血ぶりを装いながらもどこか安堵した本心を隠しているような気がすると感じたが、愚かな幻だと考えるのをやめる。

そしてその背後にもう一人――とても信じられないような場所で出会った、見知らぬ男。

ひどくくたびれた外見をしていた。長旅で経験と叡智を宿したおかげでかろうじて人としての尊厳は最低限握りしめているらしいが、何も知らない他人から見れば憐れな浮浪者、一歩間違えれば逃亡中の罪人ととられてもしょうがないかもしれない。

若い頃は、もっと明るく真面目に生きてきたのか――そんな面影がかすかに見え隠れするも、長年苦痛と絶望に苛まれて生かされてきたのだと想像してしまうほど、その瞳は淀んでいた。

きっと、幸せという概念などとうの昔になくしてしまったのか。自分のように。

「――しょうがないか。そんな風に見つめられちゃ」

ジョシュアのひとつまみ程度の憐れみの眼差しに気づいたか、悪い空気を払拭するよう苦笑混じりに男は言った。

「彼から話は一通り聞かせてもらったわ。目覚めたばかりで悪いけど、説明させてもらうからちゃんと聞いててね」

本当に心配なんかしていないんだとしつこい口調のマーサに、またも流れる新たな負の空気を振り払うようにフォスターが立ち上がり、社交的な作り笑いを浮かべ食事を取りに部屋を出て行った。
ジョシュアは久々だと錯覚してしまいそうな食事を落ち着いて口に運びながら、マーサ達の話を聞いた。わざわざ食事が彼の前に運ばれるまでのわずかな時間、マーサが不平一つ言わずじっと待っていたが、ただ気まずいとしか感じられなかった。
マーサが会話の主導権を握る予定だったが、結局会話の途中で立ち位置に異を唱えるように男が台頭してきたため、やはり彼から実質直接話を聞く形になった。
男は、思いも寄らぬ身の上を話してきかせてきた。

＊

愛するあなたへ。お元気ですか？　わたしは今日も、強く生きています。
あれから、あまり時間が経っていないような気もするし、とても経ってしまったような気がします。いずれにせよ、わたしたち――特にあなた自身の身に起きてしまったことは変えようもないどころか、遠い過去の出来事となりつつあるのですね。
悔しいです。とても悔しくて、腹が立って仕方がない。でもわざわざ、あなたのことを忘れないでほしいだなんでみんなに言うつもりはありません。
だってどいつもこいつも、こっちがそう言えばつけ込んで、あなたの死をいいように利用するんですもの。あいつらがいい例。うんざりしてしまいます。いっつも頼んでもいないのに嫌味な手紙をいっぱい送りつけて。
でも、彼がいてくれたおかげで少しだけ立ち直りました。あれからずっと、片時も離れることなくわたしを支えてくれた彼が、落ち込むわたしを勇気づけようと、思い切った行動を取ってくれました。

手紙を全部、燃やしてくれたんです。いつも通りこっそり一目を盗んで二人きり、森の中でその儀式を行いました。と言っても、単純にありったけの手紙を山盛りにして火をつけただけなんですけどね。

それはとても多い数でした。改めて、自分はよくこんなくだらない嫌がらせのような手紙を平気な顔して、こんなにも受け取っていたのだと、呆れるよりもぞっとしました。

最低だね。みんなこっちの気も知らないで善人のふりをして、自分も同じこと考えてるんだって当然の顔をして。

でも仕方がないことです。わたしは大人しくて、周りから地味で控えめ、いじめがいのあるかわいそうな女の子としか見られないんですから。

病弱でも、勉強やお手伝いを精一杯する偉い子供。どんなに辛いことがあっても、決して嫌な顔一つせず自分の足で歩き続けてみせる立派な少女。

いい加減にしてほしい。でもわたしは引っ込み思案で気弱な女の子。とても家族や周囲の大人たちに楯突くような真似は出来ません。

そんなことをしたら、みんな困るもの。

みんなわたしをかわいそうな女の子のままにしておきたいんだもの。あなたのことを忘れて一生懸命生きる、苦労人の鑑として立派な女性になってもらいたいんだもの。

手紙が赤い炎に包まれていく光景を見るのは、何だか気持ちが楽になるいいものでした。それに、ちょっとだけ楽しい想像も出来ましたし。決して心から気持ちは晴れやしませんが、それは彼も同じでした。

彼はその時、初めて自分の過去を少しだけ話してくれました。今まで風の噂でしか聞くことが叶わず、どれほど仲良くしても決してわたし自身聞く勇気のなかったことを、彼が進んで話してきかせてくれたのです。

やっとわたしは、彼とほんの一歩だけでも近づき、寄り添うこと

が出来たのだと思いました。
彼にはわたし同様――いや、きっとわたしよりももっと強い大きな気持ちで――心の底から憎んでいる存在がいるようです。
「嫌いだよ。大嫌い」
いつもの彼らしくない、素直で子供っぽい一言がとても耳に残っています。愛する彼の本当の姿をほんの一部だけ、見ることが出来たのかもしれません。
初めて出会った時から、何となく気づいていましたが、彼はわたしと同じように愛する者を亡くした存在でした。いや、わたしよりもっと辛く悲しい思いをしてきたのでしょう。一度に愛する家族を全員、亡くしたのですから。しかもそれを利用され、その悲しみどころか愛する家族への深い思いさえ徹底的に潰されたのです。わたしなんかより、きっとすごく辛い目に遭わされてきたのでしょう。
それでも彼は、やはり生きなければなりませんでした。その憎しみすら封印せざるを得ない状況の中、たった一人。何て辛いこと、そして、どれほど理不尽なことなんでしょうか？　改めてそんなことを考え、怒りに震えます。
しかしこれが現実、常にそれを正義の仮面を被って強制する存在がいるので仕方ありません。わたしも彼と同じ――そんな連中を心から嫌悪し、憎むでしょう。
例えそれが過ちだとしても。わたしたちはそいつらを決して認め、許しはしない。
共に、その感情を心の奥底に閉じ込めながら、わたしたちは毎日を生きています。前に比べて、そんなに苦しくはありません。もう一人じゃないから。同じ思いを分かち合える存在がいるというのは、何て救われることでしょうか？
だからといって、あなたを失った現実を肯定するつもりは毛頭ありませんが。
でもこれって、わたしたちの関係が前進したって喜んでいいのかな？　人を好きになるって、楽しいけど何だか面倒くさいって、つ

い考えてしまいます。
男の子って、本当に女の気持ち分かってない。あなたも男の子だから、こんなこと言ってもよく分かりませんよね。こういう文句は言わない方がいいんでしょうね。お互いの欠点も、好きな部分と一緒に好きになること。誰にも教えてもらってないけど、そんな風に思います。
燃えさかるちっぽけな炎を見つめながら、握りしめた彼の手は、とても冷たかったけど温かいものでした。
このぬくもりを奪う者は、誰であろうと許さない。
彼をこれ以上苦しめる者は、誰であろうと認めはしない。
もう二度と、あなたを奪われた時のような目に遭いたくはない。
わたしはそう強く、願いました。
だから絶対に許しません。彼の心をここまで凍りつかせ、地獄を見せ、そのくせあいつのようにやはり今ものうのうと幸せに暮らす。
わたしは、彼を愛すること以上にそれを憎み続けるでしょう。
例えそれが、どれほど罪深いことだとしても。
わたしはもう、人間が矮小な頭で長い時をかけ作り上げた虚像の価値観になど、決して迎合したりするもんですか。

＊

「信じられない。子供だけで殺人鬼の追跡をさせるなんて」
「あなたみたいな存在が偶然現場に居合わせた方が、よっぽど信じられない話だと思うけど？」
心から怒りに打ち震えてるといった様子の男を冷たく一瞥しながら、マーサは言い放つ。その目に充分過ぎるほどの不審と不快感を露わにして。
「わけ分かんねえ」
どうでもいい台詞をつぶやくことしか出来ない――ジョシュアはそうして彼らとの会話に関わりたがったふりをして、その実男の青

臭く偽善と呼ぶにふさわしい匂いをまき散らすその様子に、反吐が出そうだった。
「君も、何とも思わないのか！？　あんな、あんな悲惨な目に遭ったのに――」
男の正義感の矛先を真っ向から受けたくないので、挑戦的な瞳で睨みつけ中断させた。
「最初から、あんたには関係ない話だろ？　命の恩人だからって感謝はしてやるさ。けどな、こっちの生き方にまでつべこべ口出ししていい権利があるって思い込むのはよそでやってくれねえか？」
罪なき子供を憐れむ男は、信じる者から思わぬ裏切りに遭った不本意な悲しみを顔に浮かべ、うつむきか弱くつぶやいた。
「だからって……！　あんなに怯えていたのに――」
そりゃ、怖かったさ。でもそれ以上にあいつへの怒りが勝っていたから、感情がよく分からないまま気づいたら気絶してただけだけど――ジョシュアは、聞きようによっては負け惜しみとも取られかねない台詞を喉の奥でのみ込んだ。
二回目なんだ。いちいち怖がってたらこんな旅とっくに逃げ出してたさ。一度本気で逃げようとした分際でこっそり弁解する。
顔を上げたら、まだ憐れみの眼差しを向けたままだ。嫌いだ。隣でおろおろしているフォスターも嫌いな人種だったが、それ以上に憎んでも憎み足りない何かを持っている。
やはり、同じ人殺し、だからだろうか？
フォスターが当たり前のように取り繕いに入ってくれたおかげで、男はそれ以上反論するつもりはなくなったようだ。嫌いだが、面倒なことをこうして率先して行い、面倒な人とのやりとりを進んで排除してくれるフォスターという潤滑油の存在を、否定していいわけはないのだろうと改めて思う。嫌いなのはどうしようもない事実だが。
「彼らをあまり責めないでやって下さい――元はと言えば、我々教会に多大な責任があるので、上手い言い訳は見つかりませんが……」

卑屈にならない程度に、他人の神経を決して逆撫でさせない素振りでフォスターがやり過ごしていく。時々、彼はどんなに嫌味で不愉快な台詞を吐いたところで、決してそれを責められない魔法のような力を持っているのではないかと、妙な妄想を抱いてしまう。それほど、常にその振る舞いに他者を選別し、自分のいいように振る舞おうとする人間特有の嫌らしい言動は微塵も感じられないから。

例え、相手がどんな罪人だろうとも。

マーサの冷たい眼差しで我に返り、フォスターから視線をそらす。彼らは傷ついたような表情をほんのわずかに浮かべただけだ。隣の男がますます気まずそうになった。

悪い空気が流れたが、それをすぐ断ち切るのが役目のフォスターが話を切り出した。

「それにしても……不思議な巡り合わせですね。これは何というか、その――」

「『神の思し召し』？」

おそらく、他に気の利いた表現を探そうと頭を懸命に稼働させていたフォスターの努力を無に帰すように、マーサは代弁した。お互い様だが、その表現を誰よりも忌み嫌っているくせにと、ジョシュアはそっけなく一瞥しただけで何も言わなかった。いちいち腹を立てるのは気力の無駄遣いだからうんざりする。

「悪趣味な思し召しだな」

それでも気に入らないので、悪態を少々。

「あら、命の恩人が同じ殺人鬼を追う呪われた過去を背負ってるのよ？　少しは都合良く解釈出来ないのかしら」

「また利用するつもりか？　オレみたいに」

命が助かっても、相変わらずな人間関係が解消されることはない。生きている限り、人は変わらず生きていくのだ。これが現実だ。

「あら、人聞きが悪いわね。こっちは頼まなくても、あっちはそういうつもりみたいだけど」

言って、マーサは自信ありげな瞳を男に向ける。一体何様のつも

りだ、小娘風情がと怒り狂ってほしかったが、そういう人物でないことなどとうに分かりきっている。ジョシュアは彼女に続いて、実に冷めた眼差しで男を見やった。

その表情はひどく、不愉快なほど正義感に満ちあふれていた。ずっと、あの頃から嫌いでしょうがない人間の表情だった。

＊

お久しぶりです。大切なあなた。

ここのところ、少しばかり忙しい日々が続き夜は寝るだけで精一杯。やっと一段落、こうして時間を有意義に使うことが出来るようになりました。

久々で悪いけど、最近あなたと同じように大切な彼に、何だか元気がありません。同じく共に忙しい日々を過ごしているし、何よりわたしなんかよりよっぽどたくさんのものを背負わされている身ですからしょうがないのだとお互い割り切りつつも、いつもつい思い悩んでしまいます。

前に、話したよね？　彼の過去を――彼が、愛する家族を思う気持ちを踏みにじられながらも、今も懸命に生きていることを。

あいつはいつも、彼を苦しめては平気な顔をしています。外面がいいという、この理不尽な世の中を上手く世渡りすることの出来るとても悪い意味で頭のいい奴なのですから、ですがそう諦めていても決して許せません。

一体どこまで、彼の尊厳を奪うつもりなのでしょう。いつもたくさんの人間を思いやり、自分は誰よりも神に仕える資格を持っているんだという嫌らしい自負心を善良な外面で覆い隠し、その本性を知ろうとする人間を影で潰し、大勢の苦しむ人々を救っているんだと自慢することをはばかる謙虚な好人物のふりをするのが誰よりも得意。

本当に最低。顔どころか、名前なんか思い出したくもない位大嫌

い。あなたを奪ったあいつほどではありませんが、やりきれません。
きっと世界は、こういう人間がいい顔をするからあなたのような存在が痛めつけられ、葬られていくのでしょう。だからわたしは彼も、本来ならば苦しむ必要のない、いや……むしろ苦しむことその行為が罪深いこととして、みんなに処理されてしまうんでしょうね。
戻りたい。
過去に戻りたい。
あなたが存在することに何の疑問も抱かれない、過去の世界に戻りたい。もしそれが出来るのなら、どんなことだってする。
例え彼との出会いそのものをなかったことにしてしまうとしても、それ位の代償なんてことありません。むしろ喜んで払うでしょう。ううん、それだけじゃない。彼と過ごしてきた日々を投げ出すだけじゃきっと足りません。
この命さえ売ってやります。魂だって悪魔に好きなだけ捧げてやります。今もずっと、心の奥で抱え込んでいるこの苦しみや怒り、時折抑えるのが苦しくてたまらない憎しみがもっと深く大きなものになるとしても。
わたしは、あなたを求め続ける。
今、ここにある現実を否定することでたくさんの人間の命が失われるとしても。それでもわたしは、あなたを取り戻してみせる。
ごめんなさい。何だかやっぱり、今日は疲れてるみたいですね。彼も暗い顔をしていて、ちょっとすれ違っていたりして、よくありませんね。
明日はもっと明るく生きていきたいです。どこかで見守っているあなたに顔向け出来るように。嫌なことは一旦忘れましょう。わたしじゃなければ、彼を支えることは出来ないんですもの。
強くなりたいです。悲しみや苦しみをなかったことに出来る、強い心がほしいです。
そんな大それたもの、どうやったら手に入るのかな？　ねえ、わたしはやっぱり、あの時死んでいた方が幸せだったのかな？

どうか明日が、今日よりほんの少しでも笑っていられる日でありますように。
あなたの笑顔を思い出すだけで、わたしは忘れそうになる大切なことをそうやって思い出すことが出来ます。
あなたはわたしの全てだから。奪われても、それだけは決して誰にも奪わせない。
じゃあね。明日もまた、会えるといいな。

＊

王国歴五一一年（大陸歴四六四三年）
『ジェラルド・バトラー』に関する詳細報告書

王国歴四八三年、大都市エレイソン貧民地区にてバトラー夫妻の長男として生を受ける。生まれつき健全な身体能力に恵まれ、勉学への探求心も持ち合わせ周囲から将来を嘱望された子供として成長したが、貧困故の環境の過酷さに阻まれ、幼い頃より貧民の子として苛烈な労働環境に身を置くことを余儀なくされた。
両親は共に貧民地区出身だが、周囲の人々の証言ではとても悲惨な境遇で育った人間とは思えないほど心の広い思慮深さに長けた真人間で、長男ジェラルド以下八人の子を抱える大所帯の中でも貧困に負けない明るさを持ち、どの子供達も皆両親のよい資質を受け継いだ人間性を持っていたと感心されていた。とりわけ、前述の通り第一子にして長男であったジェラルドはその両親の人間性を最も色濃く受け継いだ期待の存在であったようで、大人に混じり様々な労働をしながらも決して不平不満をこぼす素振りも見せなかった。むしろひどく謙虚で自戒的すぎるきらいがあると心配されていたが、バトラー夫妻は息子のそのような言動に不審と不安を抱きながらも、夫はジェラルドが五才の時仕事中の事故で右足を負傷、松葉杖を手放せない状態となり就労もままならなくなった。さらに妻も合計九

人もの子を出産したことが原因で病弱となり夫婦共々、事実上長男のジェラルドに大黒柱の肩代わりをさせていた状態だったので少なからず息子に依存し、意見を問うことが出来ない状態であったと後に夫妻は証言している。

貧民街で八人の弟妹と両親――周囲の援助が多少あったにせよ、当時若干一四才であったジェラルドにとってその重みは生来の苦労性であることを差し引いても想像に難くなく、後に引き起した『大都市エレイソン資産家一家強盗火災事件』の動機についても大いに情状酌量の余地があったとみなされる要因となった。なお、この事件に対する報告書は既に作成済みのため詳細は別途参照されたし。

数年後、協会関係者の手厚い処遇によって更正したとみなされたジェラルド少年は感化院を円満に退所。無事帰りを待ちわびた家族の元へ帰還し本来の生活へと戻り、事件への深い贖罪の念によって事件前以上に真面目な暮らしぶりを見せた。この姿勢を見た一部の周辺住民や騎士団関係者など、世間のジェラルド・バトラー少年に対する否定的な見解を沈静化させるに充分な働きをもたらし、さらに事件をきっかけに貧民地区への救済政策が教会を中心に行われたことによって、貧民街の住民からはエレイソンの英雄とも叫ばれた。

しかしこのような周囲の動きにも動じず、ジェラルド少年は精進するかのようにただ純粋に労働を惜しまず家族の幸福に尽力し、両親だけでなく弟妹達も兄の真人間ぶりに強く影響を受け、バトラー家は今まで以上に人々から尊敬される一族となった。

しかし、王国歴五一〇年より五一一年にかけて発生した『バトラー一族連続放火殺人事件』（※詳細は別途作成した報告書参照）によって長男ジェラルド・バトラー（当時二七）を残しバトラー家は親類縁者全員死亡。天涯孤独の身に。唯一生き残ったジェラルドは世間より激しい疑惑の目にさらされることとなり、それまでの尊敬と感謝を一身に受けていた身から、家族殺しの殺人鬼という罵倒と誹謗中傷を受ける。

結局教会騎士団の尽力虚しく事件は未解決となり、ジェラルドの

犯行を裏付ける証拠も何一つ発見されず、教会側の声明によってジェラルド・バトラーを犯人とする根拠も必然性もなく、あくまで被害者遺族であるという決定的事実があると世間に強く訴えられたおかげで、表面上の騒動は鎮静化を迎えた。しかしジェラルド本人に対する疑惑の目を完全に払拭することが出来ないまま、バトラーは教会関係者の保護下より失踪。一説には一度騎士団によって事件の犯人として拘束され、激しい尋問を受けたことが原因で人間不信に陥ったのだと噂され、事件を解決出来なかったことも合わさり騎士団側に世間の非難が集中した。さらにジェラルドが少年期に起こした事件の処遇に対して、教会側にも若年層の罪人に対する処罰を改めるべきとする世論が広まることとなった。

今現在、目撃情報が多数報告されているもののジェラルド・バトラーの消息は不明。教会側の声明ではバトラーは全ての家族を立て続けに失ったばかりでなく、あまりに凄惨な事件の犯人として言われもない中傷を受けたことにより精神に安定さを欠いている可能性が非常に高く、早急な保護が必要だとして世間に広く協力を求めている。しかし一部騎士団の中には、今なお真犯人は彼であるとする見解を強く示す者もおり事件解決を目指し捜索中であるとしているものの、あくまで保護を目的とする教会側との水面下の摩擦が懸念される。

＊

「くだらない話をしている暇があったら、早くあの殺人鬼から逃げおおせたらどうかね？」

「！」

唐突な部外者の声に、ジョシュアは神経を張り詰めさせた。同時に顔を上げると、いつの間にか開かれた扉の前に、鎧とマントをまとった、長剣を帯同する男が一人堂々とした様子で立っていた。

ひどくこちらを、冷たすぎると安易な言い方をするには礼儀に反

するかもしれない、高尚さを抱いた瞳で静かに見下ろす形で睨みつけていた。すぐに自分がベッドで座るだけの楽な姿勢のままでいることを思い出させるだけでなく、とても罪深いとも言える恥ずべき姿をこの見知らぬ男に晒しているような、周知と屈辱を過剰に抱かされたような感覚に陥らされた。

バカげている――ジョシュアは、反抗心を露骨に向きだしにした反発の眼差しで睨み返した。その瞳が浮かべているものなどに、今さら怯えてみせる必要がどこにある。

「騎士団か！？」

ジェラルドが怯えを隠すことのない様子で椅子から立ち上がり、後ずさった。すぐフォスターに肩に手を置かれ、ひとまず安心するよう諭され冷静さをすぐに取り戻した。それでも鎧の男に対する恐怖は消えてはいないようだ。そんな簡単に消えるのならこっちも苦労はしていないと、ジョシュアは冷めた心境でその様子を眺めた。

「今さら、『事件解決』に来たつもり？　ブレイクに逃げられた代わりに、こっちから重要参考人を取り上げに来たのかしら」

マーサは物怖じするどころか、畏怖堂々とする鎧の男にずかずかと近づき間近で睨みつけた。その図太さは一体どこから来るのか――ジョシュアはわずかに思い当たりがあるような気がした。

男はちらりと、マーサを無視し無様なものを見るようにジェラルドを見やった。その目に敵意は見受けられない。ただ、どうでもいいものがたまたま目に入っただけの様子だ。

「残念ながら管轄外だ」

「しかし、騎士団側にもバトラーさんの保護命令が通達されているはずでは……」

「我々の任務はあくまでも、殺人鬼ブレイクの追跡と捕獲だ。その男の保護なら、充分管轄内に入っている君がすればいい。フォスター君」

「いいのかしら。後で厄介な問題になるんじゃない？」

よせばいいのに、マーサは騎士団につっかかりたくてしょうがな

い様子で不毛な会話を続けようとしている。
教会と騎士団。王国が建国される以前の長い歴史の中、時に激しい戦争を起こすほどいがみ合い、今も表面上国家が生み出した秩序の下共存する振りをして、決して互いを理解しようとしない二つの組織。それぞれの歴史と権力にいつまでも取り憑かれたように、その存在意義を主張しては人々のために働いている大きな顔をして、結局何も正しいことをしてくれない。
教会があの時、兄貴に甘い顔をしなければみんな殺されなくて済んだのに。
騎士団がもっと、兄貴を危険人物扱いしてくれたらあんな事件起きなかった。
「人の心配をしている場合かね。子供はのんきでうらやましい」
ふと、男の視線がこちらに再び向けられていることにジョシュアは気づかされた。
「貴様らのような存在が、不必要な害悪を生み落としては被害者面をする――性善説を喰い潰す寄生虫がいる限り、我々騎士団の戦いは終わらない」
一瞬の間、静寂が走った。
「……変わりませんね、エディ」
誰にも見咎められないほどゆったりと、それでいて毅然とした雰囲気でフォスターが前に進み出た。今まで後方に下がることが自身の生き方だと言い聞かせてきた男の振るまいとしては、ひどく珍しい。
鎧の男は、今まであまり関心を払っていなかったフォスターにやっとまっすぐ目を向けた。見知った者に対する憎しみの光がそれにはあると、見る者はすぐ気づかされる。
「その台詞、そっくりそのまま返しておこう」
「……褒め言葉として受け取っておきましょう」
「ああ。そのまま一生変わらないままでいればいい。教会の愚かさをそうして世間に振りまいてくれれば、こちらとしてもそれ以上何

も望むことはない」
「知り合いなのか？」
ジェラルドはフォスターに露骨な警戒心を露わにして、少々彼から距離を離した。
「ええ……昔、いろいろお世話になりまして」
「思い出話をするほどの仲ではない。安心したまえ」
鎧男はジェラルドに冷笑を向けた。
「だが、彼には感謝しておくんだな。この男のような存在がのさばっているおかげで、殺人によって奪われるはずだった君の人生はかけがえのない、愛すべき素晴らしいものとなったんだからな」
ジェラルドが明らかに怒りに震える表情へ変わった。
「わざわざ顔見せに来たと思ったら、口でねちねちいじりに来たのか。堕ちたもんだな騎士団も」
わざわざ身のほどをわきまえずものを言ったのは、何もジェラルドの怒りを代弁したつもりではなかった。
「君も、教会によって救われた人物の一人だったな――周囲から惜しみない祝福を受けて出生した身だと、風の噂で聞かせてもらったが」
封印しておいた過去を簡単に引き出された。
ジョシュアは嫌でも思い出していく。母は自分が生まれた日の出来事を喜々として、何年もしつこく語っては聞かせてくれた。それは殺される数日前まで続いた。
ジョシュアを身ごもったと知った時、母は後ろめたさを抱きつつも、結局は神の赦しを受けたような気持ちになったらしい。あくまでも受け入れ、命の尊さを改めて思い知らされたと遠回し気味な台詞でごまかしていたが、ジョシュアは今思い返せば自分の誕生をそう都合のいいものとして捉えていた嫌らしさを隠していたに違いないと、もう信頼をとうに無くした母に対して今日に至るまで確信している。
そして自分が殺される直前まで、飽きることなく面の皮が厚いま

ま繰り返し続けたあの台詞達。
生まれて来てはいけない命などありはしない。
どんな命にだって、生まれてきたことに意味はある。
あなたが生まれてきたことはとても素晴らしい、かけがえのない出来事だった。みんなそうやって生まれてきた。あなたのお兄さんが生まれて来る時も同じだった。それほど辛く悲しいことがあったって、命の尊さを思い出せばきっと全てを乗り越えられる。みんなで支え合い、信じ合い、愛し合えばどんな暗闇にもきっと光が差し込むの。
人はそうして生きて行くの。生きて生きてどんなことがあっても生き続けるの。それはどんな人間にだって与えられた義務。そしてどんな命にだって愛される権利がある。大切にされる義務がある。そして、命をかけて愛し、守り、敬わなければいけない。
だからあなたのお兄さんは、みんなに愛されてあんなに素晴らしい人間に成長した。だからあなたもきっと、立派な青年になって愛する人と出会って、愛おしい子を授かって幸せに年を取っていくのよ。
お父さんやお母さんみたいに、いつまでもこの村で幸せに暮らすの。優しくて素晴らしいこの村でずっと、いつまでも、あなたの子供や孫にも受け継がれてずっと。
ずっと、ずっと愛して愛されて幸せに。
愛さえあれば、人はどんな苦難だって乗り越えられる。愛さえあれば、愛さえあれば。愛さえあれば愛さえあれば愛さえあれば愛さえられれば。
唐突に母の惨殺死体が脳裏に浮かんで、気持ち悪い思い出をかき消してくれた。これでいいと、ジョシュアは内心で安堵した。もう母のそんな姿を思い出して体を震わせることがなくなっていた。親不孝だとも思えなくなった。
「まだ子供とはいえ、君もよく考えれば分かるだろう。これ以上教会に何かを期待し、得ようとするのがどれほど愚かしいか――それ

でもまだ自分で自分の身の振り方を得られないと諦めるならば、君の人生もそれまでだ。己の身の上を嘆き、それを甘やかす者たちと共に潰れ自滅するのが構わないのなら、我々もこれ以上ジョシュア・ブレイクに関する教会の方針に口出しはしない」

「だったら話は早いわ。早くこの部屋から出て行って、そして私たちの邪魔を金輪際しないでちょうだい」

マーサは殺人者のような敵意に満ちた瞳を鎧男に投げて返した。さっきから繰り返している動作を、飽くなき欲望に突き動かされているように、今度はさらに力を込めて。

「本来ならば感化院に送り出して然るべき立場の少年を、『監視』という名目をつけて実質野放しにしている。本来ならば騎士団として正式な抗議を行いたいところだが、どうやら君という扱いにくい存在を後ろ盾に、教会連中はうやむやにするつもりのようだね。殺人鬼の身内まで巻き込み、まんまと教会の義務さえ雲隠れさせるとは、矮小な上層部の浅知恵にしては都合が良すぎてやりきれない」

極めて冷静に、淡々とした物言いだがその瞳は口から言葉が流れる度に、静かな憎悪と絶対的にして強気な意思が輝いていく。その目に睨まれてもマーサは身じろぎひとつせず、むしろもっと見つめていたいと挑戦的な眼差しを決してそらさない。そしてたやすく抗戦してみせる。

「ええ、教会には本当に感謝してるわ。パトリシア・クロフォードの娘というだけで腫れ物に触れるように扱ってもらって、こうして見張りを一人よこしただけで好き勝手やらせてもらえるんだもの。おまけにブレイクの弟まで手に入って――ここまでお膳立てしてもらって、ブレイクを追わずしてどんな人生を送れっていうのかしら？　きっと、あいつらのことだからブレイクを追っているのはあくまでこっちの独断だった、フォスターは二人の保護を目的に派遣されたが力不足で誠に遺憾だ。再三手を尽くしたがクロフォードの娘の暴走を止められなかった。ブレイクの弟も早急に保護し然るべき対応を取るべきだったが、最悪の事態を回避出来ず教会として不徳

の致すところだとか、仮にこっちが惨殺死体になって発見されてもぬけぬけとそう言いくるめて、平気な顔してご立派なステンドグラスと十字架の下で鎮座し続けるんじゃない？　でもそんなことどうでもいい。私の望みはブレイクを見つけて、人類史上最悪の殺人鬼として死刑台に送りつけることだけ。被害者面して泣き続ける生活なんか冗談じゃない。闘ってみせるわ、私はどんなことをしてもブレイクを追い続ける。そのせいで他人にどんな犠牲が降りかかろうとも構いやしない。どうせどいつもこいつも偽善者だらけの役立たず、自分だけがかわいいくせに自分の身を守る術なんか持っちゃいない。殺人鬼を手放しで怖がるだけで何もしない！　自分たちが生み出したことなんかこれっぽっちも考えない能なし連中のことなんか、どうなろうが知ったことじゃない――！！」

「いつまでそうして、憎悪に取り憑かれたふりをする？」

「……！」

マーサの表情が変わった。分かりやすいほどに。たった今までとめどなく内より芽生え続ける憎しみを、他人の見る目を気にせず吐き出していたとは思えないと、見る者を困惑させかねないだろう。

「そうしていれば生きやすいのは理解出来る。しかし、見ていて痛々しいものだな――君の少女特有の弱い精神状態で、そのまま突き進めば一体どうなる？　人間は他人に潰されるより自分で潰れる方が大きな力を発揮する。どれほど周囲の人間が君を支えようと奔走しようとも、母を殺された過去にすがりつき憎悪が生み出す強大な力に依存しているままでは、きっと今度は君がブレイクと同じか、それに近い道を辿る羽目になるだろう」

「……だったらそれもそれで面白いわね。人に同情されるより憎まれていた方が楽だから、考えてもいいかも」

この期に及んで、まだそんなことを言うのか――ジョシュアは口にせずとも、鎧男がそんな台詞を胸の内で語っているのを何となく感じた。

「せめて、君が教会を妄信し続ける道を選ばなかったことだけがせ

めてもの救いか。だが、どのような深い事情があろうとも他人を巻き込んでいいという正当な理由にはなりえない。現に、ここにいるジョシュア・ブレイクは君の人生をかけた復讐劇に巻き込まれ、自由を奪われるどころか命まで奪われかけた――きっと、こうして同じ部屋にいるだけでも腸が煮え繰りかえってしょうがないのかもしれないな」

言って、ジョシュアに顔を向ける。その表情がかすかに笑みを浮かべたように緩んだ気がしたのは、おそらく自分だけなのだろうとジョシュアは心の片隅でぼんやりと感じた。

「違う」

そして気づけば、口から勝手に台詞がこぼれていた。言うつもりのない台詞を。それに合わせて、体が勝手に疲労や苦痛など忘れてベッドから抜け出て、自力で立ち上がってみせてもいた。

鎧男はちらりと変わらぬ侮蔑の眼差しでジョシュアを見やる。それだけでこれから自分が行おうとする行為を否定され、阻止されているような不愉快と表現出来る恐怖心をあおられる。

しかし少年の勇気と決意はそんなものに充分勝っていたのか。

「オレは自分の意思でマーサについて行ったんだ。あいつに復讐してやりたい気持ちだって同じだ。恨むどころか、むしろ感謝してるって言ってもいい。だからそういう言い方やめてくれないか？」

「……本気で言っているのか？」

静かに念押しする鎧男の口調にひるまず、ジョシュアは強くまっすぐな目で答えた。

「殺人鬼の弟のことなんか信用出来ねえか」

悪い癖か、自嘲気味な笑みを加えてしまった。

「それは今関係のない話だ。我々は君自身が歩み寄れば、然るべき真っ当な措置を執らせてもらう。そこに君の兄など入り込む余地はない」

鎧男はジョシュアの卑屈ぶりなど意に介さず告げた。その瞳を見て、気づかされた。

そうか。今ここでマーサを糾弾でもすれば、騎士団の手厚い保護を受けられる夢のような話が待っているのか。
「あんたらには無理だよ。オレはどこにいたってウィル・ブレイクの弟だ。天下の騎士団様だろうが、どんなことをしたって守りきれやしない」
そんな選択肢を放棄する理由は、決して短絡的な考えによるものではないとジョシュアは強く否定出来た。なぜかやけに強い意志で。
「それは教会も同じではないのかね？　だからこそ君はかつてその庇護を自ら放棄し、子供ながらに過酷な裏社会で生き抜く道を進んで選んだというのに、また同じ過ちを繰り返すつもりかい？」
「オレは教会なんか信用するって言ってない」
「マーサに肩入れすることはそれと同義だ。それ位理解した上での発言だと思ったが、買い被り過ぎたかもしれんな」
いつまでも知ったような口叩きやがって――ジョシュアは鎧男とのやりとりを早急に打ち切らなければという必要性に強くかられたが、その焦りを面に出さずに済んだ。
「マーサも言ってるだろう。教会も騎士団も知らねえよ。オレたちは最初から、オレたちのやりたいようにやってきた。それはこれからも変わらない。ここまで来たんだ、泣きつく度胸があるならまた死にかける道を選ぶさ」
オレたちは、どんなことをしてもあいつを追いかけてやる。マーサの目標は、オレの目標でもあるんだ。
そんなの最初から決まってた。
ジョシュアはきっぱりと鎧男に言い放った。それ以上言い訳などないと宣言するように。
おかげでこちらの真意は、きちんと伝わったらしい。
「誠に残念だ。君の口から直接そのような台詞を聞いてしまっては、こちらとしてはどうしようもない」
鎧男は、ジョシュアからまるで見切りをつけたように静かに目線を外した。

これで、今度こそ終わったかもしれない。
「ジョシュア君……それで、いいのですか？」
フォスターがそっと優しく話しかけてきた。
「ああ。オレはもう二度と逃げない」
フォスターがこちらを見る眼差しに変化が見られた。それはすぐ鎧男に向けられた。
「エディ――ご足労おかけしましたが、今日のところはお引き取り願いますか」
エディと呼ばれた鎧男は、フォスターとしばし見つめ合い、そしてジョシュアから順々に部屋の者達をゆっくり見やってから言った。
「短い再会だったが、会えて嬉しかったよ。リチャード」
心にもない台詞を一言、かつての友に嫌がらせのような気遣いを見せ背を向けた。そのまま部屋の外にいた見張り役だったらしい部下の兵士達と共に去ってくれると思ったら、一瞬立ち止まり旧友に最後の言葉をかけてきた。
「せいぜい、マクレインの二の舞だけには気をつけるんだな。友よ、私から言えるのはそれだけだ」
「！」
ジョシュアの表情が変わった。
「バカね。みすみす救いの道を自分から壊すなんて」
それに気づかず、マーサは沈黙を破った。しかしすぐ彼の異変に気づく。
鎧男がいなくなり――最も、初めから直接聞き出すという選択肢は存在しなかったが――質問をぶつけるのは彼しかいなかった。
鎧男の最後の一言のせいか、フォスターの表情はひどく陰鬱なものへと変貌していた。
過去の亡霊に今でも苦しんでいる顔だ。
ジョシュアは本能的に、そう思った。それは人のことが言えない立場だったから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2464m/

For Lost You　奪われたあなたへ

2011年4月12日23時40分発行